

伴蒿蹊著

近世畸人傳

西京

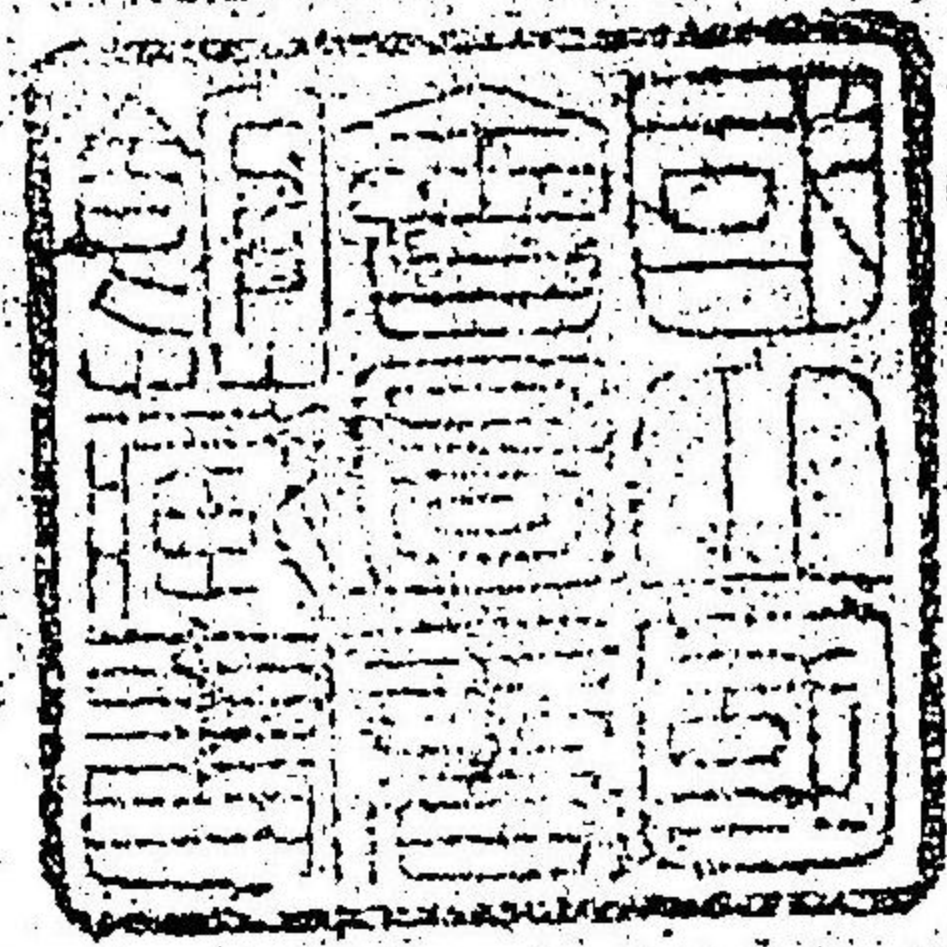
文求堂藏

281.04 B576 R

一序

畸人傳序

鷄居殼食以頤志。牆東竈北。不與藪澤二其趣。而不以高
 逸自處。椎拍輓斷。與物宛轉。肆情坦率。不自檢括。而非所
 謂任誕也。冥外以護內。雖不為同異。亦有所不為。而非所
 謂狷介也。或才藝絕人。而不求售於世。土木形骸。樸野如
 愚。或經術吏才。取仕於封君。而行藏不拘以規矩。夫謂之
 獨行乎。曰非也。稱之卓行乎。曰非也。其人固非四科之屬。
 其行不可以一端指名。不得已而強題之曰畸人。畸者何。
 曰。畸者奇也。其間有儒而奇者。有禪而奇者。有武辨而醫
 流而詩歌書畫雜伎家而奇者。要皆為一奇所掩。人不復
 知本分為何人。故概以畸人目之云。熊生世純。好奇之士
 也。從近世上遡朦國。得所謂畸人者數十員。欲狀而傳之。



260868

自嫌于聞見不廣。詢諸伴蒿溪氏。蒿溪氏曰。余之素志也。余既復次。至若干人。請合而一之。熊生善畫。乃冥搜貌神。其於服飾器用。亦皆原其代所尚。而一筆不苟下。蒿溪氏以國語爲文。宏瞻簡遠。妙盡情態。頗似臨川王形容晉人。夫其人既以崎稱之。固弗求聞達於當時。豈復屑々乎自圖不朽者耶。大約年代浸遠。聲迹湮晦者十七八。二子其奚自而得之也。蓋就其官地鄉閭跡之。或訪之耳孫遺友。或得片言隻事于敗冊蠹簡。百方蒐羅。鑽燧屢改。而纔就緒。且其事必覈實。其言必有根。至於好事者。自後附益增長者。概乎無取焉。視之彼顯人名流之宗系言行。粲然可臚列者。則勞逸爲何如也。一日。蒿溪氏以首簡授余。謁序。余曰。此範世矯俗之書也。請急傳之。或難曰。若人之崎也。

是惟性分所至。固非學而可企矣。詎可以爲範乎。曰不然。以余觀之。凡此諸人。率性而動。各求其志。其迹雖或失中行乎。至乎其不屑於當世之名利。則一搔耳。故雷霆之琴。火成之鍊。自然成趣。非待繩削而然也。夫經藝文綵。足以黼黻治具者。一技一能。通乎精微之蘊者。幅巾塵尾。經々繡々。談性理而折天人之際者。曲录拄杖。講經論。據巨剎者。世固不乏其人。而大抵與古之聖賢。其骨格終不相類者。何也。唯名之與利。爲之崇也。嗚乎。此數者。皆人之所甚難能。而遺名利之難。又有甚焉。則名利之累人也。豈特焚車攫金之類而已哉。莊周有言曰。彼其所殉仁義也。則俗謂之君子。其所殉貨財也。則俗謂之小人。有味乎其言之也。今觀傳中之人。其於古之人也。未知如何。然已有典刑

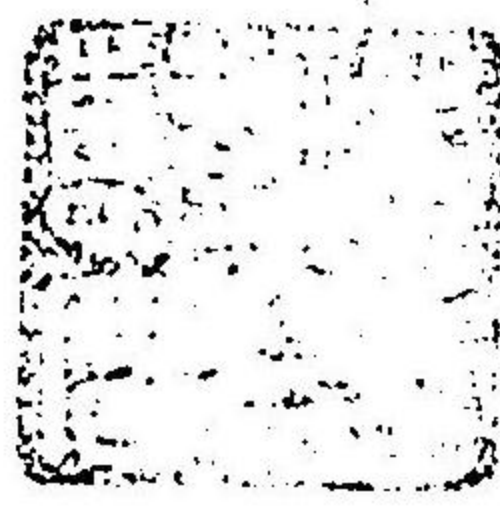
四亭

存焉。故其流風餘韻。猶足以使夫貪婪躁進之士。一披其卷。赧然自省。幡然易摻矣。謂之範世矯俗之書。亦不爲過也。若夫掩其貌。蠟其言。外遺名利。而內以爲名利之鈎者。乃此書之罪人也。賢鑑既懸。而妖魅無遁形焉。序而勸其傳。不亦宜乎

時

寛政二年歲集庚戌春三月六如散納

慈周叙於峨阜無著庵



近世畸人傳

題言

○此記のはまめ花顛三熊ぬきれ勸によりて草そ其ことぬしの段にうけさばふ。ひしはす。畸人をもて目録といへども。うのはしめ隠士を集るの志にいつれば。世にしらすぬ人。まゝ名を聞たてても。其傳はばらのあらぬを探もどめて録せるのあやし

○吾黨の人此草案を見て曰。莊子にはゆる畸人も。自畸人の一家也。此記の始は藤樹益軒二先生をあげ次々も徳行の人おぼし。この畸人をもて目へる。人のあすへき常れ道あらそやいかにと。予曰。然りしうれどもおのれが録せるとまろは意子うれもへる所少しく異也。唯廣く心得られよ此中たどへい。賣茶翁。大雅堂のたぐひの子かいとゆる一家の畸人也。仁義を任せる諸老。忠孝の敷子れまどきい。世の人にたくらべて行ふところを奇とせるあり。是をたとへば。長夜れ飲をなして時日甲子を忘れたる儕の間に。獨おやえたる人あらんに奇と云へし。さきおのれが沈瀕眼ふのけねの道を盡せるが奇と見ゆれば。またおのがおとさ人にも見せやといさ。か人のさめの志をもてあくるあり。ことひ題名に負くの請を負もまの辭せざる所なり。又詰曰。まうあれど。此中産を破りく風狂し。家をわすれて放蕩せるもあり。徳行は奇にたぐひうれしといはよし。曰。風狂放蕩かくの如しといへども。其中趣味あり。取べき所あるを舉也。玉石

一言題

二言題

混淆に似せれど。彼も一奇也此も一奇也。しひて繩墨を引て咎むべからず。風流また、上へ。不拘にとらけて。不孝不慈なる。功利に基し、世智にわくしりて。不忠不信なるは奇話の一笑に附以へ死あるも。こゝに収ざるの事。

○高僧宿儒。及び詩歌書畫の名家に。一奇のいふべき事あたりのあらじきかまはしくこれをつとへり。高僧傳儒林傳のおどく。各一家をもて號へくして。此書のなるにあらそ。はゞ一道に勝ぬる人。吾譽るをまたそしく。不朽に開ゆへけれの必とせそ。また廣くもとめきは。あやのくれる人をもえぬべけれど。あるひに此撰をのこをのめかせば。さらのる人を受給きと。またしく語を。其筋につきてことかよりよく開正せば。小筆をとりて千尋の竹ともいひなせるあり。あるの生るをさきよあしてまふもあり。是に懲く此ことをバ大や守の語らず。只かのれ年比よく聞しめたる古人。また相しる人の。哀どもをのしと心にと、めしを。またび私に追慕せるのみ。またもとより三熊ぬまの開正せる人もおほま。あや出すへき人の。其傳をいらざると。今ある人の世を見はてんのちあのとれもへるあとの。三熊ぬし此後と一をのみく拾遺のこゝろざしおきバ委ぬ。たのれに今六十にとあり桑榆かけせよれば。再ひの撰の期せざるところなり

○當時生存の人の此撰ふもらそ。あへて人の一生の棺をねはふく後定むべけれの也。又貴人の奇

れいふべきあるも憚て洩れまた仕官の抄死の。まりは大や守窮厄の間に聞へて得意れ人に稀あれの也

○其傳何バかなると譽けるあり。唯聞や、にす。はた文跡も一樣あらず。雅俗其まとお従ふといへども。大や守心得やすきをむねとして。詞華を雅らす唯筆拙さうらふ。達せざるまど多からんといひせん

○傳の後。傳の中にも。忠接をもて義論し。是非せるもれあるの。大や守私云。按どのみ記す。されども若前お他人の評あるの。是に混せざるんがため。高僧云と愚名を擧てどかつ。まどよりかくおもふかま、に評せるは。あるのあたらず。或は刻薄あるまとも交るへけれ憚るまに。まあらねど。おもふまといはで得あらぬの心狭死の疾也。流がいくは見ゆるされあん

○假名つうひり。大かこの哥よみのおもへるよのうひて。いにしへが正一ければ。契沖あざ和宗正濫を著まけりば。に例を舉らる。今かのまがそらにおぼえしひとつをいは。梅の今れかなひめあれの。あなうめに常あるべくも見へぬ哉といふ。古今集れ哥を見て。まれの物の名あまをまげてかく用られまといふの。まへてむうしをまらぬ人也。萬葉集の文字假名に。みな鳥梅字米

三言題
あま書るに。順和各抄にも守女と訓を付たり。たよろふるま假名の。古事記。日本紀より。延善式を經。和名抄まで。久しき世を重ねみなひとし。此間新撰字鏡虛異記のされバあのをのきり常にふるまど古書皆にかりす

四言題

き假名にまゝがへばいよもまゝこれを用う。今にれまかれたる人あやしむべければ。あきていふ
○諸儒の號をもて題す。號をまゝさる人の字をもてす。僧家のすべて字をもて通稱とれば。是
に従ふ。其他比名連ねあぐるも。通用にしたがふ也。あるの國を冠し郷名聖名を冠らせるも。いひ
なからせるまゝにて差別に意なし。もとより是姓氏しられさるほどは人奇也。
○草本傳を追ふと詩を附けといへども。其事實の奇よりて。詩に與なすものい是を除く。また傳
のうへにのされ用なきも。畫標をとり先て人にしらしめんとおもへるよとの圖也。是三熊氏は
志なりぬしが跋に洩せるをもてこゝにいふ。

天明八戌申歲水無月

關田子高溪自述

目錄

第一卷

中江藤樹	附蕃山氏	貝原益軒
僧 桃水	僧 無能	長山宵子
甲斐栗子	若狹綱子	樵者七兵衛妻
伊藤介亭	宮 筠圃	同久兵衛妻
木揚利兵衛	河内清七	駿府義奴
近江新六	龜田久兵衛	大和伊麻子

第二卷

三宅尙齋	附妻女	僧 鐵眼
米屋與右衛門	内藤平左衛門	寺井玄溪
大石氏僕	小野寺秀和妻	附秀和詠歌姉
尼 破鏡	附曲翠	遊女大橋
遊女某尼	石野權兵衛	隱士石臥
賣 茶翁	同市兵衛	江村專齋
	附剛齋	

一録目

二錄目

北村篤所 西生永濟 岡周防守
青木長廣 僧別首座 僧圓空 附僧俊乘
中倉忠宣 附山中奇人

第三卷

隱士長流 僧契冲 附海今井似開野田忠肅
荷田春滿 附姪在滿 桃山隱者 附高倉街乞丐
位田儀兵衛 手車翁 山科農夫 附評中五名
金蘭齋 加嶋宗叔 文展狂女

長崎餓人 相者龍袋 森金吾
太田見瓦 附僧覺芝 僧佛行坊
狸二鹿 附僧房

僧日初 僧涌蓮

第四卷

柳澤洪園 池大騷 附妻玉潤
求大雅僧 苗澤村介洞 附妻女
手嶋堵庵 高橋圖南 北村祐庵

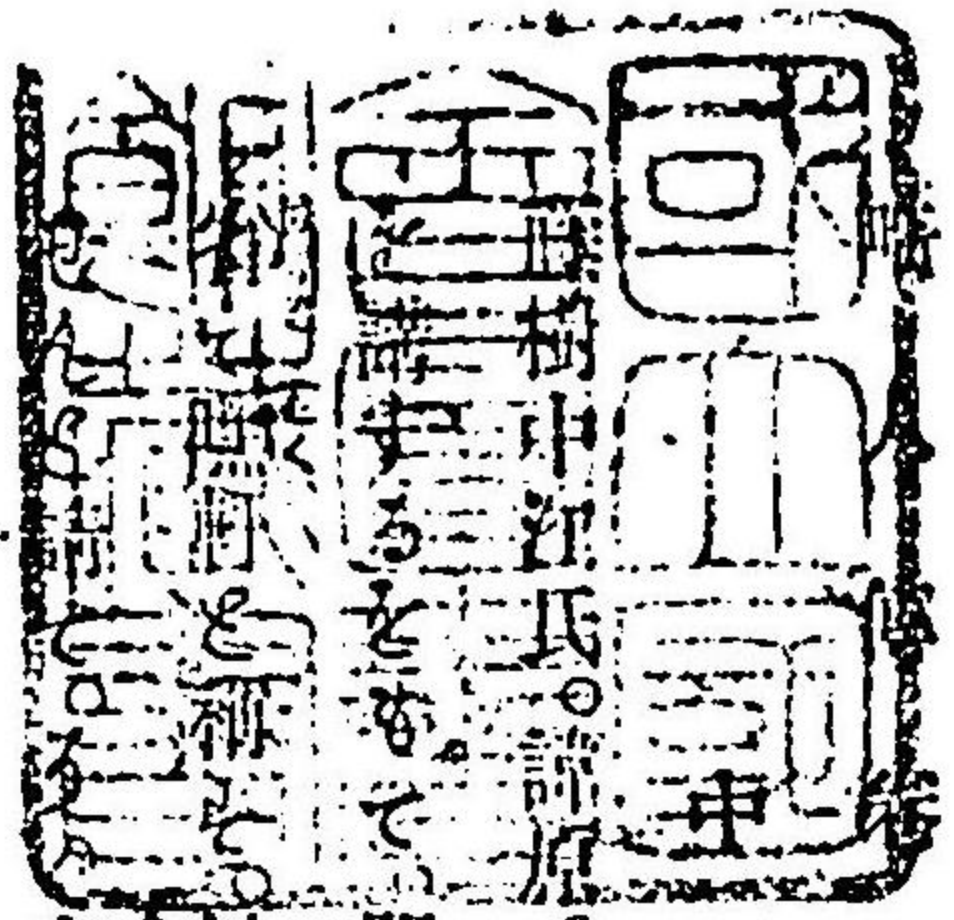
久隅守景 土肥二三 廣澤長孝
僧似雲 僧惠潭 矢部正子
祇園梶子 附百合子 室町宗甫
惟然坊 近江狂僧 表太

第五卷

並河天民 附馬杉亨安 北山友松子
戶田旭山 隱家茂睡 僧丈艸
安藤年山 附朴翁 井上通子
有馬涼及 甲斐德本 北村雪山
僧圓通 龜田窮樂 山村通庵
美濃隱僧 白幽子 松本駄堂

三錄目

目錄終



之一
江藤樹

附蕃山氏

字惟命。通名與右衛門江西高島郡小川邑人なり。藤樹下小産れ、後藤樹下に學
 門人此號を稱す。又夢中人ありて光暉軒の號を授くるとして、光の字を謙遜し。
 僻地に生るといへども。兒として野鄙のあらひに染す。九歳の時祖父吉長嗣と
 在所伯耆に作ふ。祖父手筆に拙を悔て。つとめて此子小學のしむるも、其書人お
 ころくはうりありき。十歳の時。伯耆の大守加藤侯伊豫大洲に轉封せらる、ゆゑお、彼所にうけ
 りぬ。十三歳の時祖父賦をうつことあるに。少も恐る、氣色なく。祖父の命をうけて賦をどらへ
 んとす。志氣幼して既ふくのことし。は、一物に遺受も甚誣て差惡のこゝろ深く。一食を喫し
 ても君父の恩を思惟と、十七歳のとき。京より禪儒來て論語を講す。そけ地の士風武を專にし、文
 學の業を弱とし、敢てさくものあし。唯先生獨往て聽受と。論語。上篇を終て儒京おかへりし後。
 又脚とすべき人のなまを憂て。四書大全を購得て熟讀と。然れとも他の誹謗をば、ウリ。晝は終
 日諸士と應接し。毎夜深更に及び二十枚を見るを業とせ、己後も師あくして。困學年を経。ひとへ
 に聖學をもて己り任とす。然るも其母氏老て故郷に獨りあるをうあしひ。再回暇を乞て歸省し。
 一 たゞちに是を倡ひて伊豫に歸らんやせしに。は、けさ波濤と老のさ他國より、川るこゝを欲せず。

二 故に致仕して歸らんとこひ。且ツ二君は仕へ出身の意あるふあられされんとを天に誓ひけれども。其才徳を惜て許されぬ。二十七歳の冬十月終に逃さる。此ことをとて本朝孝子傳に出す。其時。ことしは祿米悉く倉に積直。さきに友人に飯食し米穀あるもの器物を賣て是を償ふ。江陽に至るとき。銀纒は三百錢有しを。祖父のときより使ふもの。よる所あうらんを憐みて。貳百錢を與ふ。そのもの賜ふことの過半あるを痛む。敢て請る志なく。只從て艱難を共にせんといへども。先生強て與へてうへせり。此佞かの誓のこどく終身出仕へず。其志を高尚にす。初僕に與し殘の銀百錢をもて酒を買。やゝ農家へうりてうの息をもて母氏を賑ふ。後父刀をうりて銀十枚を得て。是をもて米を買農家へ借す。息をとること世人より甚減する故もや。其償をせめせして皆是をうへす。三十初て娶る。格法不泥かたひ故とす。其女容貞甚醜けれ。母氏憂て。出さんと欲れとも先生固く辭す。此婦容貞醜しといへとも。性質甚聰明にして。心を用ること正し。つねに諸門人會して。夜半或は五更に及へども終に先生は先達ていねと。居つひ居小事といへども。命をうけされいおこさる。先生従米朱學を尊信し。門人に示すに小學法をもてと。故に門人格套に落お在し。拘掌くわうしやう日々長し。氣象漸々廻りて圭角を持す先生三十有余陽明全書を見しより。その非をさ登りて。門人に示して曰。格套を受用するの志い。名利を求るの志と日を同じうして語るへからずといへとも。眞性活潑の体を失ふと均し。只吾人拘掌の心を放去し。自の本心を信して。其跡に泥むとなかど。門人大に觸發興起

す。又語て曰。予嘗て山田氏に贈るに。三綱領の解をもてす。其至善の解曰。事善おして心善おらざるもの。至善にあらず。心善にして事善おらざるものもまた至善にあらずと。此時予いまた支離の病を免れす。故に誤て如此解すと。門人間ていなく。此解甚親切明常なるをおほゆ。如何ぞ支離とす。先生云。心事元是一也。故に事善にして心不善なるものいまたあらず。心善にして事不善ものもや。未ニ之有。門人曰。狂若のとき其心高大きとも。其事破綻あることを免れず。郷原の如き。事ハ君子おて。其心汚る是分明に心と事と二ツあるにあらばや。先生曰。狂者未レ入ニ精微中庸。故にかくのまとし。郷原ハ世ハ媚許容を求るハ穢。臆より顯る。事爲まきバ。もとより善とそへからば。跡の似たるをもて善とするハ切利の意なり。然るに幾ハ曰。大哉此道。盜人も亦是を得ざるは功をさすとあたれば。入とを先とするハ勇なり。出る時後る。ハ謙也。分ツと均しハ仁也。此三ツを得ざるハ大盜を成と不能とといふ説ハ。笑ふべし。悲むべきものありといへり。又近年專ラ孝經を講明し。津ねに愛敬ハ二字を掲出し。心体を體忍せしむ。曰。心の本体原本愛敬的。猶水の濁ハ從ひ。火の燥ハ付るかことし。只吾人種々の習心習氣に凝滯せられて心體の川蔽る。然きども親を愛し。兄を敬するの心。且赤子を見て慈愛する心の源。時有て發見す。此心を認めく存養しく失さるとさ。則聖人のこゝろあり。以上は先生家學を起して後の教示あり。世に乏る人稀なる故に掲出と。およそ書をあらとさんとしく筆をたつるもれ。大學啓蒙。



孝經。啓蒙。藤摘規。並學舎座右銘。原人。持敬圖說の類。尙二三ありといへども。或ハ初の著述後
の意に不^{あは}協して破り。又數年多病のゆゑに。業を果すして止ものあり。論語も郷黨の篇より先
進二三章に及びて業を終ととそ。今傳るものをよくあし。ふ。一郷黨の解は刻本なるを。予少年は
時骨董舖^{かむくらや}みて見しことありしが。書林も知る人少し。購^{かひ}さりしことおもへし悔し。又翁問答とい
ふものを草せられしを。書價盜て印行せるを咄つけて。後の意に協^{あは}ねい破らしむ。書價その費
を歎くより。是^{つくまは}を償んとて。女誠のために箸されしものを。鑑草と題して授くる。又醫書の箸述
けろの業にあらざるも。理を推て明らむる所あるべし。醫筌ハ大野了佐といふ愚魯の人のため
に箸す所也。此人士あるにたゞざれば。その父賤業を營しめんとするを憂へ。醫とならんことを
先生にこふ。先生其志をあいきみ。大成論をよましむるに。纔ハ二三句を教ること二百遍斗。食頃
忽遺忘を又。來りよむこと百遍余にして。始て記得す。かくのことく久をへて後終又醫を以て數口
を艱ふに至る。敢て不倦の實を見つへし。先生人よ語て曰。吾了佐おいて何とんぞ根氣を盡せ
り。然れども彼つとめその不能。彼愚昧といへども勵勉の力の絶奇也。况や了佐ならざるもけ
り。其勉の驗^{しるし}を知べしと。小醫南針。神方奇術等ハ。山田森村而醫生のためよ。箸^は處とそ。其書傳
るや否。未知。先生四十一歳にして。慶安元年戊子八月廿五日病て卒と。其舊居の講堂今尙殘ま
五
ども。其學をのぐもれなく。荒廢よつくといふ。をしむへし。先生三子有。備前侯に仕ふ。熊澤氏の

六 故を以てなり。長の宣伯通名太右衛門。よく父の徳を嗣て。明敏豪傑。まうも温厚也。病によりて仕を致し。家お卒そ。惜さるものなしとそ。仲の藤之丞。又致仕京師。病死そ。洛東黒谷お葬る。季彌三郎先生歿するとしお生る。是はた侯時めうしおまひしうども。病をもて辭て江西よりへ。後又京師に寓居し。改名江西文内といふ。病て死す。故郷にうへし葬る。常省先生と諡そ。○藤樹先生の門人。備前に召る。者五六輩に及ふ。能澤翁の其魁也。翁の平安の人。本氏の野尻通名次郎八といひしうども。外祖父養子として能澤助右衛門と名れらしむ。諱の泊繼。致仕の後了芥と稱し。息遊と號そ。氏も亦後に藉山と稱せし。備前にして。其領地寺内といひし所を藉山と號て。暫こに隱居と。筑波山葉やまきけ山まけ、まどおまひるに。さいらさりけ、といふお歌れこ、ろによさるどろ。其后京お歸り。おあありて播磨明石侯のもとにあり。侯封をうつさる。お從ひ。下總古河に至り。ろこにて終る。時に歳七十三。元錄四年八月十七日也。そは學藤樹に出るといへとも。見所また一家をなして。ことよ經濟お長と。時處位の三つをさるをもて要とし。琴柱お膠する書生お説に異なり。其箸書。集義和書。同外書に見へたり。世に傳ふる所。此人備前にして佛寺と破壊すといへり。予其事實をよく聞正せるも然らと。此舉の翁致仕の後にして。まうも侯お上書してこれを諫ひとあん。されども其箸す書に。佛教を誦ること大過せきり。そは漸をなるといふべし。京にしての紳縉家。關東にしての諸侯お間。名ある諸君お門人多うましとなん

或曰古河維延寺に先生の墓有り

貝原益軒

益軒貝原氏。諱篤信。字子誠。通名久兵衛。祖父より以來筑前福岡侯の臣にして先生は父寛齋の季子也。邦君三世お仕へて儒學教授とある。君命によりまへく京師へ往來し。專程朱の學を講そ。其見の慎思錄自娛集に見ゆ。ろの學博く和漢に亘れること等輩渺しとまへとも。性甚謙にして。只身の及さることを恐れ。名に近づくことを喜ひと。常に言。吾人は長たることなし。但恭謙道を思ふのまど。もとよま愛人。濟物をもて要とせる故也。其箸所の書多く平假名に記して。通俗のため教ること丁寧反復す。家道。養生。初學の諸講。大和俗訓。樂訓などの尙さもありなん。鄙事記のことき。日用の細務にまでも及ふ。近世諸儒。唯自己の學力を示して。梨棗を費すものと。相去ること天淵なるべし。は。大史公り名山大川を探るに似て。足跡諸國にあまねく。其國の名奇をはしめ。東海。岐嶼。日光の記行。有馬入湯の案内。大和巡。諸州巡の類ひを箸されしも。自の詩文章よ及ゆ。唯旅客の助とせらる。年積るに従ひ。侯家の禮遇彌厚く。累に采地を加へらる。元祿庚辰歳七十一。老を告て仕を致すといへとも。尙月俸を賜ひて。其老を優ます。正徳甲午八月廿七日家に卒す。時又歳八十五。子おきもえに。其兄存齋の次子重春をとりて家を嗣しむ。先生の年譜の元錄九年まで姪好古撰む。好古今年卒せるゆゑに。十年より終に及て。姪可久次て撰む

墓誌の門人竹田定直録す。其銘曰。

恭默思道。極精造微。愛物爲務。事天不欺。翰藏增顯。謙遜愈輝。遺訓存策。後學永依。

此銘三十餘字の間。よく先生を盡せりとわすれりもゑにこゝに擧ぐ。生涯著書百餘種に及ぶもめつらしといふへし。書名繁多あるり故ふこゝに略す

或人の話にゆふ。先生歸國の海路にて。同船數輩。各姓名をどひさくにも及はず。何とあき物うりどもをして日を重ひしふ。其中一人の若き男。人々に對して經書を講す。先生例の恭々しく黙して是を聽て。一言是非を論せり。船着岸して各はじめて其郷里をわかし。再會を契て別る。又臨み。先生も吾の貝原久兵衛とすもはまりと名のらるゝを聞て。彼若き男大さお耻おるきて。速にまげさりしとあん。傳にの見へぬことなきとも。其爲人の一端を見るへし。因に記す姪好古の益軒の兄。樂軒の子。通名市之進と稱す。著す所和事始漢事始。日本歲時記。診草の類。其体裁の全先生のとし。先生に後れながらへし。其志を嗣人あるべきを。をしむに堪たり。此人の號損軒と稱るよし人のいへるを予此ころ先生の染筆を得るが是先生の書林柳枝軒より出て。疑しき物にあらず。然るに損軒七十有五書とありて印中の文字。上は貝原篤信。下の子誠の印也おもふ易の損益の對により。表裏の軒號とせらるしにや。かゝる好古の號といへるの傳聞は誤歟。た

し其軒をわかつて好古に譲らるて後。自の號とせるもまるべうらら。其郷人お正べくこそ

貞享元録の前後。儒學は名家多く。奇行奇話も又抄うらねども。今の唯陸樹益軒の二年生をわけ。徳行の卷の嘯矢とす。次に桃水無能の二和尚を擧るもまた同例なり。彼を取是を捨るにあらす

儒 桃 水

此傳の面山和尚著せる一書有て。既印行と今の要を取て。

僧桃水。諱雲關。筑後國の人にして。肥前島原禪林寺に住持と。跡を匿して後某行方を志るもれあし。歸依の尼國をいて、かゝくを尋めくりて。路東四條河原に至る時。師誅うちうつきて同しさある乞人の病を介抱してあられしに。涙を流して拜す。さて和尚の爲にとて自紡績し年を経て織たてたる臥具の背に負しと。取出してまへらするに。和尚今の身にしてのもちうる所あしといひてうけせ。尼もさるものにて。自用給ふ所なく。御心にまかせてともかくもし給へ。師に供養せるうへは。直よすてたやうもうらむ所なしといふ。さらばとてうけて。やがて病る乞丐にうちさせたまふを。他の乞丐人ども見て大に驚き。これ凡人にあらすといひて。俄にあがめふとみけれり。そこをもたちさり給ふ。そのころ弟子の而僧も。尋求ること三年にして。安井門前にて。乞丐の集たる中にて見つけしうげ。其あどにつきて人あき。所よ至り。師もしかくのこ九とくさうわれくも同し姿となりて従んど云ふに。師不肯。一人の師の指揮をえて他方の知識



のもとへゆく。一人のまひて従ふ得るに。さらば吾とる所をまよとて伴ひゆく所に。乞丐の死せ
 るあり。やうて弟子と、もみ是を埋めつ。さて其死者の喰ひあせせる食を。口まつ喫して。汝もよ
 く喰んやとあるふ。止ことを得ずして喰ひたれども。臭穢に堪は嘔吐す。師見て。されはるる世境
 界に堪ざり氣れ。これより別れんとてさりぬ。後其遊ふ所をまらそ。ある時肥後熊本の寺僧。國
 侯大且那たるをもて。勢ひ猛にモウ儀衛を盛にして關東に行道。大津の驛より休ふ間。馬士沓買んとて
 老父おぢとよふ。是は此日比。とある家の軒に。假初にさしかけてある翁がけくる所の水昔鞋みづかぢ
 とよければ。ちいがくつとて。輿夫馬卒あしひらもてはやしける也。時に其沓もて來る翁を見れば。桃水ももみづ
 尚なり。彼僧ねとろき輿をまろひ出。手を取てなまこを流す。これ師の法弟なり。とよく舊を語
 りて。別んとぞる時。汝唯諸侯に醉ことありれとて示す。りしりの又去て。京の片はどりに小
 家を借り。僧形そうぎやうにのへり。行乞たぐひしてあらきしを。角倉氏其徳を見たる。ことや有氣む。まひて請し
 て供養せんといへとも不應。曰。吾人の供養を請るとを欲せずと。こよみい。角倉氏思惟して
 あざむきといふ。吾邸人多ければ。日々の餘の飯空しく腐爛す。實ををしむへ。是を師に參らせ
 んに酢すを醸つくるして賣給うりたまひ。老脚を勞して行乞し給んに。よさふんかど。師是れを眞とし。これこそい
 とよさふつとちき。捨るもけり拾ふべし。いで吾の酢賣の翁とならん。こきより洛北鷹峰にて。酢屋
 道全だぜんも通念つとねんとも自稱して年を経。遷化有天和三年九月也。其乞丐の時の口號を。弟子探洲とい

二十
ふ僧の聞たる。

如是生涯如是寛。弊衣破椀也。閑々。飢、發、渴、飲、只、吾、誦。世上、
是非總不干。

大津ふく沓賣のとき。來人其年老たるを憐思ひしにや。大津繪のわきた佛の像をあたへしかば。
其こやに掛置。消炭して上に直す

せやなき宿を貸どやあまた殿後生たのひとねがしめすなよ
鷹峯よて遷仁の時遺傷。

七十餘年快哉。尿臭、骨頭堪^ス作^ニ何^ト用^ト。喫。眞歸處作^ル摩生。鷹峯月。白風
清。

僧 無 能

此傳の或僧僧文の著述。五僧記事といふもの、
中より取出て。其文を假名に和していたと。

陸奥の無能和尚の淨宗の大徳にして。四十未滿の遷仁あるとも。其間自行他他の行業類あること
の。其傳記既ふ世も行るるに。に擧す。中にの奇行。安さにして甚難きことを記す。やう若くし
て行脚の折。或家に投宿有しに。その家に好女子あり。和尚の面白甚美^ニ。傳記ふの地藏^ノやさつ^ノ
し。氣韻清高なるを見て。戀慕れれもひ焼くことく。起居靜むるに堪と。夜深更に及び。しのびく
其寢室に至りしは和尚のもとより常座不臥を持されり。屏風を廻らしたる中央に端座しく。微音

に念佛せり。女子やがて背より抱くに。おどろくけしきかく念誦氣平々あるとや。猶蟬の樹を
撼^カどがごとく蚊子鉄牛を嚙^クのとし。半時はかりをへく。女自放^ク出たり。朝に及く犯を發^ス。獨言
きて恥をのぶ。和尚憐^ムく。爲に念佛を授^ク後。やうく念^トとを得たり。女子是より後終身嫁せ
そ。念佛しく逝せりとそ

或人曰。子亦婆子燒庵^ハ則^トをしるや。婆氏一庵主を供養と。一日二八の好女子をして抱任
していはしむ。師^ニ恁^テ摩^リ時如何。僧曰。寒嚴枯木三冬^ニ無^ク暖氣。女子婆^ハ告。婆二十年來此俗
庵主を供養とといひて。終に僧^ヲ放出しく。庵を焚。今此和尚のとふ、たり。是非如何。予
曰。凡古則^ハ別に一隻眼を開^ク看^ベし。此和尚の實徳と相通せず。もし然らずといはむ。試
に子にといん。庵主あるひの女子に淫せり。また婆氏何とうせんや。或人微笑しく去。

又或人語て。王陽明のまた弱冠の日。及第のため京師^ニもひく途中。投宿せらるし家に。
艶色比類^ナき。寡婦あり。忍^ヒて陽明の臥座に至りしに。猶いひやらそ。旅裝中の書を取
出し見居りけれり。驚^カたきとも。止がたき思ひの程をのぶ。死をもていひあむ。陽明靜に
九相圖詩の意を説て無常を示さきけれり。開得て涙をながし。教誡により操を破らざりし
恩をのべ。罪を謝して退たるといふもありとあん。何の書もへたるやまらず。是の趣意
全くひとし。於呼^フ幾人のこ、よ至りて一生を誤る。白刃をも踏^ミべし。此境に動さきざる

難うらきや。

長山 雷子

此傳ハ安藤爲章の年山打聞に出る
マ、一語を増減せずうつせり。

雷子の水戸府城長山七平某の女にて。奉行職師岡與右衛門綱治の妻あり。夫婦のあつたつたし
く故婢をうへりて恵めり。すべて内を治るは婦徳うるのしきり中み。善助綱常の家婢は産所
りしを。やがてみつからの子とし。其婢をふかくいたりて。漆村の某に嫁せしめ。綱常を愛育す
ること。我生所のことくあれ。母子の間いさ、うも隔ることなく。綱常もまた孝行ふた心なく。
もとより彼家婢のうめるといふこと十四五歳までを侍りし。其幼少し時病を愛たりしに
。雷子醫藥を嘗試るあまり人目をめ、て夜に紛れ。神崎寺の觀音大士へ素足にて参詣し祈りけ
る。感應のことわりひなしからて。その病愈けり。是世の中の養母繼母のいよしめあり侍氣ん。
更に家婢をえらひて綱治よめさせ。其婢をも又いよめをしきもれに教導て。織縫何くまよく女職を
あらせたり。古人曰。凡婦人けうまきつき妬を甚しとす。もし妬みくけ百拙捨へしとぞ。嗚呼雷
子や。妬薄ければ世中の妻女の教とあり侍りまじ。又綱治久しく召使たる若侍。ね々々なく雷子
に心をうけて。さまじいひかひけんせしが。或時綱治他に行し留まに。その間にまれば入し
を。うゑて用意やしたりけん。うねよき脇指にてうひくしく切けきり。唯呼といふ聲のうりに
て。死しけり。傍の衣裳うちかけて。さりけあくものし。綱治歸りたるに。始てまうくの趣始終

と語けるとぞ。女の整夫すること。うくてもあつたつて。さまじく聞へて其身の恥れみなり
す。親のうらまての名を穢すことあるに。此雷子の潔きこと。もちに。綱治手をいひつとす。
家のうちのさわきもなまふひひ。よためしすくかくとに侍る。以上の婦徳をおもふに。も
ろこりの書に。賢女節女烈女とぞ。ことくしくきるしたるに。いやまさりてろおや侍る。
正徳三年の春より病つまで。同じく七月廿四日に身まゆる。齡四十二。江戸駒込大乘寺といふお
ほらふりく。妙珠院月澄日冷と諡せり。まことお惜へたとむへき貞烈の婦人あらすや。

甲斐 栗子

栗子の甲斐の國山梨郡の農夫某の妻あり。舅姑に孝あり。その名高し。然に舅姑も夫も亡ける後
山坂といふことにあひ。山坂といふは。凡山國にある大變に。螺の水に溺れ死す。その時屍を
堀出し。それの十二ある養子を背お負。八つよりける實の子は手を引く有けり。幼きのを
よう背より負へきに。長たるを負へるに。此時に臨み遁んとおまふるにも。養子をれりくする
の義をれりもあるへ。女といひ邊鄙の産なり。何のまかふ所もあるまじきに。天性は美のくの
ことさ。世に有かたためあるへし。さるまもに。さるに災にか。死をよくせさるの
悲し。まのいあれど。此災によりて其徳をよくあつたつてといふへき。國人これうために碑を
建く事實を記せりとせん



若狭 綱子

若狭の國小濱の府下に。病狼あきさることあり。某士れうちに使る、小女。十四五歳まで綱
といへるが主の幼兒を背に負く。それむたりお遊ひける時。彼狼不意に走來くとひつきたると。
綱の急に己の裾をまくりと背の子をおやひ。うつふしにありたる時。狼の綱女の尻へ喰付さぬ。
さる間に人々聞つけ集りし。狼の即走さりたり。さく彼女を物にのせたるまくの尙詞たし
のに。主れ子の故なきよを告しか。道にて息絶さり。やかて其親のもとへ昇入たるに主の妻も
聞てかけり來さるに。綱の母。幼兒をわたして。血ふはまみれ給へど。つもばかりあやまちさせ
奉らさりしを恨ひはへるといへり。此母もたゞきのにのあふさりけり。此よを國の守聞し召て。
二なく憐がり給ひ。大なる石礪をよて。忠烈綱女の墓としるし。銘の儒臣小野忠次郎に命しくの
せ給ひ。三日大佛事をかこなひ。遠近の人とも詣。詩哥の作こ、ろくに手向ぬと聞ゆし。

樵者七兵衛妻

同久兵衛妻

七十

洛東蹴上に樵者七兵衛なるもの。一日山に入て歸ると避かりまかひ。其妻迎にゆきさるに。ある
岸下に。菜を一荷にし。息杖にもたせながら人の見えすふと見あぐまの木の枝に。大なる蛇首を
たれく。服ふくふのに見へくの心さ、たる女にく。是の夫を吞たるかふんや。やかく彼荷に

添たる鎌をとりて。ひかへは。蛇口をひらきて是をも吞たり。吞れなうらこの鎌も。口より服まで切裂しに。夫はさしく。腹中ありて。已と。もに地へ落たきり。ちて肩にひきかけて我家に歸り。數十日保養を加へて常に復しぬ。此后頭に髪つゆ斗も不生。其わらひて。藥罐七衛頭のわく元とるを。と異名せるが。山に懲て鳥物あどらりてありきし。今をさること凡四十年前。六十餘の翁ありしと予の知る人のさりぬ。其勇其智。漢元帝のさめに熊にむかいし。馮健仰にたどらすといふへし。やと同じくひん

○享保三年戊戌十一月廿八日晡時。丹彼國舟井。縣に野猪傷をうふむりて怒走。八木村より南廣瀬村へ入。山本をめぐりて直に山室村に向ひ。鳥羽村を過。一人田のへしてありけるものを。牙て。何荒やさりぬ。樵者久兵衛なるもの年六十四。薪を負て歸るさにあひて。俄にさけかくれん所なく。そこよりありつる樹を攀。地を離る。ことばつかに三尺斗。猪の端を啣て引落しけり。せんのおく相敵すること久らして。遂に岸下に墮。猪いよく猛りて喰ひ噛みて。あまの所やふまきしかり。蛆にさけひ呼といへとも答るものなし。是か妻某年五十四。聞つけてとみよ走來て。袂をもて猪の首におひ頸。又跨て抱とむ。猪動ことを得ざる間。頻に命を救へと呼。まにして村民二人相繼て來り。短刀をもて刺す。や一人來て。斧をもて其脚をうつ。既にしてあまの集り。其疲るるに乗て瘡しぬ。樵者の終に活ことを得。月比をへく。餌も瘡なり。其所龜山の領



地なきの。その妻の烈を賞し給ひて穀を賜ぬと。東涯先生の筆記に見ゆ。

伊藤 介亭

介亭伊藤氏。諱長衡。字正藏。即通名とす。是堀川 仁齋先生の第三子也。生質篤實。お過ぐ魯に似たり。殊に孝友ある人なり。母氏雷を懼ること人より過ぐ。故に生徒集く講讀の半といへども。空雲をの直に辭し。其本家堀川に走ること夏日の常なり。其他も推く知るへし。兄東涯に仕るも又猶父のことし。父て、幼しく別ましのる。此兄 弟皆東涯先生のをしつをうく。弟のちの尙少年より。時々青樓に遊ぶ或は朝に及ぐ歸るに。介亭同居の日あれば。早晨に起るあたる。お苦しみの。或時門より入る急に呼ぶいひく。このにか火事ありと先生即走く屋上に登る。是を望む間に部屋に入て紛らひしより。後の是をよみことにして。朝へることをよくよばるに。あやしふけしきもあく。例のことく屋上よればばる。奥田士亭 東涯の門人よし三角と 號す通名惣四郎伊勢の人 いさめていふ。是は令弟達のあざむる。あり。何ぞのひはかかき給ふやと。先生いふ。吾これとまれりといへども。も一やことこの失火ある時。例の偽りごとまゝろえてもみていあしとたれもひて。かくするありと。やあるとき。住る家の板敷を引はなちて。何やふん人を指搦す。ある書生入來て何ごとととふ。今誤て鉄の火筋を落せり。故に是をもとむるありと。書生それい何ばうりのもけにもあらず。さかかき捨玉ふがよし。さかかきしといへど。否此ものをねしむいあらず。此家の人のものあれば。我よのりて住人あふんに。

板敷を踏れどし。此火筋おて傷んことをおそる。故に。のくするなりとこふ。後子を養ひて嗣とする。既長しこれども。小兒のねもひをさし。堀川の岸を過るときの。後より手を。あつるごとくして是を護る人にてあやしふばかりありしとせん。まるとのしきまとい。年比召使とし一奴。甚惡直あるものありある日。縫を切しむるに。是は庖丁をねさせて切しと教る。其に。其日の事に紛れて。明日の日にきばふの縫を切るやと。なる。奴いよ。寐させると。にてねとし侍はずといふが。あやしきまき。割木を枕とし。布巾を打させ置たり。又鯛の頭の切るるを炙しむると。頭角に掛へし。ありし。やうて繩にてつちき屋の角に掛りし。先生奴のうくのおどくなるがよしとて。それが生涯愛してつかれしとなん。高槻は儒臣よりしかども。京師に住て終る。嵯峨二尊院先塋の側に葬れり。

宮 筠 圃

筠圃宮氏。諱奇。字の子常。故に通名常之進といふ。尾張國海西郡鳥地村人。生來温厚謙遜にして。老うも聰慧強記。十歳既に詩を善す。父はおいへく。勉よや。吾業を繼ず。我子よふしと。十三歳の時母氏背に灸す。筠圃頻りに涕泣す。母氏熱堪ずやととふ。答ていふ。まうらす。吾聞身體髮膚敢て傷ひやふらざるを孝のはじめとす。然るよ灸せされりあひの病身を歎侍るれと。生につうへ死と喪せる孝心。始終くけまとし。年十八父母ともに京師に來り。其父

東涯先生は學をうくるに故に。亦次て是に事ふ。東涯没て薩隅小從ふ。學成て其名藉甚米學ふもの多し。又書ハ趙子昂をよみ。深く軌範を得。よ書能す。畫竹ハよどに風韻一家をみせしけれ。世人平安四竹は一とす。四竹ハ淺井岡南。御園意濟。山科宗安。宮崎園等あり。のよど其書畫を誦者。月に日に絶す。母氏うくはことを見。いさめていふ。ねろくくハ人汝をもつて書工とせんと。端園是に感て又畫す。其後故郷の甥の家ハに投宿せし時。甥氏紙筆を出して請ふと頻にうて曰。母堂にハよきにまうさん。吾にうて君ハ畫を藏さずハ有べのふすと。一夜責ども終に筆をとらず。一とびといめし言を食。他人ハハ義を省て。甥氏に私せざるあるべし。書も亦次てといひか。ま。世やすく其書畫を珍重す。京師に住るよと數十年といへども。俗習ハ染ず。世情に疎まとい。一日東山ハ往てかへさ。雨にハひ。二條加茂川の東なる賤妓の居處を過。簾下をハあもてハれを避るに。妓ども入給へくと頻に呼ふ。先生歸りて人に語りて。仁といふものハ實ハ人の固有也。吾南ハハハるを見て。彼輩頻に呼ふ。傘をかさんとなるべしといへり。か。人笑ひて。仁といふものと異名す。謙遜の跡ハ。其相識悟心ハ尚の詩集の席を書れしよも。其辭氣弟子の列につくも。よとくみれば。和尙辭それよも。不肯。是よきに予る所なり。凡近世諸儒。誇大自負風をなよに表裏し。其名ハ奇をよめず。字ハ常を勤む。是即奇ありといふべし。されハ細黨ハ交るよと黒なるがよとく。友人と會してよ必座を下りて懼るよ似たり。終るとよ五十八。東山永觀堂ハ莫地に葬

る。門人私に論し行恭といふ。所著備考錄。經說。詩文集數卷。皆いよだ稿を脱せよして筆を易をといひ。

駿府義奴

駿府客舎石垣甚兵衛といへるも。僕ハ八介。十一歳より此家に来り仕へしが。十五に成ける年家裏ぬれば。奴婢皆暇を出せしに。八介ハ年よだ幼しといへども。貧困を見捨て他へ行べきにあらず。且二君に仕ふる志ありとて。是より晝夜をいひず。寒暑をよけ。或ハ山賤ハ業をあり。又賃雇ハ役にハし。唯幾を得るよ多きを喜ひて辛勞をいはず。其主ハ爲に心を盡せる事状ハ。江戸芝ハ何某漢字に記し。又京にてよ是を假名に譯して。俱ハ印行せよば。今ハ唯題名を表するれと。志あらん人ハ彼記をよるべし。伊勢參詣ハ俱にやといれ。其賃銀と路費をよめて金壹片を得。是を前日主ハ與へて。己ハ一錢もたぐハへず。晝ハ重荷を持あり。物を喰ハず。夜ハひそりハ旅舎ハかたハひて。價を出さず宿。人々の餘飯を喰ひて過せしなど。其外唯主の歡をよるを樂しとて身を省ざる有さま。又類有たし。且敬を盡せるも亦人ハよハ似ず。室曆五乙亥秋府尹松前氏是を召し。伴怒て。其主甚兵衛が罪を算へて。か。る無賴の者に志を盡すことハいふよと責はてハ半よよめんとよで試給ふと。八介主ハ罪ハいふにもハれ。吾ハ恩重きことハ親ハ勝れり。よくハともな。老ハ生涯を見果て后ハ。命をも召れハへ。今吾ハくハ飢渴を誰ハハ救ハ侍ハん



向來疎拙之民孫男と竹お傍
 也行半庭幽苦花當庭多子猷
 回風一陣泣と紫殺生卒後志
 既包びぬる此の見る桑を更替細毛
 若た考り第一酒題風林 空亭

と。詞を盡し泣悲けれ。府尹を初め諸吏皆間に忍びず涙にむせびぬ。さて府尹。先の言ハ汝を試
 んよめの伴也。懼る事なりと。厚く是を慰め。終り上聴小達し。明るとし正月六日錢五拾貫文。
 賞として官より下し賜ひ。府尹も是が至誠を感じ給ふあまり。其子息を侍食せしめ饗を賜ふ。
 後人或人金をもて彼賜物の錢三五文を乞得て。錦の袋小盛り家の寶とし。永く子孫に傳て忠誠を
 勵さんと。他の家も亦是に倣ふ人多かりしとなん。

木揚利兵衛

江戸に日雇を業とする利兵衛といへる者のあり。此わざを俗に木揚こあげといへば即稱とす。幼年のど
 きつうへし主の家養はて。九旬斗の老婆。頼むよすがもあく成るとはぐむに。わが他に行
 る間妻が仕ふることの疎なふんをうかがひて。明とば背に負て。わが行所へ伴ひ。其日の事業を
 なす傍に。物を敷てする置。わが喰ものをとけてもてなす。其外委しきことをばきねども。此一
 事をもてはうるべし。されば官又聞えて大に賞し給ひ。賜有けり。享保年間。ことにて。世にひろ
 く稱へされば。京までも是が婆を給にうき。事状をもあふく来るして。木揚利兵衛仁義禮智信
 と呼のりて賞しが。をかしかりし。その時をしる人うたりぬ。

河内 清七

五十二 河内の國日下の里に樵せうりを業とする貧者清七といへるものあり。母の富人の家の乳母うははたりしか



の。貧しき世を経ても。口服のことに儉することあり。然るに此子孝ありて。あしたに人よりもとく山入。ゆふへに人よりもたかくて歸り。其間に他二人あはるはりの業をなす。其一人か分の常はまかなひに充て。一人か分をもて母の好める食を。のへ。ともしげもあぐもてあしけり。或日母鵝カウのあぶりもれをのぞきたりし。其日の暮れば。明日朝とく起て。市へ行てもどめんと用意しるに。窓にあはるもの。音せしかむ。童どもが戯に。土くれあとうちけるよとねばえあかふいで。見るに。鵝二羽落て有けり。喜びてとくす。めけり。孝のまこと至けるなめりと。その里は豪農日下伊駒山人の話成となん

大和伊麻子

大和の國葛下郡竹内村に寡婦あり。伊麻といふ。年六十にあまりてなや老るる父に仕へて孝篤し。寛文十一年辛亥六月。老父病甚して。日をへて飲食をおもひとまは。伊麻歎くこと頻あるに。十日すこし病のひまある時といふ。も一鰻魚ウナギあはる是を喰んと。とまとも此里山中にして賣セによしなけれけ。いうすべきとまをへるに。夜いたく更過て。瓶の水に音あり。伊麻驚あやしき起て見るよ。好める所の鰻魚瓶中にをとりけれり。喜びとりて膳にと。のへ進し。是より父の病日々又快氣に復りし言。芭蕉庵桃青。貞享五年四月に。大和路を行脚のついでに聞て。涙をいめがさりしと。やがて京へ來りて。書家雲竹お語る。雲竹もまた感ずるの余りに。とづのふ大和に往て

もし。禍も生老とはうりて。利の微ある物をこれうれ人にとひさくに。油紙木綿も過る小利は物さし。それか中にも油の時價の高下甚し。紙の品多くて煩らひしといへは木綿をやれもふ。い何こよてもこまきをもめてうきと教るに窮樂か思惟甚奇特あり。やがて其日。近死所の木綿商人に語らふ。商人此をどこまきぶきらひは。いへることは。いかに窮樂翁の御息よがはず。木綿の何斗もあへへまゐらせん。但しさまに人傳をもて翁にたのミ参らせし書もけ有て。久しく果し給はず。若こまきを携へ給ひ、證とすべしと。久兵衛即ち父まきかへといひ。げにさることありとて。たゞちに書てあふるを持て至る。まゝに。おいて商人其約のこまき賣物をあへへし。おはさもさす。荷ひてうりあり。其後又父あるむすめととりて娶せし宅をことにせしむ。宅をさうといへども。夜説も明ればやがて翁のもとに行て。戶外よきうがふこと二のび三のびに。及び。翁眼覺る時。身じろきの音ふまれ。咳聲せせきもよれ聞けくき。久兵衛参りたりと告て内に入。湯水より食事のとりやうさひをもして尋宅を退き。まてまゝあまものに出んとする時も。今参ると告く歸りてまあつ時寒き時をいはず。ろれまゝに至り。安否をどひ。休めどいひ。されば。此住居同じ街ちまたさきとも。あまりにふびくもき。する孝心不感かんじ。あふりけ人々尙も近のれどはありて。明る家の壁をこぢちて通はしめたりとあん。あるとし窮樂下血を病て。臥牀を汚すまど時なきを。自取捨清む。妻恨と歎ていふ。是はわがすまきぶきらひを。君まかまひ

まふり。心を隔給ふやと。久兵衛首をふりて。いあ。これは親あるゆゑにする也。汝もまゝ同じとつし。心のうちにはけがらひしやれもふり必背あり。露斗まされもいんよ。父のさめいしはしけきせしめすといふを。妻もさるもれまて。いふで透開ありはわがとりあつうはんとせしかど。其ひまあかりしとなん。是にてよろつの仕へのやきをまるべし。窮樂門人の話也。又語らく。窮樂も親わる時孝ありし。其一ツをいひ。ある時筆を染て字の篇を書たる時。母呼しうけ。たゞちに至る。さてことばて、座を復し。傍つくりを書け。其所へ門人來りしに告て云。およろ篇の勢ともちて傍つくりをか。されり。はなれくになり侍るを。唯今かうくありしあ。おくれて書し傍のりあひ。常よりもよし。是他奇し。母の陰也。親といふもの有りがまきもの也。といへり。おまふに白如此孝心ありて。また如此孝子を得し。自然の報あらすや。窮樂洒落の趣の後に傳をたつといへども。其徳行の事實にあてり。久兵衛は因とあま。又舉るのミ

凡近來民間の忠孝の行實多きは。仁風の化よるべし。されば見聞人もまたこまきよるこびて筆記し。上木に及ぶゆゑに。今繁く出さす。古きがもれらると。今生存の人とは。花顔子が拾遺の舉不委ぬ。

崎人傳卷之一終

崎人傳卷之二

三宅尙齋并妻女

尙齋三宅氏。名重因。通名丹治といふ。山崎開齋先生の門人にして。為人剛毅。經學を任とす。はしめ阿部侯に仕へて世子の傅となる。世子忍ひて花柳街に遊ぶことを憂て。まづ諫れども用らる。つゝの近侍二人も此人の門生也。是はた諫を入きども用られぬのさからひ。花街に誘ふ。時々あきり。議にあふれどして終に亡命す。こゝにおいて丹治もまた亡命せんとをはりて。一室に禁錮せらる。さきのはしめり自殺せんとおもへりしかど。よく思惟するに益あり。昔の聖賢も憂にあふりて箸述ありし。吾もまきに倣んとれもふに。紙筆を與へさきばせんりさき。うらうらして釘の折るるを拾得て。さう風寒に犯され鼻淵出るよしをいひて。紙を多く乞。彼釘もて身を傷り。血を墨とし。鞍の折るるを嚙て筆とし易説を草紙。三百枚に及べり。後にゆるさきて京師に登りしりとも。尙三都れ住むを禁せらる。うは。吉田を氏とし。尙齋を名として隠れ住し。終に禁も解て本の姓名に復せり。或年妖怪ある家と知なから居を卜し。其妖止まらんとそ。厚賜もふへした。し妖怪ある家と知なから住し。中行に過り。孔子の己甚をまよひぬをこそ。法則といすへけれど。閑散餘録に許せるの宜あり。

三十三

○尙齋の内人その徳尙齋にも勝る事とかや。尙齋禁錮せらる。時。母堂と子二人を婦人に托して

四十三

。金貳拾片を與へ。母は奉養懇にいとむべきよしを命じ。後三年を経て放さし時。相まみへて舉家安全を喜ぶとき。婦人彼金を出して尙齋に返す。尙齋大に怒てこの何事ぞ。如此るば母君の窮し給ひしこと如何ばかりあらん。汝不孝は罪いふべからずと罵るに。婦人徐に答て。母君の奉養の心の及ふ限り盡し侍ぬ。唯我身の人のため雇とありく。せざる所なく。其價をもく仕へ奉りし也。此金のかく禁を許されしやん時の用又返しやさんとたくいへぬ。とらわれとあり給ひてのさこそ苦しうねいしやさんに。妻子は身として安くあらんものかと思ひて。吾等三人の冬綿の衣を身に付けず。夏蚊帳を室にさきぞ。かれば母の心爲にともしきまどさかりしと語りしかば。尙齋も大に感じて其勞を謝しふりとる

僧 鐵 眼

僧鉄眼。諱光。肥後國本願寺末下の寺に生き。既ハ妻もありしが。其宗徒不徳无才の人モ。寺格より上位に居ることを甘心せし。黄檗山に於て木庵禪師に従ふ。其妻ある人尋登しかども對面せざるをいかりて。黄檗門前に旅宿して。師の出るを窺ふに。或日果して出たるを。まひていざなひければ。止事をせず。伴ひて故國へ歸り。其郷まで入しがぬけて上途し。又黄檗に至る。法を講後。攝津國難波村瑞龍寺を建立せり。世人今猶鐵眼をもて其寺を稱す。一切經の藏板を思ひうちて勸進せしに。其料金集れるころ。天下大に餓しかば。師憐みて。伴の金を不殘施し。又如前勸進



せるに。數年ならず又集りたるが。再び五穀不熟にて餓死多ければ。此に於ても此令を施行に盡せりされとも徳の至りにや。第三回の勘進にて。藏經に印刷成就して。其經を頒つ所の代金を。本寺より以下。一宗の寺々に配ること今に於て同じ。同宗に錦袋といふ藝をうるも。此師佛學深く。說法能辨にて。俗間を化度れること多けれども。生涯建立門にかまじ。自は腕力十分ならずといひて。吾法嗣をたてず。法弟寶洲和尚に寺を附屬は。是又他のかゝる所あり。寶洲も佛學に長じて徳行ありとぞ

米屋與右衛門

攝津國今津の里。米屋與右衛門といへる。儒學に長して節儉を勤め。富豪なれども僕に交りて。自造酒の事をなし。世渡にたこらされば。ますます富り。富りに隣ひては。ますます陰徳を行ふ。ある時親族の僕。主人の金百兩をつかひ捨て行へなくなりしを。さまざま尋求て深く諫めて後。其百金をあつた。ふた、び主の家へ歸らしむ。又此里の内に路甚狭き所あり。されば火災あふん時人の難あるべきを。おそれて。其所を買て廣くは。又板橋の水災のときに危しとて。石橋に造るへ此類舉るにいと多し。尤常に貧人を恵むを所作とす。されば此人死せるとき。遠近の男女集りあるをわけて泣悲しみけるさま。釋迦佛の入滅もねもひえられけると。見し人語りき。こゝにぞうしきことなり。其悲しむ人の中に。愚かる婦ありて。是ほどに學文きたまへるさへよき人なるに。もしさもあくばいり斗よき人にてあるべきといへりしと。かや。一語天下の學者を針すといふべし。

内藤平左衛門

關東のちらひ。貧民子あまたあるもの。後に産せる子を殺す。是を問夷といひあらひて。敢て慘ことをえらひ。貧凍餓に及ばざるものすら。傲く此事をみせり。官の教われども尚しかり。然るに陸奥白川の傍邑須加川といへる所に。内藤平左衛門といへる豪農これを歎き。年毎に縁を求て。問夷んと思ふもの有とさけば。其養へき財を與へて救へり。もと米價賤しき所なき。多分は費にのあらずと自のいへるとなん。此人篤實類なくて學を好み。されば是のまからず。人を救ひ。あるひは道橋を造り慈悲を行ふと多ければ。領主も賞し給ひて苗字帯刀をも免され。士に准らへらる。といふ。身よからんとせる時まで。孝經を机邊に離さず。此救ひの業も世々守るべきよしを遺言せしかば。今其孫の代に及ひても猶もとのとく。まかもつゞき篤實の人ありとかや。或僧この慈心を聞て。吾寺の門を建ん施財をもとむるに。ろの人笑ひて。吾は人けられへを忍びぬ故に救ふあり。寺れ門なき何か。いくるしからんといへり。とぞ。凡世の富有の者の所爲に異あり。

此草稿を見て幻阿法師曰。昔もろこしにも子を問夷類ひありて有道の君子是を救へることを。群談採餘にて見しと。即ちつして贈くる。買彪爲三新息。長。小民貧困多不養。子。鹿巖

爲三其制。與殺一人同罪。數年、間人養子者以千數。曰。此價父所生也。皆名爲買。又東坡曰。鄂岳間。田野、小人例只二男一女。過此、則殺之。云。是もまた制して救へるよりあり。文長ければ略之。官人はを救ふに尤仁政といふべしされども志あれば猶安く庶人にして金を捨て救ふに甚かたかるべし。中原の地にても間墮胎に及ぶに尙間夷の類されども。是の貧人の所爲にあらす。婦婦のみすることあれば救ふべき道なし歎くべし

寺井玄溪

寺井玄溪の。其父本多侯政利に仕ふ、其國除しく處士となれる後。玄溪京師に居て醫を業とす。元祿十三庚辰歲。始く淺野侯長矩に仕へ。醫をもて江戸に侍り。明年春。侯吉良氏に傷をもて。自盡を賜ひ。國除んとする日。衆どもに赤穂に至り。遂に退て京師に還る。後日義舉の事起るに及ひて。諸士と俱に參畫あつうらすといふことなし。共に東行せんとせるに及て。良雄大石氏をひてとひるよしなり。八月六日の手書にみゆ。且三宅觀瀾の復讐録にも出たり。良雄の書は大意は、醫の任異あり。任異あるをもて行を俱にせり。われより驅催の誦あらんことを憚る。さうじ留りて後事を理せよ其身命をいとひて留るにあらすあぞ。丁寧に言を盡し。觀瀾の記に。君臣の義異なることなしといふとも。仕る日あさく。且醫人の衆のめめあらるゝともて。歩を動さば必人あやしむん。といふともてとゞむともいふり。觀瀾もまた玄溪の知己なれり。定て其説を聞て

記し所あるべし。玄溪は、にわいて其言に従ひていよるといふとも。息玄達をもて東行せしめ。諸士の病を護らしむ。復讐のこと遂て。其月廿六日江戸を發し京へ還る。其厚を見るへし。玄溪後又諸國の招牌ありといへども。並に不應。正徳元年病て京師に終る。凡此舉。四十六士の事の人皆まれり。此人のまどにあきてり傳ざるをもて。あ、に其義信のひとしきを著し。觀瀾と交殊よ善きも。理義の間にくつからざる故なるべし

予私におもふことあり。禮の神弓に。工尹商陽也。陳奇疾と吳の師を追時。奇疾にいはれて敵を射る。一人を斃して弓を韋にせんとするを。商陽が仁。人を傷る。尙勸められて又二人を斃す。一人を斃すごとに。其目と槍その御をどめぬといひく。朝に不座。燕よあづららず。朝に座し。燕に預る。大夫殿上を許さしを。三人を殺す。亦反命するよ足りと孔子曰。殺し人ナ之中有禮。とみも。其官卑けきべ。仕る所もまよ。是は應すへけれり。其士夫にあらざるをもて自こをばとぞ。まうれい良雄。玄溪の東行を留るもの當れり。又義士の中。三村包常門と云ふ。纔に厨下の小吏としく。其主姓名をもまらざるべき同とけ者なき。同志の諸士。あるひの財を貪がためあらんと疑し。のども。始終志を變せず。其祿を食く。其難に死すべしとれもへるなべし。是も商陽がいふ所。孔夫子の禮ありと宣へるをもて見れば。厚も過るとも云へけれど。此舉高祿の世臣といへども。免きて恥まらぬ多き

問ふ如此の。有がしといふべし。予此記をよむと。包常が志を憐がために。因ちなまざる

大石氏 僕

大石良雄。赤穂の城を退て後。暫其城下に在くことを辨へ。京へ登らんとせる時。もと使所は奴僕八介なるもれ。同城下に住るが來訪ひていふ。我も御供して京へまわり侍らんを。今の老はてぬきは心にもまうせず。これの御對面まわる限あふんと。は名残いんのまう。まうし何にまれのまみの物をたまひらば。身のあらん限の傍に侍る心地あらんと。良雄うまつきて。げにことわり也。何うとふさんと。あうりを見れども。調度をまひや半の京へ送り。残れるも荷づくりまを物をあし。硯の入りまはこひとつあるをわければ。金貳拾片バうりありけを。せめて是をとて與ふる時。八介大に息まきて。たまちに投返し。是が何のうのみぞ。身こそ賤しけれ。心のまのりあらんや。此まび殿の不意にあくならせ給へる。吾等ととま生々限あふ悲しく口をしきに。おめくくと城を明てはひ出る心にくらべらる。か。今のかまみも回しからどとまはしり出んとするを。まそが良雄なれば。まひてまめくいとこととり也。我あやまてまう。あまりに與ふるものまゆゑの事。今れまひよりたることを有て。墨押そり。ありあふ紙引ひろげて。堤の上に編笠着る土の。奴一人のまるかま書く。是はおぼへたるや。まうくて江戸に在



し日。汝をゆきて吉原の花街へかよひし道のさま也。是のうらみともありなんやといへば。忽大
によろこびて。まれく。是にまざるはうらみなきし。其時のうらみありし。鬼ありしなど昔語して。
泣く暇乞て歸りしが。其かけるもれ奴か女の録に傳へ。その主あり城下の醫生の家は珍藏せ
ると。其國人の話あり。義士の奴に朴實清藤の者有けるは美談とぞし

小野寺 秀和妻

附 秀和姉 秀和詠哥

赤穂義士。小野寺十内秀和妻丹子。灰方氏の女也。義氣風雅俱ふ其夫の行に配して。ことおむつ
まかりける旨の。秀和よりたくをる。敷通れ書よみへり。初赤穂の難に馳下る時。かしてよ
り。同姓十兵衛へ贈る書に。「老母妻にも此志の不聞は様子にてさとりたることもあらまほし。
中々にて聞てもさのまじくおぼさお有之の間。被仰聞下さるへくいと有。又その明年復讐
のふめ東行てはち。極月十二日妻へ贈る文にも。「萬一如何様の難義の、と來るしども。見ぐ
るしやうらみのまじく。又何をもちき世の中にていひ。猶以うやうにも渡世め
さるべくし。心の動さおのまじく覺へしもある。中く心安く存。今更おもひ残すこともあくて。
心よくうち立一ま。ろこもどもにせめての本望とれもひ給ひへり。又二月三日の文にも。
「そもも安穩にも有まき歎。さ侍らり。かめてうくこのれこと。取亂るまよまじきと心安
く覺へし。あどのごとき。前後の詞に。其人からえらる。もとより此催の心づのひまさ中にも。書

かひされ趣にて。其風雅をも。中にも極月十二日の文も。此方のうらとりわ々相坂の歌哀のよ
し。よく聞給ふとぞんじし。そこもとの哥さてく感じ入し。涙せきあへず。人の見るめをおもひ
およことに涙をのむといふ心よて。幾度の吟じし。おくはのまじり可なり。是はつさくも必く
哥は捨ちて。たへはよみやするべくし。とあるなど哀にやさしくころ。復讐のまとおまりて後。
此婦人のよめるうらみ。秀和の返事又感入と見へしも其外も傳へらず。平生によめりし。夫
婦どもにうこの師とせし金勝慶安のゆうりの人もてる直筆の寫を見しに。數首あるが中。そこし
ま。に書出つ。

なき人の墓に詣し言書ありて 私按。此亡人の秀和の母義おやとぞぼし。

さのふまで問はこへしことばはに聞まろかふき松の下風

はる風を題して

咲そむる外山の櫻匂ひきて人おどろははるは朝うせ

磐瀬てふ名所の題にて

くれて行秋といはせの山風よもみぢりつちる音はさびし

などよろしとればゆる。其兄藤兵衛の。同家に仕事が義に與せき。はた後難を懼る故にや。秀和
せず。其弟喜兵衛。他家に仕く江戸にありしを秀和といをしうども。兄藤兵衛より不通のよし

いひおくりしとく。是もたいめせぬよし。秀和妻室へは文を書て、「世ひもなきお兄とちとそんしひ。かやうは心にてい。此方のありゆきよて。そもし殿もかやのぬよてあるへく。彌便もあく一分の働にこの渡世。太義千萬にていなどみへり。排風柏舟の詩も。亦兄弟あれどもよるべからず。まばらくま、お往て懇れば。彼が怒と逢といへるもねもひよせられてあられあり。か、ましうバ。秀和。同息秀富。幸右衛門。自盡を賜へる後。おもひのひくや。数日食を断て身やうるといへり。墓の平安本國寺の塔頭了覺院ありて。梅心院妙壽日性信女。元祿十六癸未六月十八日と刻せ。鬼録に法名のうへに「妻や子のまつんものをいうがよし何か此よにおもひ置へき。と辭世のうを書。自滅と記す。然れを刃をもて死せるよや。

○因に記せ。秀和姉も。同義士大高源吾か母あり。是も義あり賢ありとえられく。源吾よりは文に「我々どもの義盟の人なればあり。親妻子も。ゆゑ、まは座してモ力及不すは。萬一さやうのことよなりやい。かめて仰らまは通何分も上よりれ下知れ通。しんじやうお御覺悟されり。御はやまりにて。御身を我どはあやまち被成はは事など。くれぐ有ましきは事おてはさしや。必く左様御心得可被成は。よの常は女のおどくに。彼是と御歎きの色も見へさせられ。愚おのしやいひ。如何斗まのどくにて心もひかれいんや。さ及がゆひの御かくとほど御座あされひて。思召切。かへりてけなげなるは働にもあづかりし事。さてく今生の仕

合未來のよろこび。何ことか是お過すいんや。あけはれわら兄弟の。士の冥加にかあひるる義と。淺からぬ本望に。うんし奉りい。さきよては首尾のはどの御心にかけさせられまじくは。など見へるをもてえらる。秀和妻への文の中に。貞立さまをよびひかへて。共にうきを語り慰めて。久しからぬは一期を見とけ参らせられい。頼置事はよていどある人いし。○秀和うさも數々みしが。復讐の折あづまへ出つとさの哥。其妻への返事によしあふ坂れと

別れても又あふ坂とたのまひはさぐへやせまし死手の山越
このうたのことあり。又まがの浦にこ。

古郷よかくてや人の住ぬらん獨寒けさまかのうら松
都は所らやうく遠ざかれむとて。

ふるさとの心あてある大びえの山もかくる、跡は白雲
日よく時雨ふりけれい。

別れ行思ひの雲のちとふやけふもまぐる、東路の空
所くよてよむうの中あとして。

よりくよ都に歸る旅人の數にもきかん身の行へ哉

とすれへぬ都のとももの面うげに道行人をさへへくぞとる
又その折。うこのともだちのもどへおくれるり。

思ひ出ハ音羽の山の秋この色を別し袖ぞともとよ

復讐のとき。各姓名を金紙短冊に書て脊よつけさる。此人も同じまるしのうらに書けしうら。
とそれめやも、よ余れる年をへて仕へし世々の君が情を

まきの先祖十太夫より世祿の恩をよとし也。赤穂より妻へは文よも。「おれは存の通に。當御家の
始より。小身がが今まで百年御恩おて。なれくを養ひ。身あふ、うらに一生をくらしは。などみ
へし趣あり。やう哀あるり。二月三日の文よ。「幸右衛門よとも心安くたもひ給ふべし。我此うら
にくあさめふれかし。

迷じな子と、もよもく後のよの心の闇もはるのよの月

死ぬべきなきり。古郷も忘らんかとも思ひめさるべき。まの哥此ごろおもひつゞけしや、ヤ入
ひ。膳部にしろくの春の野菜を出されるるを見て。

むさしの、雪間もみへつ古郷のいもか垣の草も、めらん

凡四十六士の詩哥連俳として。此一擧をさるせるものよみえし大か市井の間。好事の者の偽作
とればゆ。三宅氏もまかいへり。此老のうら右お舉る所の其眞蹟の寫しにて。かへりく世間の小

説にのこへぬもの也。猶數首あまももらしつ。その平日のうらもみし中に。時雨を

定あき所ふともみへす極の屋にかあす過る夕しくれかな

炭かまを

山風にもさげの雪を吹とちて烟短き小野、そみ甕

老後述懐

老ぬれによそにさされていにしへを語をだにも聞人のなき

あとよろしとみゆ。ゆひにまれやとよまきこれのまろ。心何かひの間にも。意の達せるうたの
出さけめと殊勝よまろねや侍れ。ま古學先生の文集に。此母氏年賀の壽詩あるを見れり。そ
れ下流とも汲ましか。まの先生他の慶吊につきて。由縁あき人又詩をねくふましとのみえさき
はまかおもへり。

尼 破 鏡

附 曲 翠

破鏡の。膳所の土管沼外記か妻也。外記のばせを門人にて。馬指堂曲翠といひて。俳偕をきて世に
まらる。妻の和泉岸和田の士れ女よして和哥を好む。ゆくし筭の妙手也。一とせ夫と、もに故
郷に趣き。播磨路を行めぐりし道の記をのけるあど。文章もいとよしと。見し人語られき。予も
見んとつすまといま探得す。外記の。傍輩の曾我權太夫といへるもの。寵を待て。上下のよめ

よりらぬこと、も重り。人皆惡めれどもせんうさく齒を嚙しを。已が家に招き入。悪事を責て殺害し。其身も心靜に腹切て失しが。主君の非なる名を忌めて。私の爭論よてもあしたまば。侯怒て。うの子内記といへるが江戸に有りけるも。自盡を命せられて家亡びぬ。されば今もかしてあ語つゝへて。忠誠を悲しむとぞ。う、れば妻は尼になりて。堺津に隠れ住ともより好めるう。とよみ糸をなうして。悶を遣りける。その筈の手今もろこみ残りて。破鏡流といへりとなん。破鏡再び照さぬといふ心をもて。遊名あはつの名もけけるも。自操の意に風流をも。曲翠の名も聞へても忠誠の實のくれぬ。まして妻の俳偕によらされいろの徒もえらぬ人多けきをしくて聞ま、にまると。

遊女大橋

都島原に遊女大橋。實の名の律 もと彼所に大橋といへる名妓あり。うよみ手書ぬるう。その手の名を嗣る ことによけきり。大橋やうといひていさよ傳へるよし。此妓もろとなん。よろづみやびを好みり。さばかりの女まき。中くにつひのよるべもなうりけりし。尼にあらんとれもへるを。老なる母のめいりいとめらふほどよ。栗原一素といへるの世のそゆもけにて獨あるを。よき處がなきあるべしと人あけせけり。其家いとやどしけきり。手づろ雑事ども取まかふるも。猶う物がつりを見ながら飯をも炊きける老の後彼島ばらとを過て。

よそにみておもふもめらし身世昔うき河竹のさとの夕は

此うの下句さとのつづけがらうそはあらねど。ころのいとめられ也。やある人のもてら自畫賛のうらをりし

とするなと契し春は夢されや寤覺とひくる初丁の聲

畫もよくするにわらざるべけとぞ。其さや風流に見ゆある所にてみし。海邊雪を。

和田の原波もひとつに苦まろき雪をのせふるあされ釣舟

花もさちの時。男のもちひを腰につけて東山おあそべば。口きりさ、まを首にうけて西山にねもむく。のこみお才をた、のりしけるが。後に夫婦つきて。有馬に湯お浴し。妻はそこに髪をねろし。り。さて禪にも参して。白隠和尚京師逗留の日。何處にやうでしに折く冷泉舜靜入道殿お出わひまゐらせし。和尙此尼のも鳥原の名妓あり。と語られしほどよ。入道殿。さらばむうしのまげふしとへるものを覺へるん。うひてさかせんやとほろみ給ひし。それゆしばうせいとむつうしく。今久しくありて思ひさるがうへに。老をえにてはこいぶりもまひひがこ。うのころの小うたといふものも。今のふりよあらず。さこしめさんやとて諷ししも興ありしとせん。それやぶわり時。夫婦ともよまれり。夫のも頼ひなき遊蕩よて。美少年お淫し家産をも破しとさけるに。後のあらくれし老法師にて。大これにてよくもいひ。萬のと



みなまれるねも、ちして自負せるをよくむ人もあり、興する人もありき。京のうちにて人のま
れるをのこなりしも。今の四十年のむうしあり。此妻人に語りし。都の四方にて景物のよき所
く。月をみるに、聖護院殿の東北に松の三本ある丘をとりと聞に、五條のはしより下、夜深く
なりて。花頂山のふもとよし。水鶏のた室の前。ひばりの朱雀野とぞ。其すこの野と五條のなが
れの下。已もよくまりて。其言は、がはぬをおぼゆ。聖護院殿のめぐりもうちはれて、すべて月
にのよき所也。松のある所のさぞなん。なやこ、そむべし。

遊女 某尼

大橋う島原おわりける日。妹とよびける遊女を。中京の富る人とりて。とある所に隠しすゑる
を其をどこば母さ、何けて正妻まといむるふる障ありとて諫るに。あけひのぬよのあふも。さゆひ
てやどへにけま。さうば今の彼にくれ人にあひて。いはんとてよびければ哀に其よる來り。
もどあろびふりけれを。いのに花やたふんとたもふお。見めのうちこそよけれ。有さよはた
あるよりもうちまめりて。着たるものなどもいとあやまし。さてそのごふしめよありて何い
たれ。母刃で自近くへよびけま。猶始めはま、おてうしこみをも。刀自かうくとへ。こへ
のあくて。頭にうつきたるものをぬぎて。かぶしの切たるに。一と巻の文を添て出す。刀自いと
服ぐるき人おて。まの我にもものいせじとてするわさう。あなよく。あでう尼にあらん

する心はあらん。どの、しるど。かへの人しつめて。やづ其うけるも、見給へといへり。やをふしづよりて取て見るよ。「もとの忍びしをまうけいといひ、ましけれと。父のあるやをどなき御方おけうへ侍りしもの、後おのはあきて、朝夕のけありもへへなるうちには。おもくわづらひて。薬のあつかひもせんかたなきに。みつうら身とうりてあそびになり侍ぬ。さて後父も母もあつく成しうべ。あわれのまじき人もあ。此川竹のうきふしを道れて尾にあり。父母のため。みづかかのためも。涼しき道のおこなひをのみし侍らんと。神にも佛にもねぎつ、月日をわたりしよ。此あるじの君。年比馴れぬらするま、に。この志をあつれとおぼして我が身をあまふのことがねにかへて。まばあばしとてなん。おあたり近くはませ給へりき。さてはやうぬむとげぬいさ。さすがに人のこ、ろのはあなきもけにて馴れやさうでとる。お情のやどのやるのうあ。今いど別参らせんことを悲しきに。けふのあすとのをきて。おもはせに月さへ日さへ重り侍ぬ。う。るよしをきゆめまらせんや。おまめむりへ給ふ障あすまれと。いうにへへくしねばしつらんと。お心くるしうこそ。こよひいめ給らんと聞えさせ給ふにけきて。おもひさめてなん。ううかぶしとち侍ぬる。うまなることにはあらぬよしを見へ参らせんいめ也。あどやうも向いどこややうもて。哥もありなれば。刀自よくくと泣て。さる心あらんともあらで。いしたなめゆるはとのはづうしうくやし。今いた。おれをたのもしきものよなばせ。いうにましく思ひ給ん

ま、おばうらひてんとねもどろに聞ゆ。さて住どころの京の内にてさるべき所をといふに。いな。どつ國の水草清しとけりこめれど。さるべきなき遠き境のさすが元掛侍らじ。大原の郷こそ。む。あしより世をいとふ人れすみ所としもけらるべれり。そこに身をたく斗の草の庵をひて。あへといへば。やがていふま、よまなり。それよりおまおひ。そのまして。いとたといへり。あして。るが。いとせ斗ありてこ、地あやまけり。さうりけれり刀自聞つけて。山さどびんあしとて。ねして。近き所にうつしぬ。くはしむりへてあつらひすに。尾いあきてうけず。あうく日を経ければ。刀自いのにせんと頭をうきまてとぶるよ。あるもけはうりて。おれがたのれにてありし時のとも大橋といふり。今人づまにてこそ。お所にあり。もの、心まりて。うなまもよむ人も。くれをとびくいさめさせ給へど。敵るに。いとよまこと。て。やがてむりへて。いはす。尾うちあきて。そよ刀自君にありれと。うへを見給ふこと。山あも海にまたとしへあまやでに侍るを。唯あが姉の君ぞ。この心をよく知給ふべければ。ねもふことさこえん。たのまにてありし時のこ、ろけくし。い。よどかおはれ。ばばかしく悲しきこといひたつれば。地獄餓鬼ぞいふさうひもよこあらまされをのがる、だにあるをかうやのま、におこあひして明しくらひあん。我が身いた。今唯佛の國に生きざるれもひにそ。されどもとよりはうあまもけにはる、女は心のうへに年まよひ。うち比に侍るうへいあん。後いうならんともあが心をえまう侍らず。もしよむて、ろいであ

五んふり。いかよさやしう口をしかりやし。のう心ちけ清くあらんほどに身まうりばや。たもひ
 どりく侍ればあん。病のたひらぎぬべき薬はさふにうすじやねもひしめ侍き。おやうろの人の
 き、もどきふりじと。今やでりうも聞へけすくせしをみと。いとねまをろにくとまの、其
 こ、ろれうをもよみしふ。さしもの女もいさむべき言なくておまつ。さういくなどなく終たり
 しが。露亂る、けいひさく。めでたかりしとぞ

右の事状の馬杉亭安とて。九十有餘までなからへて哥好まれし老人。予う忘年の友ありし
 が語りて。其ころ何かしの朝臣假名ぶとに書たまひ。又ある儒士真名にも書しが。今にい
 づこに紛つらん、ろの尼の名もどけれしとしまれしをたもひ出てまゐるす。物語ぶとめか
 しく書るも。かの假名ぶとの名をりと思ひてなり。又うのうぶしとちる時のうたを撰
 らへてよみこゝすむ。

一筋にたもひうちぬる法のめちすぢけ髪のをしけくもあしおあじく。薬をのやで死ん
 とせる時のうたにさぞらふ。あがらへてあらんもれかりとさきながら後の心のけまきぬ
 よに。いと拙けきと。彼志のや、をりけたるおれバ。手向ともあつ侍らんやとてなん。

石野權兵衛
 弟 市兵衛



石野權兵衛。弟市兵衛。兄弟ハ。京師四條坊門西洞院の東に。桔梗家といへる商家也。兄弟ともお學を好む。掘川の流を慕ふ。且兄ハうめて佛學を好み。殊ハ三論に通ず。弟ハ本師に委しく。又書能き。又雅樂を好む。兄弟ともひとしく。道遠しといへども音響ある所といへば。必やく友契深くし。兄の妻ある後も久しく同居す。弟學文あそびにつきて出る時。夜更々歸るに。戸を敲くことなし。縦に。咳しはか入るを。兄速に聞つけく戸を開くこと常あり。もし聞つけざれば。門に立く朝に至る。母没して俗忌五十日の間。墓所鳥部山に曉ごとに詣り。奠供と花水を携へ。丑刻過るころ宿を出て。卯刻近く歸る。兄弟伴ひて一日も闕ことなし。子の生前の孝養知へし。市兵衛ハ一甫と號す。後同街の裏家に別居して。獨身にて住りしが。夏冬となく頭を毛けにゆ。みすびつのうへにやぐらをおひしを。机にのへて書を見る。伊藤東涯。松岡玄達二先生。折々にどはれて談話有く外。世に知る人すくさ。草庵龍翁まぶ幼くて。文好むこと。此一甫の勤めに上れり。此多能友愛けことをも語られぬ。後れさよまよよく知人に聞き。市中ハ隱君子にて。近世めつらうとぞ。

隱士石臥

此傳安藤爲章年山打聞に書れしをうつす

石臥。若さほどハ長野采女と名れりて。真田伊豆守信幸朝臣に仕へり。叙術の諸流を極め。手うくこと大の能書にて侍りし。神道家に立りてみちをふとみ。禪教の學に深く。哥林にさへ

遊びく。よめるうた多く侍りしが。皆忘り。さやく記憶せしとて。東湖禪師の唱ぶを侍りし。みよしれいさくふの外に望もなし花やゆもりて山となりけん 「人家よて庭れさくを

一木こそこのどりよのそれ咲つゝくやまの花より心ちるもの

隱遁の後は左右軒と號しける。正徳三年より二十年ばかりあか。東海道沼津にて身まかりぬ。七十歳までありける。もとより隱遁志ふかく。妻子をももて侍けるとぞ。

賣茶翁

賣茶翁者肥前蓮池人也。姓柴山氏。諱允昭。月海と號す早歲。薙髮龍津の化霖を師とす。化霖ハ黃檗獨湛禪師の弟子なるをもて。たづさへて賣藥に至る。一日湛めして方丈にいふらしめ。賜ふに傷をもて。少年といへども。其才器異あるをまれば也。翁まはく自勉む。二十二歳におよび。病を患て困しみ。自安んずることありす。こゝにわいていささかかりを發し。病いまだ全愈するは旅さち。陸奥に至り。萬壽の月耕に附して歳をへ。まよあまよく諸方の知識の門に遊ぶ。あるは淇堂律師によりて律をもあふひぬ。西ハ東ハあをといめ。身くゆるる所あく。ひとへは此道をもて任とす。津くしは雷山のまゆに止りて火食せず。一夏を過がこと。其精苦をまるべし。省悟すとといへども尙自足れりとせ。つひの言に曰。むのし世奇者座竜門の分座を辭して。是猶金針の眼を刺がことと歎。毫髪もしるがへば晴すなりち破る。まうじ生々學地に居て自煉ん

人にいへり。予のみに是をもて自警む。もし能一拳頭あまみく物機を應ずるに足らば。いで、
 人のためにして可也。其あるひにいまふ志からずして、ろこむくの學解をうざりて。顔を抗て
 宗匠と稱せん。恥る所ありと。后肥前にかへりて師に仕ふるま。十四年。師没して。法弟大湖を
 わげて其寺の主とし。自の平安を道る。さて。日釋氏の世に處る。命は正邪の心あり。跡をあらせ
 夫製茶の徳に得こりて人の信施をわづらひず。わき自ら善くする者の志にあらせど。こゝにし
 て始て茶をうりて飢を助く。凡春の花よよくあり。秋の紅葉をうりしき所をもとめて。自茶具を
 荷ひく至り。席をまうけて客を待。洛下風流の徒よろこびてろこに何どふ。されのいくやどなく。
 賣茶翁の名あや流く世に聞ゆ。さるに其故國の法。驪を出るもけり必官のまゝしをたづさへ。十
 年一たび歸りて更に命せらる。まどをうく。僧とらへど同じ。翁七十にはまどを復國に還り。自
 僧を罷其國人れけかへて京にゐるまは。下に名とよせて。十年は限りを免んとまふ。國もとより
 翁は爲人を信するもゑこそを許す。まは。に。自ら高を氏とく。遊外を號と。笑く人よかたりて
 いふ。吾貧して肉をもちぬす。老て妻をよろこばは。葛巾野服茶を賣れすぎはひりなへまど。復京
 り去ぬ。凡人茶を賣まどを奇とて稱すといへまど。翁は志茶にあらずして茶を名とす。其平居
 綿密の行ひのまゝ人まれ也。晩に岡崎に居て携ふる所の茶具を取て火に投し。是より門を杜る客
 を謝きて天年を養ふ。或人いふ。一旦座右に長咄しいやと書付られしが。老窮ての全く客を辭せ

欠

MISSING

も。固く辭奉りし。是また紀藩の義によるこそ。よりて容讓を下し給ひ是正して奉けるもめつら
しきふめしあるへし

北村篤所

篤所。北村氏。諱可昌。字伊平。即通名といふ。近江野洲郡北村の産也。季吟法印 仁齋先生の門人に
の氏族也して。京師に住り。嘗て。院中に召て學を問せよんため。北面の氏を嗣しめんは内勅ありしか
ども。異姓を嗣とをやつせずと。固く辭し奉りし。されども其人を慕せよふもゑに儒服儒巾を
制せさせて賜と。まひて召しかい。止ことを得ず。是を着て。院中に書を講ず。疾は病なりし時モ
。勘解小山路殿をもて。人參と中山といふ御硯を下玄給りまひ。隱士の面目と世に稱せり。自筆藏
幕書懷の詩。君黨は人。彼子孫より得たるを左に寫す。其生平を見るに足る故なり

少小涉經史。性氣耽詞章。宿儒時濟々。共是丈人行。生平所畏敬。此日皆既亡。后生何寂寞。
聖學將榛荒。長安幾萬戶。無一人共商量。所好與世乖。爲愚又爲狂。遭遇千古少。吾儕特何
儻。幸無升斗繁。從意自徜徉。請託絕權勢。拜謁無期望。月花屬我去。吟哦習爲常。又
無沈痾患。老去猶堅強。眼耐誦讀。足力涉湖嶺。車馬不須駕。冠蓋何假張。生理又略足。不
用求皇々。寒暑給裘葛。朝晡有糟糠。回首一世裏。比屋屢低昂。吾不覺衰廢。未嘗有
殷且悲貧。兒女態。豈入丈夫鴈。梅蹊欺雪宮。柳條洩春光。一歲此夜盡。依舊迎新陽。



西生 永濟

淡海蒲生郡中山^{なつ}里の隠士永濟^{えいせい}の。西生^{せいせい}と稱す。父河波守兼名といへるは。徳大寺家^{とくだいじけ}の諸太夫に
 て。麻生庄^{あさぶら}を領し。莊内鑄物師^{いそし}といへる所に住まか。其女弟の蒲生智閑の息。音羽右馬允秀順か妻
 あるしゆゑに。知閑を助く戦死す。かゝる故に知閑。永濟を扶持せしとそ。此人もと滋野井殿^{しげのゐの}の親
 しく参通ひけきり。中山に閑居せる後^は。是迄の地名皆日^ひ。藏人^{ざうじん}に補せらるへきよしと勅を傳へ給ひ
 して。固く辭すて

みことれりうしこくのあれど夜とせし我中山のまつやうら見む
 といみて。奉り終に出ずして没せり。もとより和漢れ才人ふく。北村季隆法印の著せる和漢朗詠
 集に抄に。哥の自注し。詩の永濟の注を用るとまか、れしは此人なり。右勅に答し歌も。清原元
 輔の集に

五十六
 遙にぞねもひやふる、うとからぬ我中山の松の梢を
 といふを隠れるあるへま。是は大和の中山ある。近江に取用ふるも皇者の仕業とねるゆなぞ。且
 野の人富田氏の話也。此人近比西生と稱を改し。もし遠き葉すゑの露のゆかりも有にや。凡此
 書近世を集る間に。此永濟主の時代や、ふりびたきとも。かばうりの人を世にまらさ。予も彼朗
 詠集の注永濟とあるを。音にてよみて。五山は詩僧にやゆふんとねもひくは。此説をき、く明く



め。其隠操のまゝのしければこゝに記す。蒲生氏も代々哥人にて氏郷主に及ぶ。鬪戦の間風流の聞ゆありける家の姻族よ。此隠士ありけるもよしてめづらし。

岡周防守

岡周防守某の。備前國酒折の宮の神職にて。神學の名高して奇人也。或時刀を買て帶て出たるよ。たものぬこを人いひかけて。腹あまくなりたり。又他方へもまゝなるに同じく腹あまきあることあましに。されこの此刀の。わきに應せぬものなれとて。常に來る魚商人に。路次まで逢はるにどうせつ。又ある時山中にて道に迷ひ。雨さへふり出て詮方なく。うらちまで辻堂を見付てこぞ入し間に。雨のやまこれぞ。夜もありて。いよく行へさかたもまらむば。一人の僕と供に。そこらろの木葉をさぐり集て。火をうち出し焼つくまで。雨にまめりたる木のはおれいもえす。さる時に狼のこゑをききまばく聞えて。れそろまさいんのまきに。い何まか濕りたる木は葉の中より。おのつから火もへ出さば。やがて其光にて。木は枝折くべまどするあ。其火よそがらに絶せ。ふしぎなることなりき。又或る時春に癩發し。さまく醫療をゆくせども驗あし。今は死をべしと思ひけるとき。こよひの御社へまもりて。いとよ、うさんといへるを。醫師も親族も。身を動かし給んといとあしきまど、とめめければあへく不肯。こどひ途にて死候とも詣ずのあらじといへば。疊やするきから昇て社頭へやり。あまたまきををれるに。夜半のころ。病人も守人

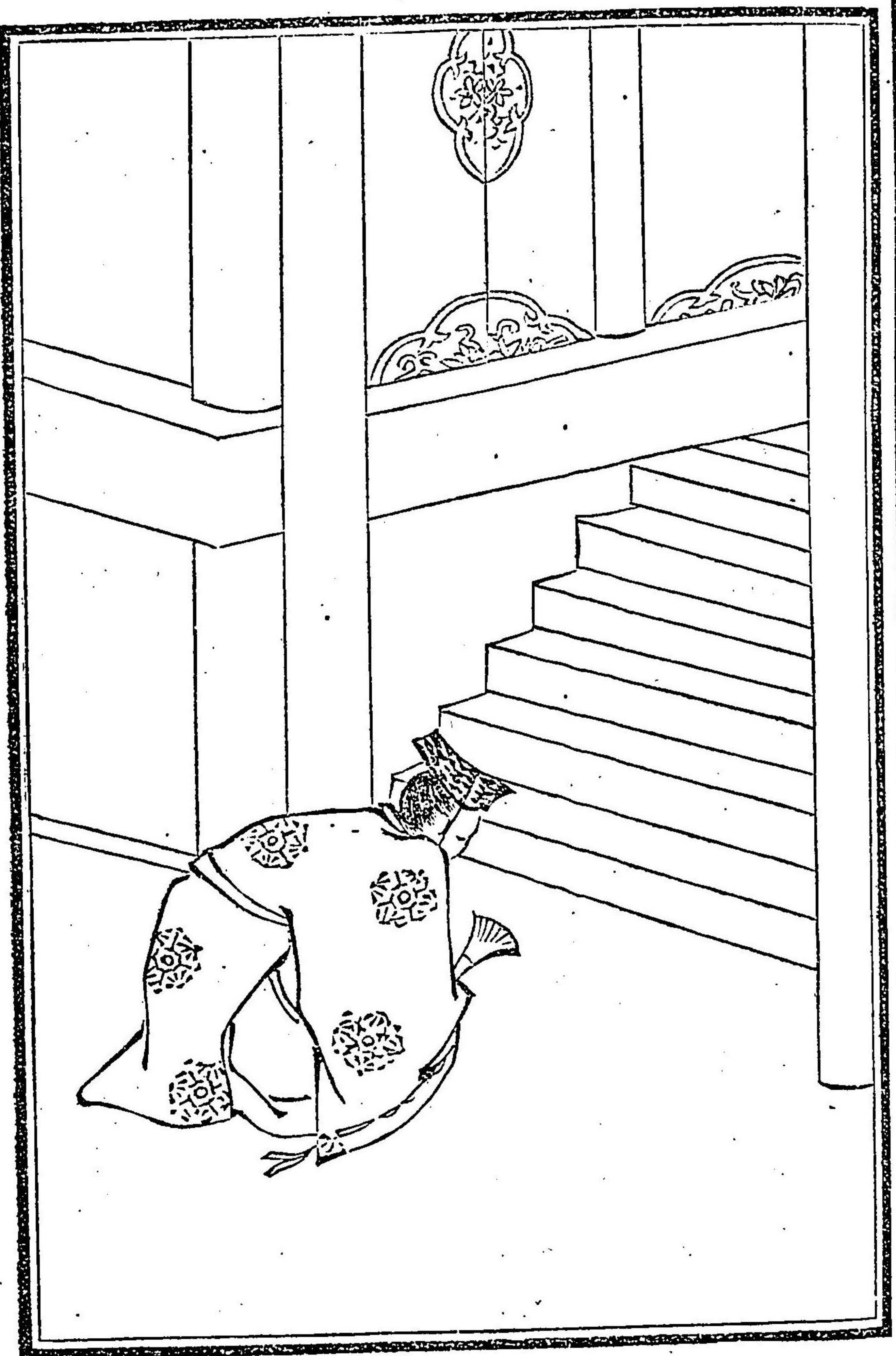
六十八 我志かず眠て。火の消るるをまゑらす。其時周防守くどよぶまゑして。あやしき手して脊を撫るとねかへてうちおどろき。まもるもけを驚して。いかにやと問へどもまゑもけなし。火をどもして脊をませしむるに灘の残所なく愈たり。さて是より後二十余年ながらへぬるかや。尙う、るふしぎたびありしとよく知入かゝりぬ。さこそ神慮にかゝひけめとたふとし。

青木主計頭

青木主計頭長廣の。肥前國長崎某社はまき祀あり。周周防守とひとしく、神學をもてまことゆ。ある時おもひかけぬとに罪せられて。竹をもく門戸を閉られけるより。今の神は仕ふべき身にあらざる。都にこれほり隠れしが、時に名さる人されり。

櫻町院うさしけなく。詔を下して召給ひ。神代巻を講せしめ宸翰をさへ賜りぬ。やがて是を首にかけく。だが守りありといひて片時もなす。四方は國くに遊行す。ふしは山に登りし時よめる。

ふしは糸を登りて見れぬ敷たへ枕に結ぶ草だにもなし
こは道はさかしくかりけれり。二腰を捨て。そけ後は帯るまゑあし。さておれが家に二度かへらざりしとあん。



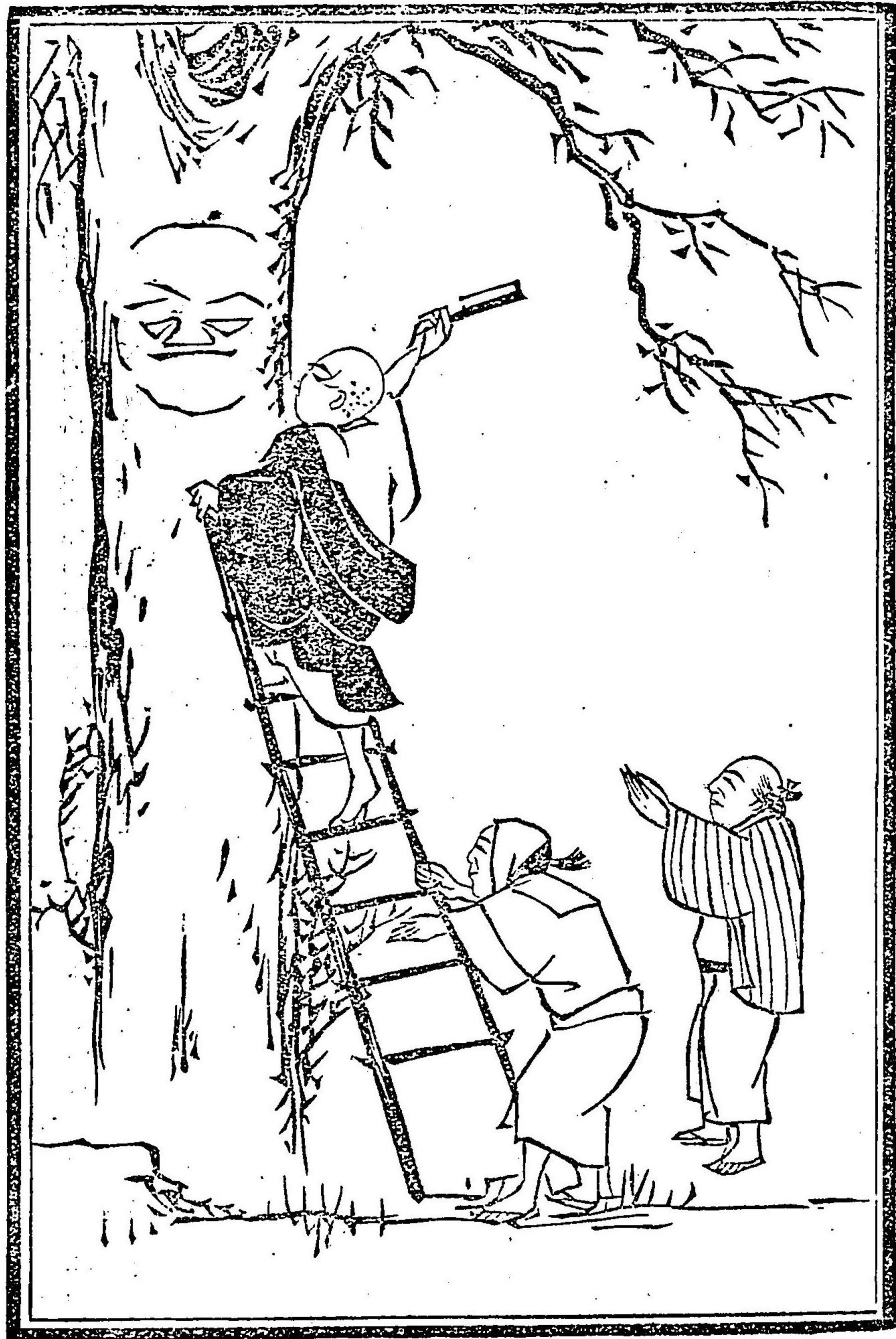
僧別首座

白隠禪師は弟子小別首座と云へる有。出家の寺を持べきにあらず。ホをひく。の在家にひとしとて。所さだめを行脚に年を送る。多くの丹波但馬に遊びまどかや。人間訊するどきの其人れ世態をもて示す。或時に乞馬僧示しを請。首座即雨だれは石をさしていふ。あは石をさすと。雨だりみて滅たりと。又農人集りて説を請くおの曰。田中よ水あれの鷺来て泥鰌をもとむ。泥鰌の遁んど見。鷺の踏んとすと。やある元日に。人の許にて雑煮を喰ふ時。主示しを請にひいひく。昨日の大晦日。今日の元日なれを雑煮を喰也。と老婆親切といふべし。

僧圓空

附俊乘

僧圓空の。美濃國竹ノ鼻といふ所の人也。稚きより。出家し某の寺よりありまの。廿三にて遁れ出。富士山に籠り。又加賀白山にこもる。ある夜白山権現の示現ありて。美濃のくみ池尻彌勒寺再建の事を仰たまふよしにて至りしが。いかやとなく成就しけせば。るまにも止らさ。飛彈の袈裟由千光寺といへるお遊ぶ。其袈裟にありけり僧俊乘といへるの。世お無我の人にて交善ければ也。圓空もてるもの。鉋一丁けと。常おこれをもちて佛像を刻むを所作とす。袈裟山にも立寄がらの枯木をもて作れる二王あり。今是をさるよ佛作のごとしとかや。又あらかじめ人の來るを知る又人を見。家を見てい。或い久しくもつべし。或いいくややさく衰へしといへるお。ひとつもたが



ふことありし。或時此國高山の府。金森侯の居城をさして。此所に城氣なしといへる。一兩年の間
 に侯出羽へ國がへありて。城の外郭斗となりぬ。やう大丹生といへる地。池の主人をとるとて
 常に人ひとりゆりす。二人ゆけば故きといへり。さるよあるとき圓空見て。此水此比にあせ
 てあやしきまといあり。國中大に災にかゝるべしといひしかり。もとより其ふしきを知る故。人
 々驚きいりにもして此難を救ひ給れと願ひしかり。やがて彼飽よく。千体の佛像を不日に作て池
 に沈む。其後何の故もなく。は。是よりゆり人ひとり行人もとらる。ま。止まけきとなく。まの國よ
 り東へ遊び蝦夷の地へ渡り。佛の道志らぬ所にて。法を説て化度せられけり。その地のひとは
 今に至りて。釋迦と名つけて。餘光をふとむと聞ゆ。後美濃の池尻にうへりて終をとれり。美濃
 飛彈の間よて。窟上人といひならへる。窟に住る故か。

○彼袈裟山の俊乗。人の空言するを何にまればこととぞ。蓮華坂といへる所。蓮華躑躅とい
 ふもの有。其花の盛。人戯ていふ。かの花は春をあて。あふれいといふ。この也。こ。ろ。給
 と。俊乗ある日教けるま。にまゐるに。春日のかけまつりひて。いうにもあ。なるを。日影と
 いともい。まことに花のゆゑとよろこびしとなん。又ある人あざむきて。坂を登る。牛馬の
 ことくはひて登れば苦いげきしといへると。ま。ま。して。袈裟のふもとより八丁が間。嶮なる坂を
 はい登りけるが。是。人の云。似すいといくるしといへり。かくおろかに直。入。されい圓空

も悦交られしるべし

中倉忠宣

附山中隠士

中倉忠宣。伊勢朝熊の産にて。京に來て學門す。故ありて花頼子が外舅太田良輔が弟と稱す。
 良輔も開香の伎に名あり。廿五といふ年。ま。し。死。と。べ。し。と。て。も。て。も。れ。の。皆。友。が。ち。に。あ。た。へ。盡。せ。し。が。
 はたして一月餘りにして病に臥しに。人々い。り。醫。療。を。つ。く。し。て。癒。ぬ。是。より。忠。宣。物。を。も
 のどもせと。吾既に死を極しに生れれば。今よりの命。世の外のもの也といひ。春秋の花も
 みらに。酒。吞。て。夜。蓋。を。い。い。せ。金。を。ま。れ。の。人。は。物。も。い。と。す。り。か。い。す。て。何。吾。物。あ。き。の。人。に。興
 ふること石瓦のみとくす。されども夏冬の門戸を閉書とよめて。あ。へ。て。人。に。ま。じ。の。ら。ず。四。條。高
 倉の南へ獨居せる時。友たち。び。く。呼。び。の。ふ。れ。も。出。ず。ゆ。け。ど。も。戸。を。開。ざ。れ。は。相。は。か。り。て。
 食ある故。か。く。の。お。と。ま。今。より。糧。を。あ。へ。す。し。て。ま。ろ。ん。と。い。ひ。て。一。人。も。物。を。れ。く。ら。ず。
 此時常の産なき。も。る。相。友。の。助。力。を。得。つ。も。と。ま。ま。の。數。日。を。へ。て。い。の。に。と。も。せ。ん。す。へ。き。か。り。し。に。
 よ。ま。多。難。を。れ。の。を。學。ぶ。人。も。食。を。贈。る。ま。ま。の。數。日。を。へ。て。い。の。に。と。も。せ。ん。す。へ。き。か。り。し。に。
 折ふ。門。を。過。る。雜。貨。買。有。ま。を。よ。び。て。あ。り。あ。ふ。衣。腹。を。錢。壹。貫。買。ま。う。り。ま。て。此。錢。の。あ。る。限。給。い。ふ
 い。を。買。て。明。く。れ。る。是。を。喰。て。過。せ。り。友。が。ち。折。く。う。か。い。ふ。に。も。れ。音。も。せ。む。べ。も。し。飢。て。死。す
 る。も。ま。す。と。門。の。戸。を。破。り。て。入。て。見。る。に。う。の。魚。を。喰。ひ。て。居。し。の。は。大。お。わ。ら。ひ。ぬ。ま。ま。あ。る。夜。
 清瀧河に行て。瑟笛を吹す。さ。ひ。し。に。川。音。の。さ。も。る。に。ま。ま。が。い。ま。ま。ま。澄。渡。て。面。白。の。り。け。き。ま。霜

雪の夜を重みて四十日にあまなり。一夜もたこらさずしほにあそびしやどよ。明る正月の比より寒濕に犯され。瘵^{せき}の症とありぬ。のりしうは。いさゝかある。勸進帳をと、のへく。みよしは、花や乞食をしてありと。どらうきけつて眠るけしきもあく。大路といざりあがら。知巳の家へ廻りしうづ。日あらずして許多の金を得つ。さてよしのへ駕籠に乗てゆき。うへるさにて大坂へ出て。よらこの知る人の家々へ廻り此のびのみよしのを橋ぶてこのへ。花を月にして。勸進帳に書つけたまは。誰も興じて又數金をあへたまは。はし立より城崎の湯に浴し。其功能めて脚疾治したり。それよりいづことあく行脚して。十三年を経て大坂へ歸り。妻をもとめて住しが又あるとし伊勢へ詣る人を送て牧方^{ひらた}までとて行つ。直に伊勢へ伴ひ。又彼どもに別きて志摩へ渡り。其後遊ふ所をまらす五とせへて歸りし。此妻かよひの貞操ある人あて。忠宣旅にある間。人のために裁縫のわざをし。又導引などももして世をむたり。夏の蚊帳をくれず。冬の火爐によら。夫の旅の苦勞を思ふ故となん。人生れて忠宣が妻となることなうれとそいひやし。忠宣五十七といふ冬うれ兄とせる長輔がもとにありていひく來んとし。二月初に必死ぬべしと花頼も命じて我像を一筆書にり。しむ花頼このとき十歳にまされ。何れ心もあく。いへるまに數枚書されば。其土の自筆を染て。

何やらに忠宣といふ名をつけて月よ花よと騒げるのな

是をうらとて八々お與へり。さる果して明る春二月七日お終るも不思議ありき。此人哥連哥詩作にもうとらす。香は殊に勝きて。御家流といへるものを傳へ百種ふ二三をあやまら。人も賞しなり。其詩哥の口號の花頼幼時あれば記得せと。まの自書とむむる意もあき人なればはこらぬ。をしむへし

○忠宣志摩よりいづこへ行し五年の間のこと、うや。某山中にて一奇人にあへり。人跡絶るる所、庵を給ひ年も老るるが。いろくのもの語をし。さていへることなり。此前ある谷川の水出て橋落るとき。食物をもとむべき通路絶えんと。唯是のま心に。としが。此比のさとりて我命ある限の食有べし。食盡るの我命の終るとき也とねもひさだめけは。甚やましといへるに。さしもの忠宣も膽をどろろたりとあん。如何なる人の跡をくせるにやといふゆりしてこそ。其國所も聞しうと花頼幼ておやえすといへり。

崎人傳卷之三

隱士長流

此傳も安藤爲章の
年山打開のまゝをうつせり

若き時河下河邊彦六具平と名乗る。和州宇田の産父の小崎氏。いふあるゆるより母れ氏を稱へ侍ける。もとより妻子なくして。中年より川のくに難波のふらに隱居をしめ、靜に書をよむ。中にも哥學を好む。万葉集古今集伊勢物語などの暗記しり。其學門おのりうら傳聞をもて。大坂の富人多く弟子となのり。生得世に闇ぬ人がらあて。心のねもひりぬ折の富家のやひきよも應ぜず。訪來する人にもまのをもいはず。枕を高くしてあるひの眠り。或の書をよみて。心おまひせて過しける。西山公水戸黃門
光國公其才を聞こしめし召けれども。終にまたがのざりしうば紙筆を賜りて。万葉の注を請ふまふにも。まゝるお趣る時一二首づ、注して。又解がちよ侍りしや。果さずして貞亨三年丙寅六月三日に身よりぬ。春秋六十三歳。圓珠庵の契沖師と交り深のりけまひ。遺稿をわつめて晩翠集となづけたり。其集中はうら。

述懐れまゝるを

桂川ま、にうけし一枝も折なきぬ水に身の沈むつ、

おぼかつく仰げばいと、高き木、こどくたき大和言のは

よみとよむわうことばはあし腹のうらみやせまし住吉の神

とかれうらをまらぬ板井の蛙ぶよ聲の詞の敷にやいあらぬ
和哥の浦にいふらぬ迄も紀の國や心まぐさけやまことこのり

末の集の哥どもの昔のうらに多くおどりゆくと見ゆるを

難波津の流きに生るあしづ、の末の世見つてうすきことやは

契沖う山まかくれてよめる俳諧の哥に「世中にうめる心の山柿のまつゆに出てく

ぶけぬる哉。とよめるやまゝて

世をうみのへよりみてごまけもしき其山柿ふそのなせる人

その外多哥もあれども零し畢

爲章按するに。長流がうら大うら是らの風体なり。長流の儒學まさり。契沖の俳學に深く。在家出家のまよひうはりこれぞ。薄操ども昔は隠逸にもれとらぬ人品なりけりし。長流の述作。累壘漢水續。續哥林良材。枕詞燭明抄。万葉名寄等也。

葛溪云。予聞斗るうちよしとおぼゆるい。

「下野やあすのに茂る篠をとりてあづまそのこの矢にぞはぐなる」「ゆひあわが着くも歸らぬ唐錦立田や何のふるまこの山」此立田のうたを。右の桂川のうたにありせて思へり。はじめの出身の望めしものども。其才とある人あけきた。おもひさて、隱士に終けるなるべし。うた万葉の註



語は。代匠記にまゝ、見ゆ。又季吟拾穂抄に或説とて出されし。此人の説とればし。其流義の説に
あつめは不用とれと書きしに。うへりて道理にあたれるが多し。哥の跡の契沖師と此人。同じ筋
也。契沖十七歳の時のうたを見て才を感じ。方外の友とあるよし。契沖の徒義剛もうけり。

僧 契沖 附門人 今井似隠 海北若沖
野田右肅

僧契沖。諱空心。俗姓の下川氏。其先の近江蒲生郡馬淵村に住す。祖父左衛門元宜。加藤肥后侯に
仕ふ。父善兵衛元全。尾崎青山侯に仕ふ。剛寛永十七年庚辰。尾崎に生る。歳甫五歳。母間氏へつり
う百人一首を授るに。不日によく記得と。父も實語教を授るに。又同じ。父母おどろき怪むぬ。
七歳疫を患へ。巫醫あるしあらず。師ひろりに天満大神の號百遍を書こと三七日。一夜靈神を夢
む。自管神は靈と稱して曰。汝う至誠を感じて。病を除き命を延ふ。他日僧となりて自勵よと。覺
てのち病愈ぬ。さて夢中れまを説く出家せんことを父母にこへども不聽ありしかば。自腥輩
を斷て。常に佛號を稱ふ。父母其志を奪ふことを得ず。遂に是を許し。その近き今里は妙法寺手定
密師の弟子とす。時年十一歳。手定はしめ般若心經を授く。よむこと四五遍にして直つに唱へ。
うの書と。十三歳髪を薙て高野山に登る。東寶院快賢に學ふ。賢又法器として是を導き法を傳ふ。
やうく時の爲に稱せらる。寛文二年檀越の請により。川のくに生玉曼茶羅院に住る。既にして
其城市お隣とのまひすしとひ。壁上に哥を題し。道者一笠一鉢意にまうせて。大和の諸

義剛遺事に有。
幻身といひて

名區に遊ふ。長谷お至ての喰と絶。念誦一七日。室生にしての煉行三七日に及ふ。
この形體と捨ん。又高野山おけり。菩提戒を圓通寺快圓にうけ。持律益清苦す。泉州久井の里
ま往て山水れ奇を愛し。住ること年あま。三藏を盡し。自他宗の章疏。及儒典。詩文集よまきても
涉獵せすといふとなし。従ひまふもの多し。又池田川の側にゐて。徧く皇朝の實錄古記を讀。專
國歌を好きて。廣く其事を探る。延寶五年河内鬼住山延命寺覺彦に就く。安流灌頂をうけ。儀軌二
百余卷を手引から書て。生駒寶山寺に納む。同八年本師手定寂せるまよ。遺命して妙法寺ま住
持せしむ。師もまよ好む所にあらざれども。其母氏老て此里にあるをもて。やむことを得ずし
て往き。別に一室を寺れ傍にかまへて孝養す水戸西山義公。長流の果まよし万葉の注を此阿闍
梨にお任せ給ふとて召しかども。これも亦固く辭して參ら。然ととも公の古義を好まよふまよ
るこひ。遂に万葉代近記廿卷惣釋二卷を作りまよ。開卷第一首雄略帝大御哥は。籠の字の訓
をまよす。まよよみまよれるを加太麻と訓し。神代紀の無目堅間を證とす。西山公まよの卓見をよ
るこひ。且其おぼす所に合ことと奇とし給ひ。白金千兩緋三十疋を賜ひまよ具をまよ師即寺院の修
造に充。かひ貧乏のまよを賤し。一も首へす。又古今餘材抄を著す。明石れうまよの朝霧のうまよ。
古注眺望とく。或の行を送るとせるものを非とし。この家山日に遠く。前程限なき波の上。朝霧
ある間ふまよよ旅懷を述ふ。故に紀氏を萬葉部に納ると説。義公まよれを讀まよひ。掌を抵く千

古の發明とし。書をたゞひて一ふに來まみえん事をまひ給しう。も。林壑の性。公侯に請するに
 慣ずとて遂に就也。母氏歿するに至て院を退院。難波の東高津に居を下す。高津といへども甚僻
 號ていずも昌かして多とこるなり予こと。圓珠庵といふ。俗客を謝し。清修自適と。義公時に物を
 たまはす。起居をよひせ給ふこと絶す。此公薨し給ひて師もまゝ續て寂す。義公にあらず師の
 高きをまふし。師もあらずの義公は選よあふじ。其終も亦相須がことさもの。まことに千載の
 奇遇といふへしと義剛は書と。水府は儒士安藤爲章。命によりてまばく往來し。説をうけ事を
 とふ。師元録十四年正月微恙かか、り二十四日にいたとて。病あつたむるも。其徒小永訣を告
 。且疑ふところを正さしむ。涌泉問曰。師今阿字本不生の域に住せるやいあや。答曰然と。およ
 と人平等にして差別あるへし。泉曰。平等差別異なることある歟。曰心平等といへども。事差別
 ある。差別の中心平等に當る。老僧がことこれを記せと。此一條義剛遺事にの端中の自 二十五
 日定師脚踏を結びて逝と。明歳六十二。庵後に葬る。師爲人寛厚愛人。恭謙能下る。然も密教の
 上は邪義を説者あれり。是を闢く避る所あり。其論辨當時有識といへども當がさし且記憶比類な
 ることあり。圓珠庵にして万葉を説よ。古今の事實援引せる所の哥詠等。始より思慮に亘らすして
 綿々口を絶す。連珠の函を出るが如し。或人ありて師の古哥を記得をとふに。三千首以上自
 ると答ふ。所著厚顔抄三卷。古事記日本記の勢語臆斷四卷。百人一首改觀抄三卷。源注拾遺八
 詠哥童謡を注す



卷。勝地吐懷篇貳卷、予校合且補之項に記きて、河社二卷、類字名所集。七卷、名所補異抄八卷、和字正濫五卷、代匠記二十卷、總釋一卷。古今餘材抄十卷。以上爲章著す行實お出す所のくのことし。又正濫に難に答る書八卷、義剛遺事にいふ。此外予著る所。雜紀雜々記。新勅撰は評。二十一代集。古今六帖は校合をはめ。物語の類ひに此師の書入あるもの多し。また其宗門の疏鈔若干卷。其徒につたふるとぞ

右傳。安藤年山爲章著所の行實也。法系南山補陀洛院僧義剛錄遺事を錯綜折中して。國學に譯えて記す。圓珠庵墓前に建る五井氏の碑文。其法に優るとい。此尙事狀に譲り。唯國學お功あるよし斗を録せる。道同しからざる故か。世人もまた此長す所を稱へて。其法徳をとらざるのまからず。あるひ僧あることをとらざるあり。予師はふめふかくいたひかふるに。繁きを厭ふ始末をわぐ。安藤はか書る行實の終に。師哥學卓絶といへども。是は其餘事のみ。哥學をもて師を論する。師を著るまはふらざるは入るころ。公論なるへけれ。

高濂又按。此師の哥學。顯昭法極は説梯として。古書を見明らかものとおぼし。凡近世其人。唯中川の流は説にあらざる。道の言にあらざる。是よりて過を過て傳ふるか道ありと云説さへたれど。此師此關を透過す。一事一語微を以てしににとる。其中或

は過不及あしくもあふざらめど。一たび此道ひらけてこそ。是に次いでいふ人もいできけれ。然れは千歳の一人といはんも過言にあらじ。詠哥の家集漫吟近く刻に刊くよしされり。よ其境界れう少老。安藤氏の出せるをわぐ。

山家のこゝろを

忘れても都のうらなながめせば風吹とちよ峯れしら雲

山里は折焼まーバめつらしく花よりはかの香お匂ひつ、

やま川の龜の心をこゝろにて尾を引ことをなふひてぞはむ

述懐のこゝろを

我まその芦の下をれ一節のありとも誰かありと見るへさ

山にてもあや思はれぬ此も多心の猿けくもあし

世中のおも荷のはやく捨ちがらかるは市路ようるまどもなし

二十九にありけるを

我身はまみそちもちかのしやるまに烟斗のふつことろなき

鐘絶けるとき

やくとみておまひの門の出しかと煙絶てり住かぬまし「あ」と長流けうしよりまやう

かにおはゆ。又その師の國文高古にして趣味あり。尤學へき跡なり

○門人今井似蘭。見牛と號は。京師の人。隱居して。六波羅の東阿佛屋舖といへる小住り。此家今尙殘まり。大庭に庭れもしろしと云ん見牛作ま。所著万葉緯あり。又寫本數車を上加茂神庫に納む。不朽をはりる也。(契師著述もみなありとそ)

○同く海北若沖。峇柏と號と浪花の人。所著和訓類林あり。甚要ある書あり

○同く野田忠肅。攝津今津人。富豪あれども古雅をこのと。はしめ長流に従ひ。後契沖に學ふ。其居武庫山を望めは。自六甲樓と號は。後住吉にすめる時。万葉類句數卷を著し。何某の卿の傳表をもて

靈元法皇に奉りうたをも際りとうや

又柏傳と

いへるを著せしを。近年その氏流の人梓にのせりとそ。此外門人なやあるへけれど志らそ。江友俊といへるも契師に學へるよし。圓珠庵後主源光と合して碑を建。文を五井蘭洲に請るむ。即碑文も見也。

○京師に樋口主水といへる。似閑門人あるよま。此家に代匠記の善本。又講説を書入し万葉集と藏せるよし。二十年前自火に焼亡と。惜むへ。師行の改觀抄に此樋口氏。

屈景山子にはりて校合せる所あり。寫本に合せては其功見ゆ。

荷田 春滿

附姪在滿

門人加茂真淵

春滿。阿豆方應姓の荷田宿禰に去て。羽倉を氏とと。通名齋宮。路南稻荷の祠宮あれども家を嗣す弟を主とし。自の國學は復古を任とは。神代卷万葉集において家學を成せり。契沖と時を同一にして是の後輩歟。彼説はざるやあらすや。契沖の佛者あるうへよ。其人綿密に過て泥滯せるもればや。見ゆるを。此翁の一層登りて説をうつ。ねよろ元錄年間の諸道復古は迷にあたりたる時おして。國學を唱ふるの契沖と此翁なり。よみうの主とする所よあらされども又凡ならは。今おぼへり

けふとての淵のあさか瀉沙のそちひと世の姿ある

などいどめてしや。又中世已後淫靡風をあせるをいさとやりて。生涯戀哥を詠せず。その家集を見るも。常座よよせごひの題と探りて。其物を雜おきてよめり。たごへん虎よよするこひを雜によめり

仇むくうちもひ巴提使にへての虎もつるあさもほとこころこれ

日本紀欽明卷の故事によりて讀きしも學者のまわさなり。巴提使百濟國に使して。虎のためよ小めていさり。その虎を殺せる故事也。巴提使。々字印本よ便と書。訓もはそひとゆけしと。若沖和訓類林にはては讀へし。使も使の字あらんと考へられしを。いさ此うと合て。學者のまると

ころ同し。戀歌をよまればる方正尤賞すへり。戀の題詠れことにかきてり。予もよま私も著し論
集を授考し。序を。國學の學校を京師に開んとて。官の許を受。既お地を東山に卜するに及ひしが。
書しにもいへど。今の本願寺。病に罹りて年を経。不成して終れり。をしひへし。著述大やう散失す。自燒失しども
墓地の邊やう。伊勢物語童子問。万葉の解きどの彼家に傳れり。神代卷は家秘にして。門生にあらされは
つこへそとせん

○在滿滿字是もよ。麻呂と稱せ。通名東之進春滿の姪也。同じく國學を唱ふ。大學會具釋。同便家等を
著す。今代故實の行る、によりて其考索の明あるもあはれぬると。又國歌八論あり。
後世の弊をさめて見る所なきにあらざり。大過せり。皆梨棗を登るとに憚有て寫本也又
百人一首古説とて此人と眞淵と共に著せるもの有。又世に公ならず。近比印行せる眞淵は
うひまなひ。是にもどるせるなり。關東にして國學より。某の君に仕へし。かみ君お
母を所ありて。其説に従しめんと。在滿きその。貴賤品々となりといへども。各志すあり
。已か見る所をそて、人に従ふのつらみ話ありと。終お祿を辭して去。家居教授して終る。其子
御風通名東藏。家學を嗣て江府あり。女弟民子もよま古きを好む。哥をもよみて同じく
教授す。俱に近年物故せり。

○眞淵の姓加茂縣主。岡部衛士と名のる。はしめり三枝といへり。遠州濱松の人。春滿に従
ひ家僕れことくして京師に學ぶこと年あり。學成て江府に下り。大に古學を唱ふ。春滿の
万葉を解し功ありといへども。哥のその風をよます。もとより詠哥のまどせし。在滿の
万葉の比は華いよ開けし。故に麻ふまそらん其草ふけのとき。語を成さざるものあ
り。歌の盛の新古今集の時ありといへり。國哥八論を委し。眞淵に及ひて。はじめて万葉の
要をとりて記す。眞淵に及ひて。一家を成し世は耳目をおどろけし。従ひ學
風をよみうつし。文章も又古言をもてつゞき。一家を成し世は耳目をおどろけし。従ひ學
ふもの多し。その説に契沖のにいせ新聖考つぎ。いまだよく植ゆくさぬ程に過にしこそをけ
き。大人うしの春滿と哥のこり。よりぬる千々は書どもをあらそさかへせしいさきのかひさ
いなまき。まだ刈おさめ果ざるに病にふしつ。あどいひてたのれ是がなりはひを遂るよし
也。實に古を發揮して後生をいさかふ功少うらぎ。其證をいひ。ある時南郭の服部氏を
とひて物がらふつらて。唐詩の風韻たどるへて六朝に及けぬり。汾上せうじやう鶯秋の詩にてま
りぬといふ。南郭いかにと問に。さればよ。北風吹きたかぜ自雲よもぎ。万里度ばんりど河汾かへんといへる起承の句
まことに羈旅の秋情いはんりさなきに。心緒逢こころぐ搖落ゆらく。秋聲不可聞の轉合の句。上れ意
を注せしに。秋聲の落るるをねけり。吾邦の哥も後世のさまおとりゆくは唯かくれまどし
といへれり。南郭も大に感伏せしとなり。私按。今のよれう。巧みあるれり。若く。輕けれ
り。早衰あり。そけ早衰あるは。ヤ、キすれは。ど

つらしな。さぐひなや。之をらすよ。悲しさ。ちきしさ。又山邊は赤人らしの歌。田子れうら
 ちといひはて、含畜の氣象なし。この論よくあさきり。百人一首に入られ
 もうち出くみれば眞白にぞ不二の高みに雪のふりけると云を注して。しん万葉のいにし
 へにあらす。改。田兒のうらよと磯傳。さつこの山陰をうち出てみれり。不盡の高は雪
 眞白に。天外お秀るを。こはいうてと見て。感じるさまあり。何ともいはで有れま、よ
 述るに。其時その地其情おのつから侍ること。古の妙あるもれあり。赤人の短歌の神さ
 るまど此一首にてもえらると解く。細注よ。悠然祝南山といふも相似たりといふ人侍を
 とかれり。それ所にてのこと。是はふと山陰より立出て見出したるなきり。其義異也。ま
 悠然としてとい。まつからのま、るを注せるに似れり。齋作するもれ也。此うたの唯有
 のま、なるが似るものなきなりなど論する所。ふかくうの旨を得たりといふべし。されど
 も何よつけても。大成を任とせるもえに。疑を闕す。強解もよま、見ゆるにや。又からく
 にのとを仇のごといひて。孔子をさへ議するもあり。是は近世の儒士。みつから夷と稱し。
 此國の非をかぞへてかしよにうまれぬをうらむるといふをいはれるあるへし。是もど
 よりその罪いふへらす。
 皇神の御恵にもれる國の益なり。されどもまた眞淵も甚しといふへし。ことへの病を藥
 せんよ。是ふなきものかしてに求めんに何のいむことかあらん。唯神のたひらぐをせやす

へきのみ。この心狭きの故歟。家學を興そよもどかせる歟。生涯國學を任として江戸に終
 る。歳八十有余とる。よみうゝ門人うまさか記しければ中。すこし書いす。

春の日山を望てふ題を

見わたさせはあめのうぐ山うみひ山角へてるはるうすまかも

すみれくさを

故郷の野邊見にくれり昔わが妹とすみれの花咲にけり

其住居を縣居と名付け、る所あり。長月十三夜によめる

秋れよのはがくくと天原てる月うけふりあさわたる

あがたの芽生の露原かさわけて月見に来つる都人かも

鳩鳥のかつしかわせのにひしぼり波つ、あかせ清き月よを

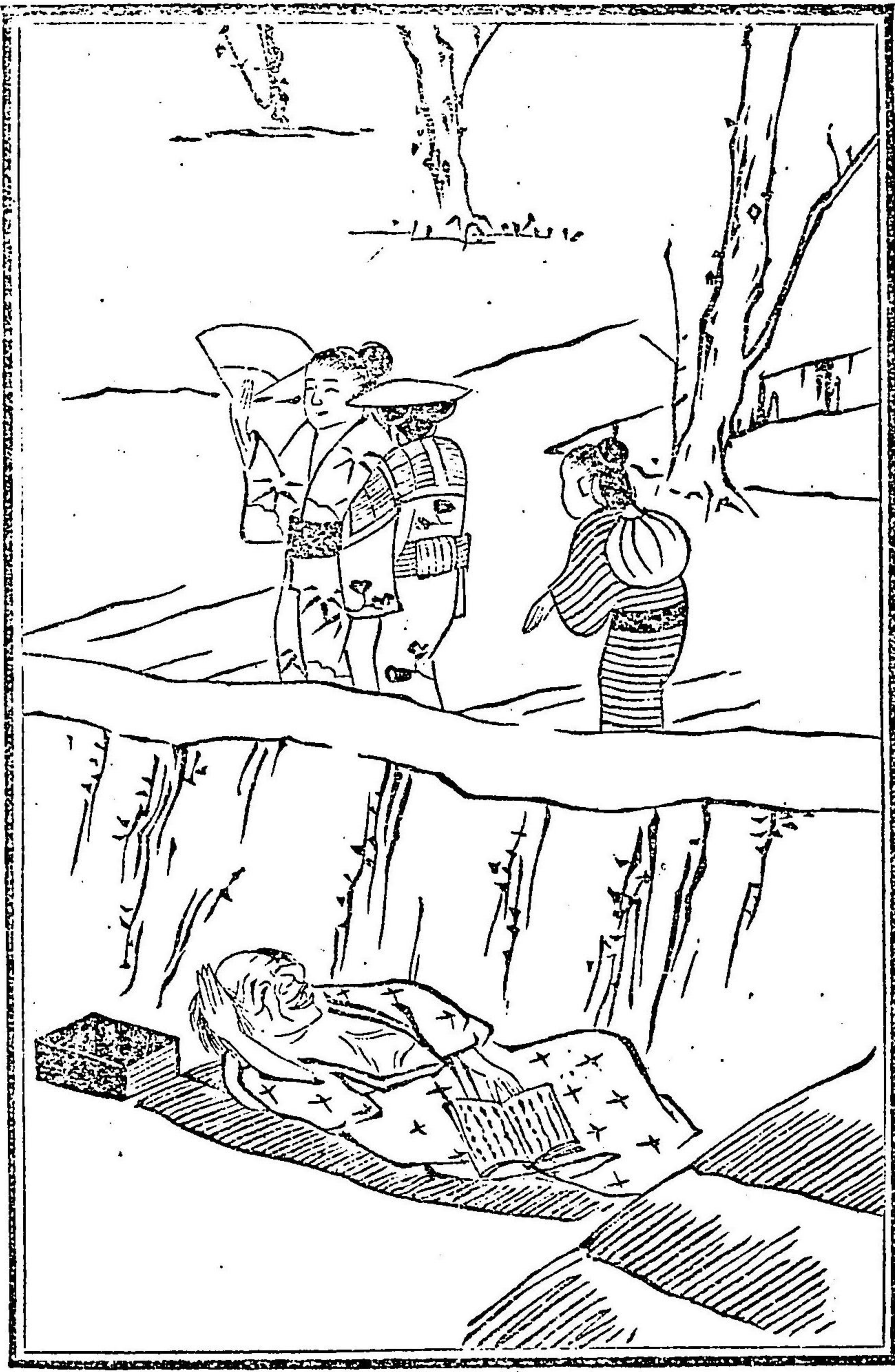
まはすのはしめつか。こひあこの傳通院の室にまうでるに。明なるとは増上寺

へうけりて。大僧正とさこへんまうけ。うろくよありとまて。

朝日かけにはへる山に紫の雲をたつかる春近まかも

遠江のさやの中山のにしに續て。今の阿波か嶽とていと高き山あり。式あわのばの神

社あるこれなり。ま、けうたを繪にかきするに。その山は下に旅人ある所に書つけ侍



位田儀兵衛

淡海神崎郡位田邑に伊半天と訓す。もと儀兵衛といふもの有。産る所のしらす。二十有余にしてこゝより來り。質雇を業とせ。モしやとう人あき時の。他村に行て食を乞ふ。こゝ所一日の餘を與ふれ。辭てうけず。其邑人他は往とを止めて。邑中に喰へといひ。否。邑中の人が行歩かゝるぬ時たのむべければ。今の煩さを答ふ。身には何をもせよといひ。居所の方丈にもたふせ。いとよめる時の豆を取てのぞふ。何のためといふまゝをえらす。又つねに口のうちにて何ふやくことあり。是はた人れ耳に聞とりがたし。或人いふ。明朝に大豆を數珠とし念佛せし人あり。これもそのく 歟と。路の傍に建し札れ類。書たるものをよむことをこのむ。邑中又吉凶のことあきむ。かたぎぬを引かけ往て慶吊と。且辨われは必送る。まかも一言を出さず。人キし新しき衣服をあたふれば。舊きをぬき捨て。かつてたくりふることをせず。又人れ家にやといれし時。夜に及ひて務あきば夜の食を喰ふ。まのらさればくらひす。萬正直此類あれば。邑人甚愛しけるも多。莊官ふるさ家と田十畝を與へしに。苗代の時より刈をさむる迄。其田に庵を作て是を守り晝をうつ。稻をまくりおまき箸といふもけを用也。是は昔のなりしよて。今のまなきおまきといへる具をもて便利に従ふ。おまきをれお衆に異なれり。いうにととふに。わきいなまきか。人の物を貸りて何のへ損じておし。とまきよ。因にいふ。むかしのみなまきか。しを用ひ。所作なき老癖など。是をまきにやといふ。口を糊せし。いままきといへるもけ出きて便

利につけた。かく悲しきやもめれうれひとありぬるゆゑ。いふまきとあだなしと。ど
けだをじともいへるをこそ。世れまを掬經によき。皆何ひ元あるまどかくのごとし
ゑとてあきだも。兒童奇どあしむわさそれい必叱す。月代を刺す。生るまの髪をわらにて束
ゆたり。終るとし七十に餘る。まこと小希代のものありしと。その近邑の人語をり。

手車翁

享保のはじめ京小手車といふものをうる翁あり。糸もてまはして是は誰かのじやといへは。これ
はあきかのしやと答て童へ買てもとあろうふ。まき此人いでくれむ。童つどひて喜ふことありし
。後いまた難波に往て。賣まを京はととくして。終にとある家の軒の下小端座して死む。傍に小き
卒都婆を建て

小車のめくまぐ。今こゝに

たてゑるうとはこれいあきかのしや

と書つけふり。いうなる人の世を翫ひくか、まけんどのの時をしる人かたりぬ



山科れかゝり小田業をそるおやまありしに。道行人の金を入たる袋をおとし置けるを。其子高き丘にのけあがり。呼て還さんぞ。何ぞとどとふに。まかくと等ふ。ねとまも拾ふも世はあらひふるふ。よしなきとふつさりりて。わが田わさをあ捨るといひけるどあん。此入の荷費あしひかにや丈人の類なるへし

右は雨森芳洲先生のいさぐさにうけるま、也。げにもこれの杖を植て芸ひとに似たり。又管幼安が。金を見ること瓦礫よひとま。鋤を揮ひしおもけをれや也。奇といふへ。然きともおと人の愛をはりてよびてうへさんとするの惻隱そくいんの誠ある。吾はまきに與せんもどより物を拾ひてかへそのさるべき。理ことわりなから。私心におやはきて是を行ふ人稀かれはころ。蒙求にも。黄向訪主と標し。黄向行に於道拾得金囊一乃訪主還之と注とるれいなや名もさたうなるやどの人にや。予う見聞ところ三人。皆貧賤の人おして。此とをなす。一人の化子の老婆。三條室町街にて。絹被は帛ふくさ又包るるを拾ひて。其前ある商家によまて。尋ぬる人あるべければうへし給はまといふ。商家事繁まよしをいひてうけがらりしかば。情あれ人や。おとせる人。けうれへをおもひまへと誠しに恥てあづり。まも其石をもどひしうべ。半谷の龜といへり。さてまべしありて。ものをたづぬるまもあるも

けを見つけて。どひ正しく與へしに。大によろこびて。これが報ひよ。よね世にあやもち來り。彼婆子來ることあらば。おくり給れと托す。果して又來て。いうにおどしたる人のまきふりやととふ。まのくのよしを告て。彼むくひの物をあたへしかば。まふびて。是をうくるやとあらひ。彼ものと賣て錢と得侍りよしといひ捨て歸るやと。又一人の近江八幡の近邑北庄といふ所の老農。八幡の人の金三十片を拾ひくうへせり。これも露斗のむくひをうけず其老人おきな緋絆ひきん一つ着て。孫を負てありしを指さして。此まとをしる人うまぬ。又一人の湖中長命寺の濱にて。旅舎のあるじ。巡禮の一と連きり路費の金數十片を。ひとつにしてもてる男。袋に入なのを遺亡せるを見つ。観音寺へ至る道をかうがへ。二三里斗追かけてかへしけきり。其施人の越前敦賀の人にて。此恩に感し。故郷にかへまて後。交易のまどを紹介して。湖中の人に貨殖くわしやくせしめ。今孫の代に及びてもうはらす敦賀へ往來し。その家乏しからずと。長命寺の僧うらまきき。貧人にしてのまどに感するに堪たへなり。又三熊生うらら。其祖父京師千本通にて。金百片を拾ひ。そのわさりの茶店にやどりしてたつね來る人をまのあくる夕のまに至り。ねとせる人にあひてうへしけき。其金をぬらちて與んといふをうけき。まひてとくひしうけ。其茶店にやどりまゆとのあまひを彼主より出させしと也。又くましくしけきとついでにねまひ出せしやまをまらさん。伊藤東

涯先生。二條街にて藥の袋はちちるを。つきし書生お拾ひしむ。内を見れば方金數枚あり。先生眉をまのめて。よりなきもれ多拾ひしまよ。老るせる名もなげ多げ。かへるべきとしふしどわびるが。取てのへふれが。そのま、神ごあに置て。其年の暮に伊勢の御師に來れるに附せられしと。其拾ひ書生は話せし。こまのへまを主あけまげ。宗座へ納るこ、るなるべし。よきはうらひにこそ。

金 蘭 齋

金蘭齋は。眞の老莊者おて。心も境界も是にあへり。尤家まどしく。いふれの書にても講をこふ人あれい。吾其書なしといふもゑに。購求て贈るよ。開講の日に及び書生到れば。其書の既に藥に代れりといふ。止事を得ず。書生は本を與へて講せしむ。又門人常に衣服をと、けへおくるに。やどかく賣ゆゑに。あるたび背に圓形を白く大にして。中よ金蘭齋と書るをおくるお。さあうら若てありきものどれもい。又あるとき客至りしに。猶寐より。おどろきて袂内より出るを見せり。袴を着きから臥たり。又或時の講半代神樂といふもの。笛を吹鼓を鳴して街を過る聲あり。書生よも謝せと。ちよ走と出て。小兒どもも彼者のまにけりてありさける。あるい道路にて。女の帯れ結ひを指さし微笑して。造物者の無盡藏といひしもをかしありしと。此人著せる老子國字解。近き比刻にけり。假名をもて書しうと。一家の見識あり。他の假諺抄に類にあ



260868

小西來山

來山の小西氏。十萬堂といふ。俳諧師にて。浪華の南今宮村に幽栖す。爲人曠達不拘。ひとへ酒を好む。ある夜酔てあやしきさまにて道を行けるを。邏卒ろっすうとがめて捕とらへ獄ごめつけられども。自ら名所をいひ。二三日を経て歸らざり。門人等こゝろしまへゆきとめて。官に訴しにより。故なく出されり。さて人々いふに苦しかりけんなどとふらへり。いさ自炊の煩わづらひなくつてのどろありしといへり。又あるとしの大つもおりに。門人よりあそび雜煮の具を調して贈りければ。此比酒をのみ吞て食に乏し。是よきものありとて。やがて煮て喰て。「我春は膏あぶらよまふてのけにけり。口くち乾かわり。妻も。なうりし旨の。女人形の記といふ文章にて考らる。其中「湯を呑ぬ心うけれど。さかしげにもの喰ぬよしといひ。まゝ身はつこび土工どや。あらうつ。なのいませ物語やと筆をとめて。「折ことも高ねのはあやまら斗とといへるをもとり。そとて文章の上手にて。數篇書あつめざるを。昔ある人より得ざるが。かどなく貸う。あひて惜くおやゆ。發句はつくをもの人口に餘炙あとるが多き中。筆の繪えを秃筆たうひつしてうけるを見しと人ほられたる。その物を育んとて其物を損ふと詞書して竹の子と竹おせんとて竹の垣かきといへるなど。行狀にくらべたれも。老莊者にして。俳諧に息とる人はいあらざりけらし。さればこそ世辭せし世せ。「來山のちかれ

答て死ぬる也それでうちとも何ものまなしといへりとあん。

加嶋宗叔

加嶋矩直。通名莊行衛門。薙髮はげして。宗叔といへり。美濃岐阜の人にて京に家を學を好み。豪富なりし。後の甚貧し。されども憂うれせそ。酒を好みて狂態人ほ笑資わらひとあるも多し。事に感あたなり頻しばしばに涕泣なみだし。激論げつろんに及びての席をうち高聲四隣をれどろろと。ある朋友の所にて如此なりと。ば去て後主人獨言して。あ。さちがひ哉といひを侍婢しやくひ聞て。されども多言ある斗とにて。嗔ちまはまど給たまはでよしといひし。ままどの狂人とかもひし也。書を講かする時。吾意に慍いんふ説せわれ。朱子大明神。徂徠大菩薩そらいなどいふ惑まどにいふ。誰たれめが此惡説あくせつを罵ののる。ある時人の送おくる蠟燭ろうそくありし。講説かうせつ夜に及びしかば。手にやりせて燒盡やし。挾くわき室畫むらのことくありしことも有ある。予り家舊交きうかうあり。おなじく三條高倉街たかくらがに住すまうば。來りて酒飲れ。いいで戯あそぶ。乃公のうこうのもまへる印籠いんろうもちひさへ。吾と。もに購かつる盃さか見みう時袖ときそでの毛けれよと勸すすむ。予まど六七才斗さいとにて。頻しばしばにひかむ。父叱ちりまどに泣出なみだり。宗叔よま。乃公のうこうのあたへ給たまその吾參まらせんと約やくえて。別の印籠いんろうをあざむかす。の明の朝あしたとく持もつて與まへられし。是こゝにまだ貧ひに至いたらぬ先まにて。其餘そのあの態まも唯ただかくのことくありまど。此人こゝふしてことに稱なをへま。我母わがははに孝こありて其生涯そのせいがの貧ひを苦くるませしとせられし。我母わがははもどより富とみの中に育まし人ひとなれば。茶香風流ちかふうりゅうの事ことを翫あそびて終はるに。一

言制止せざりし有りきこと、いふへく。又其文學の師岡白駒。物をいひ出で、他人の諫に従はず。甚偏屈ありしに宗叔一言を出せの必折なり。故に家人もてあやしむる時。必よびよきと。同門の那波魯堂話せよきと。著述論語の解寫本にてあり。古注尙書禮記。京にて印行の本は此翁れ句讀あり。

文展 狂女

天正のころ年四十にうまひける女物狂しく。一卷の文を篋に入首にりけて。花のころは東山の木のげ。やまの月の夜に五條ははくのうへなどおのりて。彼文を出し高き前によみ。また沈てよきなどして。聲をあげて泣悲しき。何やらん獨言いひて後取納めて去。これハ織田信長けたとゞのれもひもほ。小野のお通にのりへくちよとゞする女にて。をさきころより侍らひのば。女の態のさく也。文の道も心をよせて。情あるものありに。ある時都は商人喜藤左衛門といふものに忍ひてあひるめこころをよりよきと三とせ斗。おもひあられる秋の暮に。

うらやま一人めなき野は甚きくも心けま、あふぬ

身はとよみくうちふーがちあるをまつらりもとより情ある人あれば。色にうつる心の亂きをひそかふとひき、て。やがて喜藤をめーよせ。千代を得させければ。よろこひ京へ伴ひ五條れやとりに住ける。さていりべーたりけん。家装へ世に住住るうらに。うらにうらむるふしぐもい

てきて。おれり世らにあふんとぞ。千代まほよーを岐阜へ告て歎きける文けりーに。

絶はつるもれどり見つ、さ、うにれいともれめる

ま、ろばろさよ。といへる惟喬れまほれ御うを書添てやり斗る。お通あはきにれやへて。うれ男へほふみに。

久ーくよそがなくおとづれきうまほーを折かろ。千代のたよりあらよーれまど、も文ーて聞へ侍らふに。まのには糸へはつるもれどり見れ、とふるまどきと。くれく歎きまーさむらふま、に。まれかへりまどに。

どにかくに折ふしおとほごがひめを恨むる中うちさり也けるぞ。まうー遣ー、となきだに女の心のさくて。何くまれまどとせが胸あもらさむらふり。とまよにさめふまがちよて侍らんつきまも。もどほ清水とひきがたさほ心をとれしもたほみ入は。所がらけ御住居。夕の月れ垣もまばらあ。人めも何らくおらーめーさむらひ。ひがーやまゆうくとん房へ御たよりひひ。よろーくはらひ申さるべくは法師の取つぎあらくーくはへとも底意あくて。山れ井を結びひけてもあしうらすはからひまひる。折から所くのまわがしき。うへもほけしきあやかあるら。けさくの人も心あふすしゆえ。うれしき便まてああらやしきせけあうひかしく。



此文よごとこもなぐさみてむれそ。五とせ何とへけるが男身よかり。岐阜もとりくになりて
 世のさよかりしかは。此女氣をマろになりて。うかれありま斗る。かのよとけるは此お通の交
 じろ。狂女もさすかよ哀なり。尤お通の心はへ文雅の其代も似ざるがめでこく覺へて。近世の
 例よりや、ふるびたれどこ、に録す。

長崎 餓人

長崎の人某氏 今遣 忘と 吉左衛門といへる。食にして學を好み。生平酒を嗜むこと人に過たれり
 狸々翁と稱す。ひと、せ此地米穀ともしりし時。數日不食。知音の人々食を贈れどもあへてう
 けず。善此忍をうつきて報もへき餘命なしといひて。つひに近思録を看ながら餓死せりと。本地
 の儒士西川氏の記に褒賞せり。

私按禮擅弓に。餓人嗟來の食をうけげ。與ふるもの謝せりといへども。つひよ不喰して死
 せるを評して。管子曰。微與。其嗟や去べし。其謝や食べしとみえたるに似さておもへば。
 を丐をもくもるの嗟來也。然るに是を謝せば食べしといへるに。此長崎人の知音。よ
 き禮あくして贈るに似あふざるべく。もより朋友は財を通するの道あるをや。餓死に及
 ぶるは狂落の甚しきもの歟。但し次に龍裝を評せるをめりせざるべし世れ食人なり。是
 の。人の毛髮の末を吸せばやと嘆す。

相者龍袋

龍袋の赤塚氏かれども。幼より他家を繼て中村を稱す。名重治。通名孫兵衛といへども、號をもてまらる。爲人世務に疎く。家は有無を心とせず。相學を長し。門人も亦多し。相者の多く既往を知て。將來に味さふ。此人の女も門人に會して。其血色を見て曰。子明日の花見に遊んとすや。また一人はいふ。暮春は青樓に登ふんとおもへるやなど。其言もさかひそ。ある時一人を制して出入をどひひ。いかある故どもさうしに。後に或る家婦を淫せり。其まれるも龍袋に問て。もし此ことにや。然れども其時のさることかまじしに。いふやうといふ。翁云。血色既不動なり。これも諫てどひひべきなれ。事に先立ちてどひひし。諫は及ざるを決するゆゑに交を斷り。又博奕にふけりしものもかくはとくなりし。其門人話せり。凡そ人を相するに必心術を説て曰。相善也といへども志不善ければ益なし。相の不善も亦能志行をもて勝べし。又曰。相を見る人の世に多し相を行ふ人の稀也。吾の孤相あり。孤なれは必貧あり。孤に居て貧と安とべし。其家を然るへき人に譲り。一子新次郎といへるも他の嗣とす。妻はやく失ひたれの獨身にて。食あとの喰ひ。盡る時の不食。後より知巳門人等に別を告ぐ曰。我餓死の相あり。徒に生きて他の施を費べからず。是より門戸を閉出入を禁しく不食數日は後逝せり。齡五十有七也。

按。近世相をいふ人多く。俗客又多く是を喜ぶ。然るに此人相によりと心行を教ふるの奇特

也。猶蜀の嚴君平の賣卜によして人を導くが如し。自孤相に住し。つひに餓死せるは甚しけれど。人に奇て喰ふの餓の相よして。漢鄧通餓死の相あまて。終に長公は衣食を假り。一錢も存有と名事を得ず。奇死人家と班史に見へるおひとしく。うけての生るも死るおひとま。さきの中行にあらざれども。死生は間にわづらはざるの奇人といふべし。

森・金・吾

森金其某の。阿波國小鳴戸の里人なり。弱冠より隱遁志ふか、りかども、京師は官家お仕官せるまど年あま。終に四十近き比致仕。故郷に歸り。只藤を容る斗の庵を結ひ。一ノ瓶をもくへず。蕎麥の粉をもて朝夕の飢を凌ぐ。米を炊がむつかしけれいと也。さやうく徳嶋の城下に至れば。知らぬ人どもおわやひもくあして。このめる酒をそひ。老ても健ある人おて。七十にあまる年金峯山詣しかは。かゝる年の人は登山むかししや例あし。山坊の記録もめど、めしあんの生涯心ゆく所に遊び。身の貧を去らず。八十歳にして。安永九年子歳終る。其病中の吟。

さのふよいかいるとあしに身にそひ荻に音あふ狀の夕風

九百 さしるる節のあけれど。折からあはれにまこも



太田見良 狸々庵 附僧覺芝佃房

太田見良字資齋。伊豫大洲加藤侯れ士也。學をこれと醫と學て京師に遊ふ。初め富商某か僕を。療
 する日。衆醫並ひ座を。適主人其席を過るに衆醫皆伏す。主人敢て答禮をなさず。見良大に恥て復
 その門にいふ。後故國の侯の翁主。官家に嫁し給ふに召れて侍醫となる。養生は法をもてま
 く諫れども用らざり。故に脚疾に托し祿を辭して退く。此後永く家居し。擱を踏さる。此言を
 實にぞとあり。自ら往すとら。病客門に充て醫療をこふ。學生も亦あつて従ふ。其清白の一
 事は。藥物において極品を撰て價をどふことなく。その言にいはいはく。もし時の價をえればれのり
 から鄙客の意生し。調劑の間。其價貴きもれば減するに至る。口々淺ましきをおもふかゆるにつ
 かしめてどいすと。聖護院邑に住て。川流に室を淨除し。書畫瓶花盆裁などを翫ひ。ふれしとて一
 生を盡せり。もとより禪を信し。堯宗の諸老に交る。就中淡海の覺芝和尚といへる。殊に相得て
 よし。和尚京師あし疾甚かりし時。吾もにて介抱し。其妻女起臥を助く。和尚疾間なる時戯て
 女はどめてたさもののり又もなし釋迦や達磨をひといくと産。

和尚疾重しといへども。疾と真心と主客正しく別れて見ゆ。及ふ所にあはれと感く深と。又賣茶
 翁も知己よて。翁茶をうらば吾の藥をうらんと。既に其具を調しのごとも。禁足の志決せしかば止
 りぬ。終る年六十一歳也。

○猩々庵原松の伊賀の人よし。後京師に住り。其角門人にして俳偈を業とし、れども。文學あり。專禪に參し。又酒を嗜む。背面の達磨尊者に贊ふ「こちらむむけさけがいやあゝ寒んれ餅。又ある時布袋和尚は圖を題して「小袋は大千いれて花を、ろといへるを。右の見良覺之和尚へ語られしうは。和尚微笑して。いよぶし。我あらの。」底ぬけの帯に實あり芥子の花。とすべしと示されしを聞て。速に往て教の所を謝し。後まばく問訊は。あるとき生死の間に答て和尚。

生死事大遁をこきいそもろ人よきの夢がけふもさめひは居士かへー

夢に死し夢にうまると、あさ湯坊さめて苦をする釋迦よりいよし吉備津のかへおもむくとて和尚に留別そ。

行水をのなぐいとこれ馬うつら某の年「氣がむけと杖にのみあり庵のいと。歳且せし正月頃死せり

右訓傳の間に混し出せる覺之和尚。諱廣本。京師の人にして。淡海馬淵庄巖藏山福壽禪寺は一代也。巖藏山の子か曾祖父吸江軒是調族人と共に建立せる禪院あり。其ころ巖門の獅象と聞え。機發閃電のことし。嘗て本山の幹事よりしを。病をもて辭して退くとま。僧問。和尚は是金剛の性体。何の病かある。答曰。金剛に金剛の病ありと。平生機用此類也。其外一回耳目は觸ること何事によら

そよくせすといふことさし。小僧の袈裟衣まで自裁縫して着せらる。又醫藥れこをみ見良をいとひて能得意す。されは人あるは強て醫療をこふもあり。予も幼して痰を憂ふと深うりを。此和尚の醫療によりて今に及び其時のことさ苦をしらす。大に賜をうく。和尚只一事補工の輪を入る味のまりかとしと語給ひぬ。延享三寅年五月住院に遷化す。時に遺偈を書て。傳の遺五月といふ所に至り。侍者是にて止給へといへるを。和尚意は知れりと答て。直ふ十四日と書終り。ついで寐す。歿後身体柔軟ゆして生る人のことし。是に正しく予か知る所也。是は別に一傳をたゆべけきども。和尚は法徳行狀のこ、おとまるべからず。今の綴に予か幼してある所のとされは附録に属せり。

○原松門人に。原元仙房といふの。淡海八幡の人にて。多能あまとも生來赤貧也。酒を好みて意氣慷慨す。其ころ卿人大菊の額花と競ひ。一莖あるひに數十金の物を翫ふを諷して。

染の戸へつかぬるさくともひけり。まの月見よ。誰く死ぬうつふいて月見哉
季白か句意によりあから。實情を發露せるも哀あり。又春はさぬれどこもりをるてふ空書ありて子ども等よ松れ字をかけ子の日せん

あやよき句とも多かりし人也。予二十年前の舊友されの。例いでにて、に追慕は。世並とれ俳偈行脚あといふ類ひの人にあらざり。

佛行坊僧都敬已はもと日枝山無勤寺善住院の一代なれとも。院務をいとひ。また中年なりしころ院を辭して坂本に隠居し。律儀をふり。ひさす念誦の一行は歸し。そかもあれども。風月の情やます。俳偈をふし。仙房と交深し。それ句聞傳しが多ある中に「俵物に松切まつきざもあり冬籠ふゆかご固米應報れ心をとて「おどしるむくひよくけるかゞし哉」蚊ひとつに施しかぬるどが身哉。是は淨土に志を決しる身おも。磁石に我執の離きがなをまづからいよしめたる意とぞ。俳偈の都不覺と名をえるさる。よの艸花にすきて。朝日はあるのあてして遊りのたくひすら。同じ花ながら様かひりるもれ數十百種に及へれば。此境界にしての奇僻なりと人のいひけるとかや。よの奇ある語は。或としは彌生に。山僧多く伴ひて師の庵をとふに。さく盛なるを皆めでければ。此花のうつろひぬうち再ひ來給へと約せらる。さりけきバ他日又さそひあひて行たるに。ひひもす唯茶を出さる。斗にて。何のもてあしもあし。長さ日も暮の、まければ。けふの花見とて招き給ふかたに。さへにのあらじともひしに。ながひることをあめりといひしかば。師うやをしめて。さてもみかしくしき山法師のあ。だが若うりし時まではさきりしぞよ。かゝる花を見かがふ尚ま、ろば飽らで。飲食を求るやうやはある。うく足たまことをあらぬこ、ろふては。山土や大師の冥加もよもあらじともいよしめられしかば。各花の興もさめて。すおく歸りしと

あん、仙房がどひし時も似るよとにて。雅話數刻ふ及びしかば。門前よりうる所の齋麥をとり來てこ、よてたうべんや。煩らひしとればさむうしこへいきてんやとつゆなまに。まばく首を傾けて思惟し。門前へ行て參れとありし。世情に疎きことすべて此類ひなり。寶曆六年丙子の歲四月十七日。今の限りみまへしかば。とし比何かへたる下部の僧。師の肖像をもち來て。枕邊により。今やで師の御贄を乞ふと思ひしかども。阿あまのんを恐きていひ出ざりき。今の御限と見ゆれば。一言書けけ賜むやとこふ。師よしあきことをさるもの哉といひながら筆をとりて。

ゆかうくとおまへつ何も手につかまやれ西花のうてあし
とりきて。西にひうひ合掌して逝せられしとぞ。

僧 日 初

攝津國池田に寓居せる禪僧日初の。もといつこの人といふことをあらは。食あれの閑居也。食盡れば行乞す。甚貧しくして。袈裟破れ衣薄けれとも心とせず。禪餘國學を好む。復古のうらに筆を染て。日本春秋といふ書を著す。水戸の日本史に類すといへども。其所志他を善に導むのまうけにて。人々の傳は褒貶あり。されば春秋をもてなづくとなん。其書の池田の人うつしめてと聞ぬる斗にていよと見す。唯此人の志を貴かのため。さくま、にて、ふ衆。近年その里よて化せりとぞ。

僧涌蓮の伊勢の人。高田派の僧にて。江戸院家地に住職せる。高僧傳を見て頗に感發し。病不堪
 ざるよしは一封書をとめ。草衣にあらため。忍ひてひとり京へ登り。生く嶋ある人の仮初るる
 物見の亭に潜しが。後の嗟賦のこ、かしてに住り。生涯へ物もくくへず。明暮念佛するいとま
 への歌をよめりしに。哥書一冊をだみくらねば。詞を莊るよともなくねひにまかせるが
 かへりて眞卒人の及ぬ所ありき。今記得なるをいつのに擧。

ふるさとののは、のもとへ行人あるとき

忘れても忘れずするといかふるきよ子の老ぬると親のおどろく

美人の鬘髻を見る繪の賛

朝夕の鏡も今にてはとらじこれをおこせすかこまおして

もしをかしくにして數首積し哥の中に

野へそればえらぬけふりのけふも立つあすは薪やたが身あるらん

月にかりの賛

厂かりと鳴とこれとも秋のよけ月にいとまる我こ、ろくな

人のしき衾のおどくくらををわかんとめにも白きぬを頭のかたに付て。哥書付よといひ

しかば

枕かる床れうとある沙干がたま、をあしかる沼となそなよ

浮木法師か二尊院の坊をかつてすめるが。火をあやまちて焼し時。かけをいきて。

かゝるとき常のよ、ろのうごかぬを終るとだれぬめまにいせよ

ぬ及人いどてはつかにもてる物をとまていにけるとき

捨し身はやぶれ衣に麻衾たるよとまれと残し置けん

矢部の正子が宮仕へに出る時。何にやれよみて給へといひければ。

行末の身のさちあらんをりくも世の常あきを思ひ忘るな

花しらと

あすもまの朝とく起て何とめばや窓にうれしき有明の月

捨去世を猶も忍ぶの草ならをふふる軒を又やいとはん

神祇のうたどて

すてし身に何の忘れかひいなききとも心の道を神にいのらん

まきらの其道の休也。或りけしきの歌にて。籠とよめるに

うきて立雲をなふのわけとだえにて千歳を落る山の嶺つを



無題

有明の月まづかゝる庭は面おをりく落る木はのをぞさく

奥笹未央といふことを

暮ゆかは桂にくたせ月も見ん花の大井をさしのぼそふ流

猶よ歌とも多かりしを。そのとり得覺えぞ。才ある人ありしかども。人にうとまらきんちやを
 せずさそくに。いふ狂しふるやうにてありき。或人の誣して。いらぬ人お才の有ことかか。ふれを
 ふうらのもてくたしといふしとらひぬ。記憶もともゆよく。智度論をまられし時あるなり。
 長さ文段をそらふ唱へられまに。其中かきて給へといひし所半枚のまり。物語まからかきま
 を。今も隠藏せり。はまめの冷泉民部郷の君ははもとへ立りて。哥れこととひまらせしかども。是
 もよーあきすさひとて後のまらさうき。予ある明藏れことよ。いーめ發心道世一く江戸をい
 たまへるにありせて。やまをさきあわうりに立りて。哥を學ひ給ふりにけなし。其意いかにそ。
 法師わらひて。さばうりわいた。しくいなりーらまをものどかよせんやうも有へまを。若きとき
 の心す。と。ひとへに野狐の精異也。さてしも哥をこのむうらに。かしこきあわたりに参りしも
 またきつひ也。とこらへましが。理りに覺へま。さて年を経て彼郷入道し給へる後に。嵯峨へた
 つ添おらせしに。法師あらさうりしうり。そまらけ山がつひゆけて一筆を残り給り。

住かたの都のにしと聞かから露へだて、春もへにけり
返く後おもてまゐりし五首斗ありき

春かそとへだくよし身のおこたりも今更くや一君にとりて
いへる外の今とそとより。又あると死わらびをこのほもとへまゐらせける時添ふるうた。
さてまつる謎は尾山の早蕨の千世をかぞふる手に似たる哉

入道殿甚賞し給ひ。秀歌返しなしとなんぢさまひおこせまどかや。さるゝ安永三年午歳五月廿
八日に。彼君斃し給ひ。此法師も寂せり。同し年月日ありけるもあやくし哀ある契也けり。

崎人傳卷之三 終

崎人傳卷之四

柳澤淇園

淇園柳澤氏。諱里恭。字公美。一號玉桂。通名權大夫。大和郡山同姓の土也。文學武術を始て人の師
ふるゝ足れる藝十六に及ぶとそ。佛學さへこゝろ得て。俱舍論を聞き僧もありけるとや。中に
も畫に長そ朱舜水傳來の緑色の法を紀の祇南海に學て。こゝ、小人物の役色世これを賞す。水に漬
し力を用て揉洗へども落しとさん。爲人。曠達不拘。容を好きて。才不才をいひそ。寄食せしむる
も、幾人といふ數をえらそ。あるひにかまそめに來たるものをも年を経て遣さず。家祿多けれど
もこまかためおとしさお至る。初め某の年。侯使として登極の御賀にめ都にのぼりしゆ下。
大雅にまよえて相贈し。よきより往來さへそ。ある時大雅大和お行しに。路費盡さる。假初に立
よりて景を借るに。例の如くとめ。門を閉て遣さず。家臣又いふよと有。幸にとめよりて内を好
まるゝの病を諫給ひれ。多慾のよめに身を亡し給ひんを憂といふ。こゝに大雅謀て。其上しを説
て曰。もし諫に従ひよまひ、止らん。聞給そし連え遣んど。あるし首をふりて。諫よみ従ひじ。遣
しませじと。ますます門を堅くして守らしむ。大雅終に裏は垣をまへて歸りしと也。或時の驛路
に出て。回國あるひの願禮の道者をも引て。禮をのつくして留るに。鐘とて供人おまた具し
き。刀のよめしもの、料にあざむかるゝならんと心得て。大に懼てにぐるもの多かりし。又轉



奕の罪によりて此境を放さるゝ者を。吏に私して邸の内に引入ていふ。生涯こゝに宿さば、刑禁獄も同窓と。其者をも賤しめず。詞を厚くして其伎をなましめ、その術の入い微をよろこぶ。又ある時に従者あまの引け。馬上にて野路を過るに。女乞丐の絃哥去て錢を乞ものにあひて。やゝて其絃をとりて自弾すさひて奥に入り。金をあまへて去る。絃よこもとより妙手なりき。凡所爲人の不意に出るの。王子猷に似るやいん。客を好むの鄒莊孔北海の風あり。

池 大 雅 附妻 玉 淵

大雅池氏。諱無名。同利奈。字貸成。通名秋平書生に。或の九畹山樵と書す。京師人。爲人蕭散。龜扇をもて心をおどろかさ。善く物と化して。荷も合し志を結さ。外疎放にして。内實修。人と交て謙損し。まかもおもろら。禮法に簡よして。往べくして往す。答べくして答へず。是を義にうへまこれの。いささかつて笑とあるあら。惠て弗望。廉にして非。其取予得失において情如さり。平生行事多く人の不意に出づ。於是時人の目あり。幼して穎異。學に文。學に書。能せそといふとるし。獨り繪の事は長。出水と圖る尤妙也と墓誌にいへり。幼して穎異のこと。三歳初めて爲書。五歳書を善。一日黃檗に至。堂明千果禪師に謁し。席上大帶書をな。禪師深く奇とし。偈を賜ひ。寺中の大衆とよ。詩を賦して是を賞。初め。拙を法林寺中清光院に學ひ。後古法帖をとりて晋唐に。書の紀國に往て。南海に書法を。又大和の柳里恭に

緑色の法を學ぶ。又土佐光芳が國畫の注を學ぶ。時に望玉齋ととも相いへらく。從來畫家いよ
 う漢法を學び、とまは是をばし先ん。玉齋の唐自虎をまなひ、此翁の梅道人を學ぶ。各竟に一
 家を成せり。後又倪雲林に倣へり。漢法の山水を畫しめたるころ、扇面に圖して自携へ。近江
 美濃尾張國々に告ぐ。人多怪て買者なし。是は是むなく京へ歸らんとて、瀬田の橋をわた
 る時其扇を出し。ことごとく湖水を畫して曰。是をもて龍王を祭ると。後いく月となく。書畫の名
 海内に播なり。好て名山に遊び高峻幽奥いたらんといふことなし。即取りて筆端の趣をかき。
 玄のく富士は其母に。其路を異にして、富士は國一百を作る。其變態を各自見る所。古今
 畫工いざ及ぶる所也。其行事多人は不意に出る話をいは。或時難波の出たけに筆携ふるこ
 とを忘る。妻玉瀧見つけてもちてはしり。建仁寺は前にて追ひきて授るに。道人おしいた。ま。い
 つまは人ぞ。よく拾ひ給りしてて別去る妻もよく言きて歸る。又近江高嶮侯のもとにて障
 子を畫く。京に歸りて後其報を賜ふに。更云。禮服を何けて謝をすさるべしと。道人詰してやかて
 高嶮まで袴を着ながら行なり。又江戸に下りたる時。其侯の邸におまゐる人有てやどりけ。六月十八
 日おかりて。けふの古郷祇園の社の御輿洗の神事也。いゝるるを學んとて。とみに紙もて個人を
 作り。火ともし。はやしもれして邸の内をめぐらんとするるとき。其侯の世子とたまひん。先もて恭
 まことの使有けきと。離物に紛らひ。聞ぬさまよてかゝまこ、に行めくりし時。おともて参らぬ

とむりかりて。使たびくし及ひしに。今参らんといふ時。其個人を頼らうきひ。よのあやまちし
 侍り。されどまを祇園の御神に奉る志あれば。又人に見せ奉らんことを。神のわづらひ給ひぬな
 るべしといひし。くくして速に宅をいださる。げにさもまるとてわらひつ。又ある豪富
 者番を托せしに。月日を経て果さず。使至るまことに近日とせといふ。一日童僕例のまどく来る。お
 書畫されば。門を出るより獨馬とて。遺死畫師。人を勞るることいくとびぞ。自負歎。情歎。人をあ
 めどるうといへるを聞て急ぎ走て引とめ。君のいふ所書畫也。吾過くして。直に筆を染て與
 へり。又一書林の僕。主人の金を用て遊興し。放逐にあひ。他國へ行んとする時。道人はもとへ
 來りて。別を告ぐ道人甚憐。我主人に他んといひて。持る所の書畫調度を賣て。その金をつくの
 び。歸參せしめり。中にも奇なるは。石刻の十三經を得んとて年比磨にかけしかば。たくいふる
 所の錢百貫に及べし。書畫な不售は。嘆息して其錢を祇園に社に奉納す。時御社修造のま
 とあれはあり。其時のさま。わらむしろの大ある袋に巴を畫す。神輿の拾貫文づ、拾よして。門人
 とともに禮服を着し。青竹の持もてさし荷へ。社司其名を掲んとせしを固く辭す。さきと誰と
 なくてばあるべうとすとて。玉瀧と名をせりき。定て此類は話いかめとモ有べし。今の予記得た
 るもれを擧る也。其死病の時。はし是より藥を服せず。此度の起すと決しぬ。時安永丙申四月十三
 日。真葛原の草堂を終る。歳五丁有四。舟岡の南淨光寺。先人の墓側に葬る。墓誌の大血禪師著し

て石に刻む。此爲人の全軀の墓誌により。開所の話を添て。其實を證及

惠恩院六如大僧都圖像贊。並小引

丈人以書畫一著。名海内。余向以室海。屢相往來。嘗知其人。蓋葆真精俗。歷千小伎者也。頃有入。齋其遺像。求題一辭。余私欽高風。不揣燕陋。輒爲賦長句。字々實錄。不敢文飾。文人有知。應撫掌於無何有之鄉一矣。

鵝衣蓬髮。怡然言語。近禪形肖。仙遊世仍懷濟。世志賣山。不蓄買山錢。機材滿屋。纒容膝。川字成腔。時弄絃。至竟深心誰可會。空令姓字藝中傳。

妻町子の。祇園林百合子が女也。大典禪師の墓誌に。夫の行に配すと書給へるおもむき。さきに舉る筆を持行みりら。夫に應し。無言にして歸る如くあり。夫に學て書を善と。柳里恭は號の玉の一字をもらひて。玉潤と號凡。夫と。もに冷泉殿へまひりて參り。哥を學ふ。始てまひりし時。所がらといひ。名はしりく。さきに。いかある婦人ぞと。御内の女房達。今やくと待るるに。思ひの外糊こはき綿衣に。魚籠を引提さるさま。大原女のしらうづはかぬことくみまは。大さにおとろさけり。是又籠辱を心とせざる夫の行に配するなるへし。道人のう。る高名の時人也。かれよりまほさ給へる也。富るるにもあらほげ。夫婦なから假初の禮義を表しくも有へるを。世人おまさりて季節は謝物をと。はへやるをり。哥のかの氣象も應するやうに添削はどのこまへりど



ぞ。また殿より。輿して。ありき。散膝を婦に給りしかり。春は母が名残れ茶店に出ることもあり
どなど。夫の三粒の與とといふものまたかをさびるるをえして彈うたへは。妻のやう古びたるうたを何
くし筆おかけて彈ひ。其筆の與もまたよくせりとあふ。世づかぬ家のうちけささありき。夫亡し
て数年の後身ありぬ。

求 大 雅 僧

大雅江戸より奥州にあそびしものへるさ。いづかにく。禪刹に入て午飯を乞に。住僧の他に行て
あらざりしかども。まゝよくもてなしく飯茶を進めたり。さきは大雅卒に一傷をとり。めて去ぬ
。住僧歸りてうの傷を見て甚賞し。これが和を作す。跡を追て京れうたに越し。道路は回。あ
は。つひに京まで來りてこ。うし。ま。尋。ま。と。も。後。傷。に。池。無。名。と。書。る。ま。は。と。ひ。た。さ。げ。其。名。を。し
る人か。し。も。と。め。ひ。て。空。しく。歸。ふ。ん。と。せ。し。ふ。せ。め。て。東。山。の。寺。社。拜。ま。さ。へ。と。人。の。勤。る。に。何。き
て。ま。つ。禪。園。社。に。詣。た。る。ま。給。馬。殿。に。掲。し。蘭。亭。の。圖。に。池。無。名。と。記。し。た。る。を。見。付。け。て。や。が。て。坊
に入てとひて。はじめて其所を去り。至りてたいめに及びけり。今の木曾とけり。京に用事と
て。其日旅立けりとかや。一傷の爲に數百里を追て。暮を遂てまた他意なき酒落。いと奇也。大
雅歿後。此話を門人に聞しかば。其奥州の地名僧名ともに洩しぬ。をしむべし。

澤 村 琴 所

苗 村 介 洞 附 妻 女

彦根隠士維顯。字伯揚。澤村氏。號琴所。通名は宮内。國侯の世臣なれども。江戸に近侍せる日。心
疾より退く。國制心疾を憂るもけり復出仕ふることを得ず。故お意を途に絶ち。城南松寺
村に閑居す。其居を松雨亭といふ。後再び起てことを願るものありといへども不肯。貧を分と。琴
書と樂とを隠を全せり。天資温恭。長中人より不及。狀貞婦女子はことしといへども。事に臨て勇
敢ある。其一つをいひ。平安より歸る日。湖中暴風にあひて船覆らんとす。衆人皆生る心地なき
に琴所ひとり自若。舷を扣てうたふの類。其平素に異なるを見て。人怪しむに至る。又自云。吾
一善狀なし。唯貨色二のみに在り。末人に對ていひがたきものあらざと。又過を聞て
欣然として改む。奴顯の言といへども取べきことあれば必まがふと行狀に記せり。始宋學を
事とすること年あり。後東涯の門に遊ひ。又徂徠の書と讀て。まそく古儀を喜ふ。其主とする所
經濟の學にして。著す所。桓公問對富強錄あり。出仕すといへども。國を憂るの志により。時を救
ふの要務也とす。又兵法に精く。八陳本儀。其外著書數部有といへども。稿を附せざるもの多し
と云ん。又詩歌を好む。詩の琴所稿刪。歌には閑窓集をといひ。元文四年己未歲正月九日卒す。
壽五十有四年也。其詩哥の口氣平温にまて雅正あるものといひんか。おのきづねろかある手にて選
出すおのあらず。唯うの事狀おあづかるもけを採てこ。にまじへ掲ぐ。

京ありける比名里持長亭にて。立秋の日哥よみける中に
あへらんと契りし秋をふるさとの松にもけふや風の何ぐふん

松井幸隆亭にて。詠紅葉

紅葉のいろうつろふ籠の糸の染てかきまきさぐひともあま

都の東山なる何かの院にまひり在ける比。月いとありかりける夜。南面の板敷にひとり
けせりむてむかへ今のこころまはかどあつくれもひつゞけて。すまじやとるこころを
過忘ころあくる給へるあゝ君の。あまじまの。姿にて琴をかいたら。いと心よげよ見
へたるを。あまうれし。何、がなくてぞればしぬると。打まもりてゐるやよあまめ。
夜ひや、りよ人まづまりて。山松の間のまひまひひる。いとありけよ

はかきくもさめける夢り玉琴たまぐさの庭の松に残して

まのこを便に付てふるさとの父君にゆけ侍ければ。今さらにもあふたかりてなを聞え
給ひて。父左平太之章
麻山と號に

見し夢をさくにつけても玉の緒はましかきことれ音をのこそあく
遊さふりゆききていとしく人め絶たりける比松寺邑の庵にて成へし

跡へてはれぬ雪れふるさとのまがきの山もみよしほ、おく

移居

都城、西畔古街、隈。三經新、依、酒店、開。非、爲、晨昏、進、定省。那、堪、琴、鶴、落、塵、埃、陶、潛、門、外、先、移、
柳、林、道、堂、前、未、程、梅。我自、人間、忘、機、久。江、邊、白、鳥、莫、相、猜。
去歲癸卯遷居城下。爾來應接日多。不堪其煩。乃將辭去。寄別諸子。
城上、西風、秋已深。荷衣、轉覺、塵埃。侵、浮雲、落日、山川、色。蕙帳、杉扉、猿鶴、門。世路、無端、多、按、劍。
生涯、寧復、問、遺金。接輿、元是、疎狂客。好、去、行歌、楚水、陰。

此時のうゝ

いで、しも世に光あきみり月ややめてかくろふやまれの雲

守野といへる山里にまひり住し時。人のよみて贈りしうゝのかへし

ならしはのあれゆくとせうにぞにぬ秋の小田守野守山もり

こ、をも住す、して明れ春。これうの誘ひて又遊びてなご。ことばがまあきて

花もやゝすがよしるや立なれし山櫻戸の去歲はあるとい

物まうての記の中に。あわれにわがまゝし詞とらう。「老曾の杜ふる來たる。とくりーそのか
ミ策を負師に従ひて。京に物まかひしける比。行のへることに此森を過しこといくたひな
りけらし。あわれ身をたて道を行ひて。ま、ろはうりのまよなうおきひあがりてけるま。

名をあげ父母をあらわしはよともみく。い何しうに志ぬ翁にありはてにけるよと。公さ
らよいどあし。

徒に老曾けもりの下露をどが袖にとはおもひうけさや

松寺の草庵は。ひ、とせ出しにーより。こと人の住けるを。丁未の青より又どろ方へへ
されてげり。秋にも成行ま、に。むかし植置し萩のいとよく咲けるをきて。

年月をふる枝の真萩今さらよもどのあるしを花もわするな

幽栖の趣を見るかよどさの秋夜の弾琴

醉^マ把^ニ蕉琴^ヲ聊^カ自^ラ彈^ル。古松風定^ニ夜方^ニ闌^ル。朱絃^ヲ一曲千秋^ノ涙^ヲ。回^レ首^ヲ西山落月寒^シ。

即事

幽齋讀^レ書^ヲ罷^シ。靜^ニ嘯^シ岸^ニ鳥^ノ紗^ヲ。遙^ニ見^ル前村暮^シ。歸^ル牛^ノ度^ニ稻花^ヲ。

題肖像

侍集本籍以^ニ
此作^ヲ終^ス之^ヲ。

有^レ志^無徳^ノ體^柔氣^剛。知^ラ厭^シ不可^ク。爰^ニ逃^レ爰^ニ臆^ル。短^シ琴^ノ孤^ノ劍^ヲ。荷^テ衣^ヲ蘿^ノ裝^テ十年^ノ。必^ズ事^ヲ。秋^ノ月^ノ滄^ノ浪^ヲ。

江のわたるを題してよまれける述懐の意も哀あり

おもふそよ入江の水草朽てしもよの螢けひかりある身を

ある禪院のいしうに書付くまじり

身^後の名^さへくちその埋^木の花^さく春^はよしをらすとも

まの心^ばいどあしうなしうればゆれば。此^草案^を書^ける問^ふ。かへしの魚^を口^ずさび侍^り。

くちの名^を誰^もしへの書^けめし君^ヲ操^の松^けこと^の葉^ノ

右^詩集^ともに。此^とより^に藏^{せる}人^なりし^の。近^江の舊^友に^きとめて。かくうじて得^つ。和^漢
の文章^もともに雨^集よ^出ま^さども。あよりあまとまげ、まのいもくしぬ

○介^洞の苗^村氏[。]通^名道^益。世^々醫^を業^として近^江八^幡に^住す。若^き時^ハ堀^川伊^藤氏^ヲ學^びて文^學
あり。日^々の事^務も漢^文に筆^記す。性^豪にして物^にも^はどせられず。まかも無^義あまの^人僧[。]
す。其^一と^いふ。近^村へ醫^療に^行路^程。農^人の早^苗を^運び^植るに^あふ。世^はな^らば^くに。苗^う
ゆるとき^ハ。行^人勞^を慰^まて^過るを。此^老翁^さも^せぬ^ば。農^夫等^ハふ^やきて。彼^れ八^幡の^道益^禮な
しと^讀る。老^人ま^まを^聞か^がら^行過^て。歸^るま^ま又^まま^を經^る時^ハ。田^よある^人を^こて^まも^さは^ら。
さ^はが^にま^る人^なれ^り。田^を出^て來^るに。曰^さま^まわ^れを^そま^れど。子^よく^おも^ふへ^し。子^か苗^守
るも^業也[。]吾^醫療^ヲ通^ふも^業也[。]わ^れも^し子^を慰^勞せ^り。子^もま^ま吾^をま^はら^へし。い^うに^ど。
農^人得^答へ^らず。前^を搔^て退^く。又^或家^の請^ヲ應^じて。病^人を^診て^速に^去ん^どは[。]ある^し藥^をこ^ひ
しか^ハ。曰[。]既^に門^を出^て數^百步^行る^客の^{ため}に。饗^をま^すくる^が如^し。不^可及^ど。終^は出^去る^こ
こ^まら^て。常^の趣^知べ^し。其^口號^も氣^象を^見る^へま^のあ^れの^こ。み^舉。

悪、蚤

捕、染針盡復、防難、開、戸偶然見、月殘、主、猛手空、憎、爾、獵、幾回誤、把、鷹、綿、一丸。

病 中 作

花歎、辭、枝、看、色、移、丹爐、澤、少、有、誰、知、漢、君、衰、晚、豈、無、感、起、感、秋、風、蘭、菊、時。

此作ありて後。いくやとなく。卒と。壽七十有五。寛延元年戊辰歳。十月廿三日也。

介洞先に妻有て蚤く亡す。後妻其真卒邊幅を、さめること主翁に過り。若後薙髮して貞信といへりしかど。ある名はいつて妙雷と入よび。其間四隣にひき。心におもふや、れことをうち出れ人なきの也。あるひは何れく所へ人到れり。よろこびて茶酒ともてあ。昔今のことをかさくゆかさり出て。なまみわらひと奥入。客座久して對するお物言くあきば。われ酔て寝ふ。今のはや歸られよ。いづくと催さる、類ひ。常にゆき、する人の馴て心よもかけざるのみ歟。戯に迷ひて長座するも有し。是もわかきより文雅を好み師よもよらて哥をよされしが。中への俊發のまれもありき。今其二三を擧。

題名、き

同一枝をいかに時雨れふとけて青葉うち紅葉しぬらん

八十四といふ壽。けうやくもかしよき御方より。高き齡をいひ給ひて。連哥の一句

を。親しく御筆を染て賜りける。百千とせ行末長き春日哉。此時によめりう。

うしこ一なりたの。草の露をくももふさて月の影やといひ

享年八十六ありて。身よりうりあんとせしとき

あま小ふゆ八十の湊を漕過く彼岸近くあるそうれしき

おのれものしこにありける日。長居せしやろうとの歎みきり。こ。に追慕の筆をそむ。

手 嶋 堵 庵

堵庵ハ手嶋氏。宮小路三條街の人。家名近江屋源右衛門。隠居して嘉左衛門と改む。爲人篤實謹慎。少より石田勘半に従ひ學ぶ。石田氏の心法を主とて。市井の人のために専修身を説き齊家論。都鄙問答といへるものを著し。一家は學を唱ふ。此人歿して後。高弟全門といふ老人の近江屋仁兵衛。續て講説といへども。其徒尚多うらず。堵庵もどよりまづうらなれを。金錢品物に上らそ。堅く束修を受き。故に貧賤吝惜の徒も喜びく學に趣く。社中の請は應して。こ、うしこに俗講をつとむること年ありて。終に其學海内にひろがり。教の及ぶ驛もまよ、見。近年米價登揚の間。貧人に施を行ふもの。多く此門下に出ること。世の知る所也。尙又一二といひ。或婦女郷里に祖母壹人有。貧にして親族の養をうく。まるもけ勸めて。其身得る所の金をとうちて養を助けよといふに婢不肯。吾身親族の手をうらな。自衣食するの猶祖母は幸也。其字へに何の

奉養をういひんと。然るにいつの比より。それ仕ふる所の家婦に従ひて。堵庵に講を聞しより。先きの言を悔て。去ばく祖母は物を贈り孝の心をいふびいとあり。又或女鼠のために衣裳を嚙れて。はらたれ悲しみまが。かゝつて彼心法を聞し。こゝどれもひて。一夜静坐して宿ることあり。自怡悦て口及さむ。今までの鼠の喰とおもひしに私の喰とおもやをのし。といへり。凡教示の旨。自を抑て他を惠と。磨人れ分を守て。希望を斷ぐし。儉と何とめて吝することあるべきとあり。又常に本心を觀よといひ。或の物を扣ては何ぞ。手を拍て聲いづれにありやと。時々研究せまめ。旨にかかへば許可と。其著述を看るに。播磨盤植禪師不生の佛心と説れしによるよし也。故に或の禪儒の請ありといへども。是ま王陽明の所説。良智良能に基せる歟。其師石田氏母の病るに藥を進る時。若ることありとけける趣也。また此流の人文字をいはず門。生目一丁字を知らずして。常に俗講して大に行る。もあり。これよりて。文學は人は甚いやしむれやも。もとより學者を教といはば。市井の人は人道をなす。自性を誦ざるを導とされり。世に有益の事とそべし。脈中萬卷の書を藏し。文章天下を驚すも。利名の媒とるにまよふざらんや。世間此流を汲もれ。又聖をもて仰ぐ。一とせ此翁大和へ講におもむく旅途の間竹籃を舉出て。去ひて乘しめ。道を聞傳ふる恩義のためにすと云人あるに至る。去年歿せる時。遠四方葬お趣くもの。千をもて算ふ。其居より黒谷に及て。二十有餘丁。道路の間行來是がさめお挾く先づちて至り

後れていそぎ。終日人立こましも。近世僧俗の間開まど稀なる所也。翁晚年山水の興をおもひて。郊外に遁れんとれもひしうと。子弟定省のふめに勞しく。家業を怠んやの懼にて本居ちうきに住さる。庭はさやを田野に摸して。はつらに稻を植し。おもひを遣けるとぞ。野服高巾門人に助られて。花紅葉に遊行せまよなども。風流なき人へのあふさる。著書假名書れものあまふ印行せり。兒童に示す前訓と。今日の小學なるべし。

高橋 圖南

高橋若挾守紀宗直老人。號の圖南御厨子所預にして。庖丁の其家おれども。ことに勝りとかや。或時諸友六人會しく。庖丁を望むに。鯉一ツを何れ品もあく六つに切られしに能みきは六つの一もたかひさりに。皆其妙を感じぬ。尤有職は學に名あり。いつのころにや。紅梅の作持お雛子をゆけて奉ましと。

靈元法皇賜せる御製

いのかくつくり出けん咲花のときも。かぬ梅の一枝。又

中御門院の御時。勅およりて。同じく梅に鳥をつけて奉るとて。よみて添ふり。

時しわれの傳へしとさも。わらわれもては。やさる。梅の一えし

寶曆十三平御即位の日。白馬は端祥の文勅を奉る賞。從四位下を授くる。又某歲。小御所にして



白鳥庵丁の時。祿を賜りて。笏さかりしうべ。懐のうら。是にかへて拜す。手も取りのあくて
 拜舞する。其儀にあらはといへり。志を。まゐる人の感。又紫清殿の圖を台にかがへて正
 志けるを。勅によりて奉りしも譽れ也。猶大内裏の圖も考置るよ。語られか。有職の故事を
 集め。自撰と一寶石類書百餘卷に及ぶを。家に蔵す。其奥に書れり。

拾ひとり捨るもをし、と色くの石を寶とおもふかろか

又一笑話有。上京の鍛冶に狐つきて。今此業をせじ。出身はるあといひて狂けるに。若人といめ
 して。狐にてあらば庵丁をうちてあへよ。是はお母やけの御物を調する料也。是斗のうつへ
 といひきか。雌雄二万をうちて雌のかさよきかれ。小狐と名づくやあ。八十有餘に
 て去年終らきぬ。

堅田 祐庵

祐庵は北村氏。淡海堅田の浦の豪農にて。茶事に熟し。物味をすること。いにへた。易
 弟にも聡す。傳る所は話多き。つねに奴僕をして湖中へ水を汲きて茶に用るに。其は所と
 令と。其指所にあらざるを汲來れり。必又其所を知ること。神はこと。終に^{あま}欺くことを得と。魚鳥
 を得る所を知らずかくれとし。まかれをなす。ある人豆腐は串貫るを^{俗に田樂}食しむ
 るに。此串は竹の遠く來るまは串といふ。まましら。厨下をひし。漁者より物を荷ひ來る

竹をもて削りといひしむる。奇といふも餘あり。又或る家にて。碎茶は薬を出せしに此茶の男は、さし也といひしかば。厨下にとふに然り。是はいかよして知たやふやと問しに。男はた、さしつあらし。女は力能是にかあへり。必女にせさせ給へといひしとそ。か、れば人に物を獲るること必り、しめり。所か、湖中は鯉鮒は頼を調る。魚板數枚を用也。はじめ鱗をはる。より。肉を切にいさるまで。次を追て板を轉せ。かくせされは。ちつり香ありてまよくさしといひ。一日京師にて茶事の友にあひたるに。名にしれふ。源五郎鮒食せ給へといふに。さふりいかり。いと契りて歸る。其日友人の至る時。其門鮒數十をとり入るを見るに。食にけきて出さる所。はつかにして腹が満す。友人あやしめて。さしもあまの取入給ふと見しに。是はいかにといへは。主笑ひて。望まふ所の源五郎鮒の眞あるもけり。數十の内にて一二を得がたきといへりといふ。又庭園は作意あ長ず。其つ、れる所は庭。堅田大津などに残るを見て。うれ道知る人の及ぶるを嘆すとかや。此人は所爲畢竟茶博士は奢侈なるもれにきて。子弟はるめに語るべからずといふも。味をえるは異能にかきては。他に比すべきなし。奇といひららんや。享保中比まで。あり老人にや。予相識は老人。茶事をもて交りたる人ありき。

久 隅 守 景

守景は久隅氏通名半兵衛。探幽法印の弟子にて書を能く家貧なきとも其志高く容易人に需に應ずるまとなし。加賀侯守景を召て。金澤に留給ふまど三年に及びしかとも。扶持給るけしきもあかりしかば。かくての故郷ああるも同し。歸りかんとて。侯は近侍せる士を別を告しかは理也とて其よしを予ける。侯笑給ひて。吾よくまれをしれり。然れども守景の膽太くきて。人れ需に従ふもれあらず。其書もとより世に稀なるもれ也。さきば此男に祿を與へは。書を描くまどをばせじとおもひて。かく貧しからしむ。今は三年に及へば。書も國中あ多く残りあん。さらば扶持まどとて。まどもくからず賜しとぞ。

按守景の爲人。もとより寄也。侯の人を知りてまへるまど明もして。又謀まへる所尤寄也。樂天が體を養ふ篇も。飽しむれば放れ飢えむれば馴すといひて。人事をさとしけるもおもひよせらるぬ。

土 肥 二 三

茶人花押數に。土岐 三州吉田府。牧野侯に仕へ。録二百石を食ひ一子を失ひて。忽隱心を生し。つうへを辭して頭あろくける時。とく聞けり。文おこせらる人々あり。其うへまどと。人にねらせて書するに。今までの名は似つかりしからず。法師は名は何とらとどふに。いなまど名はさし。二と三とまかけうしといふに。やかて二三と書れば。こまどま名ありとて。うれにまどるあり。後都の岡崎に住て。自在軒といふ。纒に膝を容る斗也。

山風乃たけを

夕了

花すめ

花よる

有る

くは

花すめ



火宅もしふで火宅にふらめくひ直に自在は鐘子也けぞ

是より軒れ名によひける。茶は織田の風を學ひ。まゝ香をこのむ。平家をかゝりて。琵琶のしかも
上手なりしとろ。常にねとろく斗の美服を着ししが。ある時古る下駄を繩よけなきてもたるを
いかにと・へり。かりし人にかへありといひしこともあま物ことに心をとゞめず。往來する
所さぶめあし。ふどころに金貳ひらをくひへて。其包紙あ。い何こにてもたふれなん所よて。體
をかくま給いれ。是は其費に充るありと書付し。伯倫が劔を荷はせたるよりも。かやすきまわ
さなと。さきとすくよのなる人にて。齡九十に近づきて。足駄はまて。黒谷の茶店へ物噴にゆくま
と日よ三たひ。三十文錢一日を過そに足るといはれしとせん。始り火けま盡といふものに米をた
くりへぬるよし。それも物うく成けんかき。杜鵑と銘ある琵琶一面。平家二卷を。三河の土山田氏
よめへて。今あふ其家お蔵せまどせん。

廣澤長孝

長孝は望月氏。名兼友。京師は人にて廣澤の開居をさ。のや小々の意といふ。歌學は貞徳翁に句
あるべしたへしが。其よとらたは藍よりも青しと見ゆ。

けふもまの垣みはげばらゆひまで霜踏鳥の跡の有けま

とよめるより。其やどりをまた。霜ふむ鳥の塵と人よびけり。ある時人のもとへ庭に栗をおく

りて。

ゆらかましめさめの音もとどらきてあくれの拾ふ庭のさ、栗
あと幽居のさよおもひやらる。されど其代此道に名高くなわゆる公郷も花によせ月にうらちて
ひ。とふらひささせる趣。家の集まとも。其中八月十五夜に。やごとあさ御かたくとともに雨を
うら見て。

よしやふけ秋の草木は嵐山月のか何らも雲にまざる、

此うたによりて。其集を桂雲と後に名付たり。諸郷ふかく感しよまへるもあどそ。其巻頭の雪た。
年内立春

としのまだのれなく残る有明の月よりかひむ春は来にけり

同しまる。或宗匠れよみ給へるに「年はまだ残る日数をあさ露立へたて、や春は来何らん。とい
へるは。いとよく似たるもの、。廣澤の露や立まざるふんといへる人も侍りしか。延寶九年辛酉
三月十五日。即天和元年あり。六十三歳にして終る。此門人に風觀窓長雅洛下ふ名有。その次に有
賀以敬齋長伯。家を傳嗣さ。此流きを汲む人多く。地下は一流と稱そ。以敬齋は和哥よみうこの書
をあよふ著し初學を導く。印行拾貳部に及べり。

僧 似 雲

僧似雲。始の名の如雲。安藝は國廣嶋は人なり。哥を好み都にのりて。儀同三司實陰公に學ぶ
後もえわりて参りす。名山異地こ、かしまにあそひ。住所を定めまきは。世お今西行といへるを聞
きりぬるとぞ。自も「西行に姿斗り似されとも心の雪と墨染の袖。と戯れける。されり此上人は墓所さだかあ
らぬを歎きて。石山の救世菩薩に祈り。其異告によりて。河内國弘川寺をもとめ得たり。そまに
て唯行塚といひあらりして。其よしもさだかあらざりしを。石のしをしを碑。はた其寺に有けり
肖像をも捜し出て壁を造立し。自も山中に菴を結びて住り。春雨亭といふ。其時の哥に。

並みらぬ昔れ人の跡とめて弘川寺にそまらめれりて

そは菴のひろさ壘一ひふ二ひふに過ぎれば。人々見て。今とこしひろめよといひけれり。

我菴はかたもさ。先は行雲の立居さいらぬ空とまろ思へ

此山よあるほど。又いづまおまれ一人住る時り。搔餅といふもの二ひらを舌にたせて。一日の糺
にす。飯炊く煩と除さけるとぞ。ま、おあよふさくらを栽させて後。所の山人へまうととて石に
彫るうた

折添てあざにちらす山柴にまじる櫻の下枝ありとも

須戸の浦に有ける時。久しく絶たる盤龍を興して。まをやまをむるとて。是延享四年卯正月十五
絶てまぬもしるの煙立かへり昔にうけむしやかまのうら
日とそその自記に見ゆ

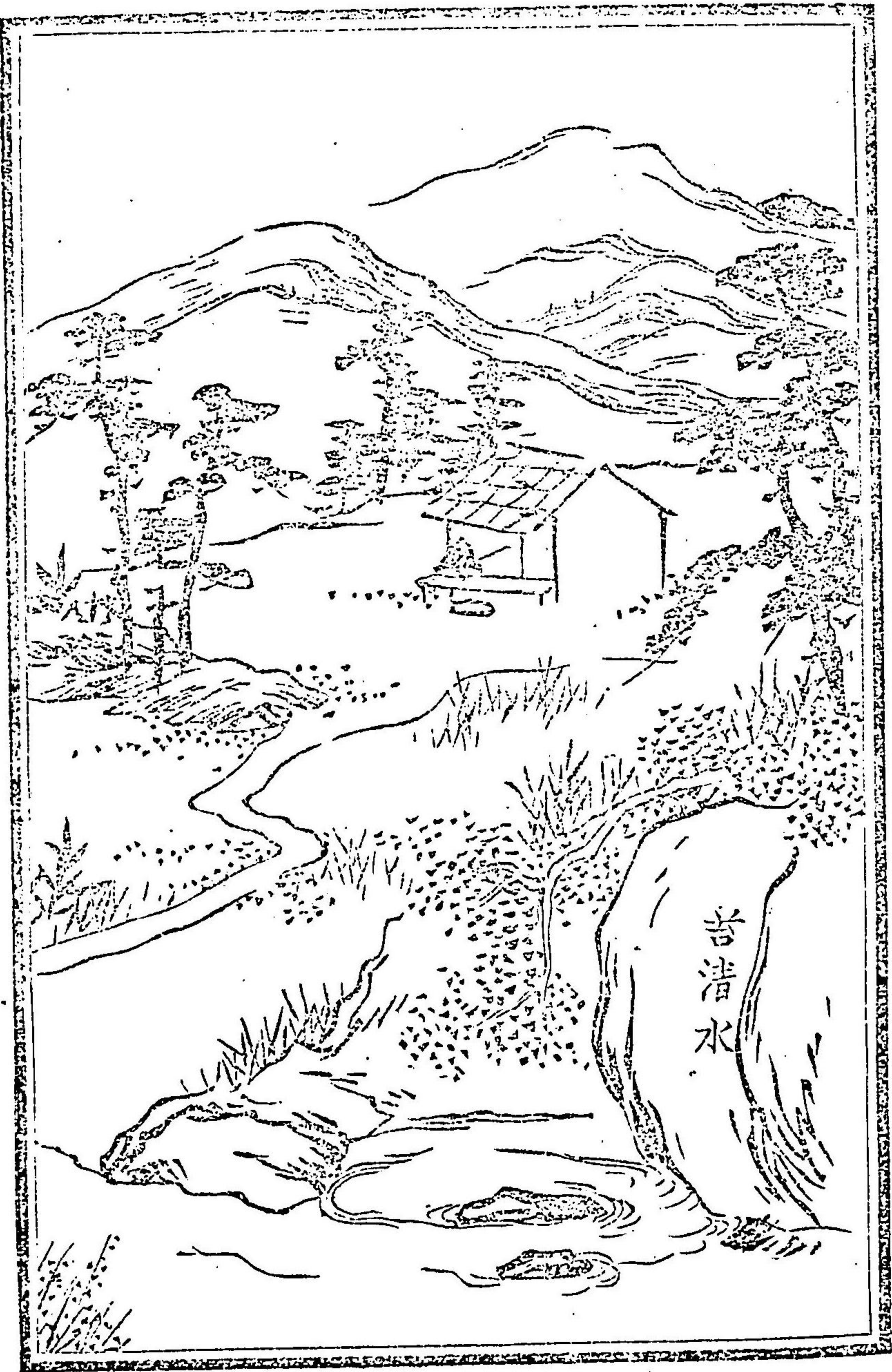
志やされし昔の人の心までけふ汲てしるすまは浦きみ
我再興せし摺りまも。又けふりけ絶侍りければとて。

身おろしむ又よりすまよやく沙の煙も絶し跡れうらかせ
あらし山のふもと大井の川邊に。弘川とよしく同しきまの庵をつくる。

任かへん秋のもみちのさかた山春はよしの、花の下庵
その吉野にて庵を結ばんとせしに。さゝるることありしか。

露の身をおく計なる草は庵結ばんとそれバ山風ろ吹
さきど昔清水のふくに。まばし住ける跡あり。其外高野の奥龍門の籠の邊みと。世離れし所々に
住るおもむき。其自記おもひ出ぐさの流並草かどおもひゆ。八句よあよりて。和泉國隱尾の豪富北村
氏に身をよせて。そこにて歿し。體は遺言して。弘川におくり。西行と同じさまに墳を筑く。著す
所有二記の外。似雲開書と題して。儀回公の伝説をたゞことに書つけたるものあり。雑話まよじ
れり。耳底記の体にあらへる蚊。葛城百首といふもの。弘川に有てよれる所おして。信仰の人梓
木の因せり。その外ありやえまらす。

似雲の其北風流の道心者といへり。その跡を見るに。名を好める人にやと評せる人侍り
き。按に。西行上人弘川寺にて終るまふといふ長秋詠藻にさぶか出。るまふ葬るや迄のまけ



れ共。尋行てもどめかんに。其行塚もまらるへきま。観音薩たを勞し奉まけるもかたし
けなし。其異夢のあそく。尤むけうしきこと也。凡此人の夢をよるこふにや。その自記の
うちに。あふ見へる事ともあまき。又居を好む僻あるか。うけ弘川と嵯峨の菴。作ま
しくひとしく。西に一圓相と穿て持佛に代ふ。廣さの纒に二疊かやどにたくみ有て。茶
室れことし。これらの跡を見て評せるまや。挾き菴の好みに過る。其意の狭まると
。涌蓮法師もいひき。されど其まゆふ所の西行上人のうに「世をいとふ名をだもま
どめ置て數ちらぬ身の思ひ出にせん。とあるをみれば。此人もまゝ其境界の名をと
る。一程の風流とやおもひけん。何れまされ。よき須達を得て。生前歿後其好にかるひけ
る。たれもうらやむべし。かう書けくるも。毛を吹き疵をもとむるは請を得ぬべくやあ
らん。

僧 惠 潭

僧惠潭は奥州白河の士。姓は坂上にして。並河を稱す。諱は義宗。通名は遁世の後。深くつゝめる
よしなきべこ。にもらせり。其人とあま。温順にして文雅を好み。志の馬の達者にて。従ひま
あふ人もあまき。然るに若き時より遁世の志を懐くゆゑ。妻をも貝せず。甥を子として家を繼
した。姪女を娶て是か妻とし。子一人ある比やひ。自り同家のまりへみ隠居してありしが。時よし

どやれもひけん。もとゞりを切。ひそくま家を出。刀脇指をも具せず。携る所は歌書二冊。金壹
斤の路費の。駿河の原に至り。白隠の徒に従ひて禪を學ぶ。年比の哥の師一室揖井氏に來りし日
。昔おも似。すや何れなる姿あれば。鼠色しるる木綿の小袖を施したる。頓て同行の僧も與へり
。銀を施したる時もさくへず。直に伴ふ僧と。もに。さづらしく京に登るとるかひにとて。職場
を看た。よろけのこと心をとめざるなどかくのおとし。吉野山の奥赤龍といふ谷深死さと
にも一とせ斗住りしが。熊野々奥山おし終れり時。六十八とかや。遁世の後の故郷は親族も
在処をまらせず終けるよしも彼揖井氏より母のめかしけるのみとぞ。されども勤仕全かりしう
へ。出家の先君の御菩提をとふらんとめ。志とまをけるもゑにや。其家の祿も減せ。さ
がら相續し。此人の西行をまゆふにあらで。おのづから趣似りやといふべし。哥もあし
からざりしかど。記得せずと揖井氏いへり。

矢 部 正 子

正子矢部氏。はし宛れ名の久子。美濃國芝原の郷北方の人。年十六にして。同じ國結は里大平氏に
結ひて。ひとりの女をまうく。十九といふ歳。其夫の忍ひ妻のゑをもて忘られて。かの女を何れ
て母のおやのもとに歸れり。後ふゝ。び嫁せず。家を移して母兄ともに京に住り。哥よみ手かく
まどを若菴小澤氏にまなび。其外茶香は風流をはしめ。女禮長刀の態まてまなふこと多りり。

此間かりそめに故郷にくらりたる時、もとれ夫、後の妻もあり、子もいてきたるに。野中の清水とすれがさくやありけん。仲たちしてとくくいひみびけんとし文をさへおくりしを。さながらかへそとて。一言のまごを添ふ。

秋にあひて枯にしものを今さふよ何おどろうは萩は上風

女むすめのた先にたのき仕への志わりしうべ。二十六といふ歳に何かしの國は守は姫君のかしづきに参りしが。名を呉くれとたまひ。江戸に仕ふ才あるから。さぐひあたく時先かし給ひしに過。女むすめはれたかあひて退く。さて江戸にあること一とせあまり。わひしる人ひとは勤むるにより。哥うたは道みちを教へけるが。よきふ人百に及ぶ。さるにはから火の災にあひて。ま、かしまにげまをひ。からうして身ひとけされくして京へ歸らんとするに。母にあづけ置るをすめ先に死し。つぎて母もさせし時。歸りつきて。悲しみに堪ず。ましかの身は幸さいわいなきことをもとりあつめてやらんかたふくの尼になりて惠静と名けく。時に年二十八也。其時まよしき人々をいめしかを。口ずさひ一宇た

浅うらすいさむることをそむかめや大かたに上をうしと思ひ

やけかりもほど、ひながら河邊に交りし人なるに。この折のあふみお侍りーかばいひやりける。

かたく間もささぶ袖のくちはて、衣かへぬとさくひまことか

おもふにまごがひのまごく世のうまや眞の道のしるべありけん

返し

墨染お衣は色のかへしかどうはらぬきの袖のうへの露

おもふことげにさがりすは世の中のおぶる道にまよひりてまし

たもひのゆもりにや。あくる年は秋長月病て終る。才ある女の中へお幸さいわいなきの妾薄命。の詩題あるが如く。やまどもろこ、にふめし多うれを。まさにまゐる人の宮へにかゝるがいと哀よてまゐる。鳥部山に葬る。其よめるきたり。よしとおもへるも多かりしを例のあまのね得えず。

厂たてをよめる

なく厂たての壁もはるかかへた、まて廻めぐり行秋旁の空

衣によするこひ

おもふ其人にのさせし月草の花指衣うつろふがうさ

題 ま ぶ す

水底に沈める月も入はてば何とらさ身のさぐひにのせん

瀬によせておもひをのぶ

世れ中のあすかの川とさ、しかと身のささ瀬こそかはらざりけ

哥うたの集は其兄敬壽正真まことがもとに藏せりしが。正真もまよ此ころ疫によりてとみお身まかる。京へ

ありとびて故郷へかへらんとせしが間なりしも哀也。此人さして長せることはあし。唯記憶の強
きこといさらにもぐひあかりき。涌蓮法師生存の日の。吾等此人に語りおけば。筆にまろすよ
りもさかかに。時ありてとひさくによしといへり。是につきて奇特なるまどい。人の詩哥をさ
して。たよく文字一つ。てには一つあど。思ひたがへし。人に語る事ありて。聞直しけれ
ば。やがて其かりし人のもとへいきて其よを告し。かりそめほまどかれと。このまこと也

祇園梶子

附百合子

梶子の祇園林の茶店は女也。もとより其より其よりの人にあまらず。其家集梶の葉を見れり。をさる
きよりうたをよめり。十四にありける年のくれに歳暮といふことを

こひくてことしもあだに暮にけり涙の軒あそやけあん

又其秀逸とて人の口にある。夜露を。

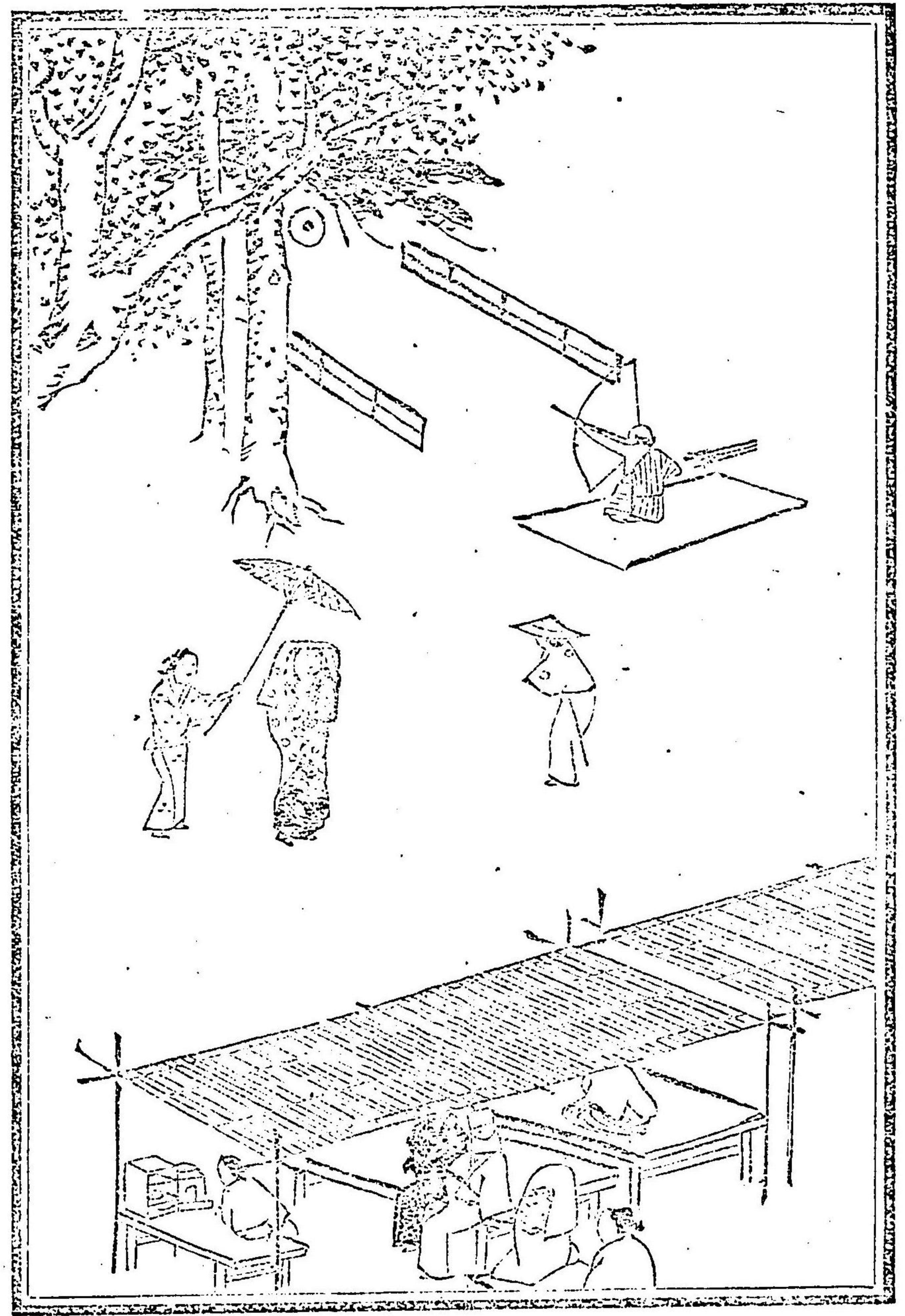
雪あらは梢にとめてあそやまんよるはあらしの音にのまして

まゝ立春のうたおのれいよしどおもへり。

のどけしおのあし原のけさは春水のおも風は姿も

○百合子の梶が茶店をつぐよー自いへりし是もうたを好かきも。梶に及ぶること遠し。たゞ茶
店に女にして哥よむといふがめづらしさに。おなりやでもそれ名聞より。ふれがむすめ町子の大

雅が妻となりぬ。既に大雅が傳に出せり。



室町宗甫

宗甫の京師室町四條街に。何のしといへる豪商ありしが。男子二人俱に無頼なるがゆゑ。勘當す
 然りし後。世中うるせくなぐえて。他の子を嗣として家をゆづるとも。此二人のゐるもの來りや
 ついふを心よりふじとて。其家をはなれ。ある所の調度とも皆賣つて。貳万金にありぬ。かの
 れは。かごりある所にこもりて。世の交もせぬ。彼金のよしき人^{ほご}は施す料とす。されのうらうら
 みる人いと悲しきさまなるを。錢すこしあたへ給へなどいふ人あれば。いなわきもやとしと口に
 しいひて。ひそかに金五兩つ、みて其家に投入る。あるじ此人ならんと推し。謝に來さば。い
 なわれにのあふすとといふ。不意に人お與ふる金の必五片に定む。もま又貧にして家を賣人ありと
 聞ば。價高く買。損したる所をゆるいて。うつり住かと思れぬ。やがて價賤賣はあつ。常に陰徳
 と行ふこと此類にて。二万金残なくなりぬ。またをかききことは。河豚^{かぐ}を好めど。世よりあり一時の
 おろれてくらひす。いまいあるもなきも同一身ありとて。わけなき是を喰ふ。貧しく好物^{このか}の唯こ
 と斗也。常に鼠色の綿衣。墨染の布衣を着るまゝ。よて。病く死さんとぞる時。纒に錢三百文米二
 合あるのみ。されをも此人の恩によりて。富むる人々。これうれ聞けけとひ來り。おもころに介
 抱して。終をやすくせむ。廿餘年心のゆくまゝ。に過して。七十有餘ありしとある。

惟 然 坊



惟慈坊の美濃國關の人にして。もと富家ありしが。後甚貧しくされり。俳諧を好む。其の門人あり。風狂して所定めそありく。發句もまゝ狂せりされば同門の人彦根の許六。其句を録めて天狗集と名けり。ある時はせをも供ふ旅寐したるに。木は引切さる枕は頭痛くやありけん。自の帯を解てこれを巻て寐たれば。翁みて。惟然の頭の脊に家を忘へまど笑れり。あり。ある時故卿の篠田氏ある人のもとにて數日滞留し。浴に入るが。いづこへか行んどおもひ。其浴所に女の小袖のありけるを。あやまりて取りへ着つ。忽ちせり。さもしらで。其家くまぐままでをさづめて。大さよさわぎが。四五里外の里にわそびてありしとある。又師の發句どもを何々あはせて和讀に作りて常に誦ひありく。まきを風蘿念佛といふ。風蘿はせ。をの號あり。「まげのむく。推の木もあり夏木立。音はあふれか檜木笠。南無あみまぐ。此例にて數首あり。此人のむせめり尾張名護屋の豪家に嫁したるを。うく風狂しあまく後の音信もせぬ。あるとき名古屋の町にて行あひり女の侍女下べきを引つれてありしが。父を見つけて。いうまいづこにかおひくまきけん。なつうしさとて。人目も恥す。乞丐ともいふべき姿ある袖も取つきて歎きまうば。おのれもうちまきだぐみて。「胸袖に唯何となく時雨哉」といひ捨てはしど過ぬとある。此人のかけるもの或人のもてるをみしむ。手いとよくて。詞書の。有ユ三千斤、金、不如ニ林下、貧ニと書て「ひだるさお馴てよく寐る霜夜哉。又關の人れもてるに詞書。世の中はまのじと思ふべ。金銀をたくはへて人を惠

めることもあらず。己をもくるしやまめんより。貧しうして心よか。ることなく。氣を養ふにのみかじ。學文して身に行ざらんより。まふすして愚なるにのみかじ。「人はしるま實此道のぬくめ鳥。こきらにて其情ろの生涯れありまをまをるべし。

淡海狂僧

いづまの人といふことをまらさ。乞丐の如くみて近江愛知川のわたり。高宮のはどりを狂ありく僧あり。あるとき彦根某寺そののてらの和尚へ行あふ。狂僧問て曰。和尚法味の如何。答て曰。如流そのうら。詰曰。若如何せいかい。和尚答るまどあひのま。狂僧頓に和尚を推倒し。柱杖を奪ひて背を春うたふ。一夜らんくちのはま。いく夜さちがふもまれませぬ和尚什麼なニと良走去。是其比れ童謡を用るあり。後師家も恥て寺は歸らまといふ。

表太

表太の貞享元録の間は人。京師新町四條の北表具師太兵衛あり。人唯表太とのといひあふのせるとか。老て後男子三人。皆家をこゝあかまへたるがもとに一夜づゝめぐりてやせる。明ればいで。野山は交りけり。春秋の花もみちのさら也。月の夕も雪れあし。一日もあこころさ。されば入るまの花のいつころとどひ。あしこのこずるのいつ染んまどとふに。其まをさげに必たりす。い何となく黒き頭巾からふり。身のたけにあまる杖のうちに。まはみてまか奇をいれ。ひさ



このさましる白うねの器に酒をたへ。あがくとさげて。腰りふへにて歩む。或春仁和寺
 のどたりにて。俄なるむらさめよ。人皆をひてかけりしる中に。この翁のみさどかなるおも、
 ちにて。ふるりはるさめうやうひしき。今もとすききと。四十年前語る人も侍りし。花のもとよ
 て唯ひとり酒のみ。眼鏡めがねをかけてゆき、の人を見。又何かゑがけるものを何処にたづさへて。木
 はゑだふりけ。ともとす。その比京師崎人の第一名ありまどかや。また書畫の鑑定あり長玄とぞ
 とあん

世は澄りぬきひりこそ濁り酒酔はゑるにてとらうの水と戯りまきをのし。

崎人傳卷之四 終

崎人傳卷之五

並河天民

附馬杉亭安

天民並河氏。諱亮。字簡亮。即通名とす誠所五一名永崇。字永父。仁齊門人五畿内の弟。城南鳥羽横志の作者。後伊豆三島に住す。太路の八。自丹波と書るのカンシヤその本國歟。爲レ人ト應計才秀。比とべし類なし。伊藤仁齋に學ふといへども。後学の學とうがひて。白一家を成せと。其説ハ天民遺言に見ゆ。此中伊豫松山に下り學を講し。別小臨きて。其國老の請ふ應して著せる松山語話一篇。其領地を治せらるるの一己の治せらざるなり。唐禪僧の蒲團上よ。鼻端の白きを守ることをさにあらずといへるまこと。其經讀の才を見るべし。又論語郷黨篇小題して○畫得キ金毛。獅子。畫キ皮ヲ不レ畫レ骨ヲ。那カ簡カ遺カ骨ヲ。逆々トと書。其説ハ。此篇孔子ハ禮貌を形容せりといへども。是皮毛あり。我を用うるも。是あらん。其月のみにして可也。三年にきて成ことあらん。或は訟を聞くと我猶人のことし。必也訟なからしめんかなど宣ひ。又魯政を聞くと三月。魯國大に治るよとさその膏也。といはれしとそ。仁齊歿後其徒東遊に従ふものど。天民に属するものと分れさり。或時門人集りて。先生も一志を得給ひ。吾の何にのりかひ給はんなどといへる時よ。一人若まどさものり物の用に立へうらと。唯倉廩を守るにいてり。一粒米をも搦カへうらとといふ。天民。予らまどさ人にいかで倉廩を守らばと。先生笑ひ入れは。とけ入色をいへり情なき仰や。盜むべきものどを思召といへり。先生笑ひ

て。否いな自盗じどむ才ある人への托すべし。予の人に盗するべし人ありといへり。又東涯此人を評して其才の拔群也。されども六尺の孤を托をへかすといへるを。告るもの有。天民黙頭して。東涯よく我を知れり。自ら奪うばんのはかるべからず唯人の爲に欺あざむるべからず。東涯の是に反せり。危しといへり。其器量凡うくのみとし。官に上書し。松前に續つける蝦夷あまの地を。本國に屬ませしめんの志ありしと云も。歸らんと。三十有九にして歿せば事に不及。また國學をも心得たる人也。伊勢物語芥川の段を評て。比喻は躰。神代卷の文法をうけせるものあるべしといへり。此説の左注に。加茂真淵の左注の後人の裏書ありといふ説に違へり。又徹書記のよめる都搦衣の哥よ。「聞によも麻よのあらし都人うけやいのさる衣あるらんとといへるを難して。搦衣は情にあらはれ都といへる顔をたしかみせんとて。麻にあらはれ。綾か錦うとて。るをけけん。いと身き心づなりといへり。又松井幸隆か寄車戀のうへ「牛あがら引きもいれやとあけてまつ我かど過る小車やたれ。是は源氏物語の、たゞはかた。がへのとて。牛あがら引れり。門をあるといふ詞をとて。よく定めるといひあへりしを。難して。かくては何某の花巻をのこが妻のやのさま也。戀のうへいづくにも人目を憚ること似あらしからめといへり。按て此うたの近比上木せる幸隆は家集より見へす。其自録のはつかみ一首をさけり。うは故郷鳥羽に也とて。

霞けりさかき春とさくら鳥の鳥羽山まつの雪けあかくに



以上は前にいふせし大橋の妹は尼の傳をも話せし。馬杉亭安考人。始仁齋不學以。後此門人とありしがむかしがよりあり。天民の説に此翁からでいされる人も多く。予からでい聞傳へしもの多くあり。こまげ残りなく。お舉ぐ。又此老翁藏されし天民の著述。かゝる記の記あり。國文もまた凡にあらす。一かも寫本なきは去る人まれに。寄せなんを。さうへに。既に此記をぬしみを零して。己が發明にして。秋齋問語にかけるとをにくむが故に。事長けれども全文を左に掲ぐ。

かゝるき記

七尺ぶりりおけづきたる木ふの角を。あぐら足形の形ちにき、めに打ちがへて。神社はむねに。年の角をいふ、きたらんやうにたてるものあり。ちぎとどいふ。またのかたそぎともいふ。あるはかつを木ともいふ。度會の神主は。かたそぎの千木の内外はかきともいふ。木のつぎをさくくにしてさきさる。かたそぎといふ。打ちがへたれんちがへ木といふをさきさる千木といふなり。うつを木の丸き木を三尺四尺はかりにきまて。あるは三四五つはかき。かたそぎの間に横は打あらべたる物をぞいふ。やしたる鱈魚やうれうたちにかよひたれんか河を木といふ千木鱈魚のおれし物おあらず。延喜式に千木鱈魚木。とまはあしてししたれん。それよりちいちゝるきにや。さて此二つの木枝葉はもれ、やうお見へ侍る。内外にかのきとまのねを

とまよと侍る。ふかきことわごと侍らめとまらましくて。人またつ侍る。色くくそいふある。みあそはて、る得ぬ事をさるいふ。其中にも。是は何れふらき事おま侍ら以上きたる古しへは代に。人もまな代に。事もすくなく。かいらひはたなどやうは守るはしき宮づくまよまだなく。あめは下まろしめはせめまよみづは御あふかも。まかたらちがやるとにてお同ひぬへし。いよもたらふきたるや流れみはにわらふとく何かねて。なまの今の人のけりらのもと、まよひふせたらんやうよて。神社はかつを木おきあらべるそがしするものあり。田舎の人の是をからはれどりといふめる。是あくては屋根ぬいたる何かみはなりふしあらはれ出て。雨露雨にくちはつれて。や流のまよふきみじかけをば。かならず是をぞおく。むらまわらふけらもれにいかくてありけるを。楡皮にうけりても。猶このうたちをのまして。か河を木といひゆる也と。こまらなまありぬべきことあり。ち木といふものまよきてまれかき事にや。寶基本記といふ古きふみに。ちぎの智義ありあといふよりはじめて。内外の宮は内外外そぎ。陰陽のさかちをばしたるあど。何くれのふるきこととをま侍るま。まよぐにまかれと。まありぬべきともまきたらぬ。わらふくべき屋根の。先は流とまよる木をひまみさり打ちがへ。この木を便としてきてまよく。田舎人は合掌の木といふ。此木のうちありせたる。人の手ふたけをありせ。佛をまよむお似れば。かくり名づくるにや。いまはこの木のあまりを切けて、ろろ

へ調へり。あかりなる代にいろのまゝに殘して、うぐやの宮へは出たる也。是もあまかちにも
 さらかよと、のふることを事とせざる古しへの風なり。こまをばこして、今、檜皮ふけるにも。
 神の社に、此木をまうけるなりうのかまのたのづからなくてうきりさるに侍るめを。ひり
 びにてふまかひたる後。やまきまもの、様也とぞいふ。是らのたをとりあすこしかあふんや
 うあり。されど中臣の板に。宮柱ふとしりち。千木高知て。まづの御安らかよ仕れとら入る
 り。皇居れいりおもひけやのに。まよくま作りてられて。うつくさまをかきけら認る
 辭ども也。宮住ふとててる宮むり。かやふまにやれ。むらまきにまき。その何くれるまは。
 清々にと、のひるをぞせにばまよ。まの合掌はまきりうろ入すて。屋根のへにつらぬま
 ぶしふん。田舎の里はあれるまの。山のはし。やぶかくれに。木ぞ竹をまき取し、ま令せて。古
 きむしる。破れともやうの物どりうまお母ひて。老まぼひ病つゝまきるうるなをれし入
 置るもれ、屋根のやうにいろまうあふんま。千木の合掌の木の末をあましるはかまふ
 んどいんも。ままし事ともいひがくや侍らん。猶まちに事わりこそ侍らぬ。まきまかうや
 きは事は。ふかくこ、ろにいまぬ筋なれば。しひてもままをてやまぬ。正徳三年長月、あり
 に。京の北なる岩屋山見にまうける道に。雲がはまといふ山里を過ぬ。まこしおくまりる家
 に。千木ま揚るるをま見つけぬ。あやしのこま。是は神の社にばめる物を。うぐやぬく

るまぬ家に何くまらる。心得ずも侍るうな。ううやまは世にうとま片山里まとい。古き事もて
 何へて。種姓しんじやうなといひはげむ。もりの遠きむうしにありけん國の宮つこなといひけんたひは
 子孫はままよまれまなむのしたまえて。あくことなる家作まて住なるにこそ。おしあて
 ぶれもひなれ。ままよ侍して。田がへするをばこにま。これ何れまもまき里人れ家
 居ま侍るま。あのやうの木に神の社にこそまるま。まありこまめと猶ま。ま
 まどのりはへらま。むりより誰くも仕りまま。あやしむまことにも侍らぬ。
 是よりあく入給いを見まびな。いづれのあれやうの木まき家や侍らん。心得ぬ御まも侍るの
 ま。まき打りへして後。まうくいへままま。むつうしのとひこと。はらまらる
 なり。山里人のうまくな。るくせなるべし。入行ま、に見れば。げにもいとま。まかきるませや。
 何らるべに窓ぬり殘しるのむまやまでも。大かまの千木をま揚る。猶まとわりもあらんま
 ろくまのまやま。翁まあひぬ。ませきにねままかけて。道のかまへままむ。爪木折るま
 るを見て。まはわけびらやいふまといひより。まてまま。指ましてまのまにのまにする
 ま。まにままへは。打笑て。まらにてま侍る。軒端よりもひませもてまぼりて。終れ何か
 おそひ竹をかためま侍る也。まれど風つよく吹まきるま。大うまの此破風まより吹ま
 ちまへるま。まらま行まかりのかまめ。まてい。かせのちかまにかちがま侍るに。此木まおまへ

たりとい知りぬ。かのまつての太はとのつうにて。柴の葉のうつら小なりいつらもはとぞ。このく
つて鳥はこれて鳥といふがさきさきすちなることり。たさのたもひより侍らん。千本といふも
のき。こ・らの人さまよくにめてあつうひきこ文げんに。是もささしき筒をばけんに知れ侍らざ
りしかかくかた田舎は山里にてあらひ知りはへりぬれぬ。失ての田舎ふきとむるといふのう
や字はことによそ。雲が畑といふの京より三里のかりも北へいりて岩は馬小野は郷の山里。法
皇の御封。谷川いときよくながれさり。香魚を貢として御に献るよぞ。

子文輔二章の時。父に別れしかども。其書を開て書と書とを去て京師に名あり。學文の名
はさしも聞えざりし。六十余にして近年歿せり。天民の説は。儒の書と書とを去べし。然らざれば
貧にして。學界に落といへりぞぞ。私撰する。仁齋文集にへ雷密の説ありて。儒を名と
し。和を醫にらるることとを誦れり。所見異なり。

○因に記は。右門人の馬杉老翁の。若て健ある人にて。九十に近き比。嵯峨へ花見にあのみ
あらし山の奥大悲閣の開帳まようる明の日。又同時の哥の會おひさ。その開けひ又孫に
誘れて。再び嵯峨に遊れしが。けふは老人の遠者だてもみぐるしとれもひて。大悲閣へハ
孫斗やりて。大偃の川邊に休らひ。花ばかり見てありしといわれき。膳所の親族のものとハ
も折く歩みくあそぶ。道あらきよも。足駄にて京中の歩行の苦とせず。唯老のひとりあ
のみを子息のとぶるゆゑに。友をいさひていつこへもめかれし。眼もよくて。此比まで

細字の寫本をもせらさし。殊お哥を好きて。若きときの高松宰相重季郷の御門人にてあり
一とぞ。哥集の生存の日。予にも托せられて一校合に及びぬるが。よき哥ども多かりしを。
おぼえず。中にもめ例らしきが心にとまりし。

先親に夕定晨省の老ある人。とやづのへに上り。かりるめに江戸又下るを歎きけるお。
大義を示して儼別せらる

たらしめに仕ふる道も二つなき心にいろげ東路の旅

胡子無髪といふ古則を題して

よしは山花は一朶もあかりけり器にも尾にもかゝる自雲

老子經の直をかそへて直さしといふことを

かぞふれの身の小車はこれもあし何にひうる。心なるらん

山家を

ま、はそのかしこの谷に住里のかあらはとありあるとしもさ

これの下の句にたもひよは論語の經を用られしが興あり。

は何か月を

老らくは末のつかなる身に不思ふ今より月の帯くのうけ

こゝに殊勝ふぞ。百歳までも見えしが。老いのふれまがさき。九十四にて歿す。

北山友松子

友松子の北山氏。通名壽安といへり。長崎の人。唐人丸山の遊女お會して産す所也といふ。婿をもて出身せしとさ。その系圖をとはるゝに。その長崎遊女の子とのを書付て出したる器量と世に稱せしとぞ。其徒の記せるをみれば。其爲の人名を名とせせ。利を利とせず。能善をよみし能惡をにくむ。性佛を好む。無活人を嗜む。是ともて鼎湖は神書を聞の淨者に授り。長沙の心法を漸の異人に傳へ。日に惟ひ夜にたもふと三年。心融。疑釋。求は隨ひて首を施すに。効驗符のおとく應ず。いよと三十ならずして洛に至り。諸國の諸侯のため。寶をもて優待せらる。又奇蹟の問祖。及即非高皇の諸大老贈言して美せらるといへり。その著述をみるに。實に博學強記なるがうへに。治療の才前後との類稱あれバ。其徒の記せる旨私せるにあらず。凡當時の醫名ある人といへども。東垣丹滯の爲屈といづることあはざる間に。獨り長沙の長するを規範とし。下も明末の諸家をも採りて。任便とす。其言曰。如爲人治療。則不可不全。蓋仲景之書也。又文字は捨法を明にせる所の増廣口決集に。中山三柳の文章文字を改正せし見也。加之多能あして卜筮風鑑地理星命の學のときも。門人の才を量て是を誨とや。或は醫人と諸學。則告之に親疎を不別。其非を見て人お不讓。説面お辨明して。其誤りを開てい命糊に不忍。發直に討論と。唯此人に補な



くして。方寸に愧ることを恐るゝ也。故に世醫或は狂とし。或は直とし。且譽、且毀るどかや。門人の請によりて所著。剛補衆方規矩。評議纂言方考。指廣口決集等。皆四十未滿の所爲也。後又方考總意あり。凡考述。他の書よりて吾意を述るものにして。一家の成書をし。是即一家の所立あるべし。尙此人の生平にひきて。聞傳ふる話多けれど。疑しきをもてよゝに録せず。

戸田 旭山

旭山戸田氏。自號无悶子。通名盤宮。東備の人。浪華にきて醫を業とす。門に師醫戸田齊濟と稱せらるもめつらし。あるひは唐服を似たるもれを着て劍を負て歩しこと未あましと也。木脚に委しく。醫生のこゝろを好む。好事の士門人とされるもの多し。香川太仰秀庵が樂選を難して。非樂撰を著し印行す。爾れどもまゝ秀庵の才を愛して。それ子のまゝが門生とせり。好むすれども其あしきを去り。よくめども其よたをしるといふべし。醫癪もどよりよくいへども。病客拾人に限て。此數關されば。まゝ他人を療するまどおし。故に貧乏あり。あるとき攝津國高槻近邑の豪農。物産の門人にてひひに出入する人。其母の病は診察をこふ。請に應じて至りしが。不起の症あるを辭して歸らんとする時。近隣又親族の病人これの診察をこふ。四五人の診しふるが。遠く迎へよる人なれり。此病を幸小尙醫治をこふもは多し。爰にて戸田氏怒を發し。主人は對しの、去りていふ。子の不孝者也。不起の母を題して。之も去るぬ人々の醫治をせしめんとするかや。元來癩症

にてよく怒る人なれば。大きに顔色を損じたれば。やうくにあだめて謝してうへせり。其後横堀邊にてやらん。磁器を買んとて。どある見せへちよりし。内より一老婆出で。戸田氏をみてさめぐと泣く。おどろきて何事ぞといへば。婆云。公のまりのまのぬことおれは不思議にお母しめさん。吾ささや愛せる孫ありて。病をもりしうば。公を迎へしに。拾人に限りまよふ病人あしとてわのしやまじしが。孫の終に身まかりぬ。時節にてもあるべけきと也。もし公の手を經たれば。生もし侍らんにと思へり公の御かやを見るにゆけてうらめしとて。涙せまめへす。おににて戸田氏甚感懐して曰。吾あやまてまじく。もどより數人に心を配まがしといへども拾人と數を限れるの吾あやまり也。然れども吾老ぬ。今さら此限をこえは。老て利を食る心生ずといはきんも口を。吾の是にてはてんといひしが。後いく母とあく歿せしやきん。是は物産の門生。まじしく見聞人のものがたりあり

隠家 茂庵

茂庵の江戸御家士まで。隠道せる人也。隠家とも。梨本とも。もどめぬ橋とも。名をたへるは。それよめるうたふよきり。されど其隠家のもどれうの書あやまてるにや。いと心得ぬ事のおれをこゝにもらしつ。かくれ家百首とて其相しきる人々よめる詩をあつめたるもれあり。其はたれに出せるい。

そむ庵を世の人のかくき家といふをさへて。

人しきぬ身にまうすればおのづからもどむともなき隠家にして

梨本といふい。もとより其庵の前に山梨の木れい。

のがまかひ世にふり果し老れ身の隠住へき山梨は本

もどめぬはしといへるよしい。源義豊といへる人のもとより

隠家の山ももどめず世を渡るためにやかけし前の棚橋

とよみておこせざる返事に

とか庵の山ももどめずるあしれみじのくまゆる世を渡るやど

といへるによとりとみん。此人梨本集といふものを著して。制詞は類を擧て。琴柱に膠をべから

ざるを論そ。凡哥道に古學を稱るい。此人近世に魁にして。恭の陳涉に比そへし。されはま、に其

説を記し。梨本集の一旦江戸にして梓にはぼりしかども。そは本世に流布せること稀お。まゐる人

勢ければなり。其序よいつく。古今集の比より萬葉集にもよみたる詞は中にても。いづくの戀ぞ

つかまか、れる。ま、たく待と君かさまやぬあどやうの詞を不用。其比されみ人のけういぬ。本

名。たけそかの類。又このくしくて聞ぐるしき詞をよまざりま故。是より詞は善惡の出來る

事也。本來の一物に善惡邪正のまけれども。陰陽と分き。清濁輕重天地とありては。善惡勝劣ある

道理也。然れ共ひとの心まらくなり。好むことを是といひ。不好ことを非といふよりして。誠は

善惡の脇になりて私れ好惡の沙汰にありより。僻言多く出來りて。それより未くより。先達

の僻意を道は格式とまて。ま、く僻言を取立しより。我意地儘は利口をたて。よるまからざる

例を引。あるまじき遠慮をいひて。廣く御惠み。賤の男賤れ女まても。此道におもひかうんに何の

障もなく廣くと通り。正本れかづら永く傳り。近くい人れ心を慰め。愛を忘れ。遠くの家をど、

れへ。國を治る中ま、ちと思召て。撰集をも仰付られたることあるま何れのことよりか哥の詞に制

といふことを書出し。五てんの詞。主ある詞。よむまじき詞。遠慮すべき詞。俊成の好まよむべか

らずと。宣ひしことば。定家の不庶幾と宣ひし詞。にくしといふ詞。いとしからずといふ詞。といひ

て。詞に多く關をすゑて。人の趣がたさまやうに道とせま、することは。以外の邪道。哥の零廢すべ

き端りとおもへども。哥の道不案内あるに。能き師もまければ何かあるま。此冊を思ひ立て

不審を書き記しもの也。中零惣まてのこと。六條家の説をい二條家より。いひ破て不用。二條家をは

冷泉家よりそま。其後にい爲世卿の門弟。爲兼郷の門弟。爲相郷の門弟。其家々をいんで他

を請り。家意地のま、に利口をいゆるより。色くの僻言出來たり。又い其師匠は物語にことへ

い。ま、くといふ五文字の丸の名哥の五文字也。然れい心得してよみいへま、い、い、ま、た、る

と。其弟子覺書おして置。又い物語したるを。そのわけをいま、い。讀へかづざる五文字を制せよ

きしといひ傳て。今のよびぬまどおなを極きま。簡とやりのことを法度也といふは。そのやへは其家の仕置に。酒を呑へうらはと法度になて。物見はへからずとあるに同じ。此法度おけれと酒を過し。遊興に斗か、まて。作法のあしくなるもえ也。然るに正月。又の五節句にも。祝言珍客もも。旧は家の法度也とて出さず。正月の万歳。伊勢代かくらの太鼓打を見るかど制はるおとくお。つ、どめをいふの辭言どおもへども是非なし。下序文猶か、ス義論多く。本文にの近古制せらまし詞を題して。例を引き。のた制の詞とてる一冊、ろの外詞の注の證言。主ある詞あといふ。みな新古今はき、れまどのみを書て。他は事を用ざるの。新古今集斗り。知たる人の仕出しる事れやうよおぼあといへり。哥書にあきての。古より近世に及て。甚博識と見也。書さまは通じやそからんまどをれもふゆゑにや。俗言にて。又くぶくしき所もあれと見所の拔萃はまなれ。志ある人のもどめて見るべし。其外著書の名目。おつづり。茂安がひとり言。辭言さかべ。庄九郎物語。紫の一もと。若ひかさきなど。梨本集の奥に出たるの。世も傳りてあまやしらす。梨本集を著す時元祿十一年戊寅五月。齡七旬にあよりて。赤貧の上しをゑるその。いか、有けん。無學無智にして道理お通じ。哥學をもつとめされの哥とよむことあしといへるの。卑下にて自負也。奥書おの露寒軒とも見へたま。

僧 丈 艸

丈艸。俗姓の内藤。世々尾張犬山の臣也。繼母に仕へて孝あり。弟のろれ生る所なれ。家を譲りて心を慰んど謀り。右の指を疵付て。刀の柄握がふしとて仕を辭し。剃髪し禪を宗と見。其時口號。

多年負屋フツ一蝸牛カウ。化カ倣フ二蟬輸ト得ト自由ナ。
火宅最モト惶ツレ涎シ盡ス。偶ニ尋ナ法雨ニ入リ林丘ニ。
涼かせにさめるを雲のやどりあり

湖南の風景を愛しけるにや。粟津の龍が丘に庵を結ひて。佛幼庵と號く。今土人圃のまといふもの也。もど詩文を好しが。又芭蕉れ翁に從ひて俳諧をよくと。されば此庵も翁を開祖とす。其滅後三年籠りて。一石一字の法華を書寫し。經墳に筑けり。寐轉チ艸といふ書を著して。道俗をいましむるもの。名にも似すゑあがらつよみがたれ殊勝のもの也。此師唯誹諧をもて名をまられるよ。かへりて其清操のうくれたるべしと惜む人もありき。いかにのむととる所にあらざまのこそ。いせをも。此道にのま遊ふ人あらば。其至るところ知べうらまると評せられき。其門人の發心せるを警策して

蚊屋を出て又障子あり夏は月
など。其意凡さらざるを見つべ。元祿十七年二月廿四日。其庵お寂そ。



安藤年山 附 扑翁

年山安藤氏。諱ハ爲章。初名通稱新介右平本國丹波千年山あるをもく自ら年山を號とす。其兄内匠爲實と共に儒を學ひ。父のゆ縁をもてとも伏見の宮に仕ふ。後又同じく水戸に参りて。彰考館の寄り人にて。日本史及禮儀類典の撰にあづかる。兄は七百石。弟は三百石を賜ふ。兄は人うらひよく知らず。爲章は國學をも好む。詠哥ハ中院内府通茂公御門人あり。源義公僧契沖に万葉の注を求まふに及びて。命を受け。老はく浪花に至て其説をうく。されば契沖の行實を著して。其若書年山打聞に記せり。今此冊子に取れる所あり。凡此打聞のうち若所をもて。其學術も。人どあとの温恭もはうりえらる。又紫女七論を書し。式部の契操才秀を褒め。源氏物語の大意をも委しく論す。としむらくは梓にのぼらざれば見る人少し。其歌集と千年山集といふ。尤此人に於て舉いふべきは。家祿を益賜らんの命有しと死。産子ありをもて辭し。終に他姓を養はず。身歿して家も又絶りといふ。人のあしがたき所として。吾天を安んじらるは節義稱とべし。兄は家ハ今猶彼府ありて。子孫相續とぞ。子ありをもて祿を辭せる一條ハ。丹彼出雲の社司其族ありて語るところありと

其父扑翁。初伏見に官を仕ふ。致仕の後。祖父の故址をもて。千年山の麓尾口村に隣て塋園を修理す。老を安んじ。山家の記といへる一篇。年山打聞に出つゝなまて文章いとよし。陶靖節を慕ひ。歸隱の圖を自ら壁上に書す。其集を左右よそ。又佛理に参し。其集を好

ひ祖のとて其國に入つての景を名付しが。荒行所も見ゆるにつれて。是をも自うめして子孫のよめに残はとて。

千とせ山八のさかひを寫給は是だに殘れ問人のよめ考かく凡人ならざりしかり。息兄弟の傑出せるもむべなり

井上通女

通女は、讚岐國丸龜の士井上儀右衛門某女。幼より書をよみ。詩哥とも成人にまされる才女也。十八九の比母ひ。其君の母公に侍て江戸に行く。此時の道の記を東海記行と號く。九年をへて歸るとたの記を歸家日記といふ。後三田茂右衛門といへる士に嫁し。傳右衛門義勝を産、是候の侍讀の儒臣となり人才志論。養子訓等を著と。通女所著の。右二紀行の外も。其家集を和哥往事集と名つく。詩哥の紀行の印本あるに譲りてこゝあつらせり。其氣象の秀をいひ。解桂禪師と儒佛を論して。戯によめるといくるに

常にゆくまちちくくバこそ世をうみればあまの乗たる舟もこのよめ

此女の事よ聞る話もあれど。さぶかならぬ記さす。

有馬涼及

附子孫三人

有馬氏涼及の名。父子兄弟に及りして四世醫を業とす。伊藤氏と四世の交りあるよし。蘭嶋の傷

寒論神解は席お出る。仁齋先生の考より。東涯蘭嶋兄弟を經たるあるべし。世々國手の稱ありて世々不拘也。其狂態傳ふる所の笑話多し。初代涼及號三臥雲。又存庵といふ。

後水尾院特徴て御醫となり。階法印を賜ふ。御療の故事の。衆醫評を経て後御藥を奉るを一時帝御惱甚しき時。翁診し奉りて曰。我よく治し奉らん。然もも衆議を經るとあは不能と。

止事を得せ翁が意およのするよ。やがて調製し。手煎して奉る。瀉下して後御惱速に快復よし。くける。こき承氣湯を奉れば。もし衆醫にはうらんには必不肯ことをれまひけるぞ。又ある時急お召る。に。折ふし恭をかまえて。參内進々に及び。頻に御使を下さるれども猶局を終ざりしりの參らば。是に罪せられて京師を遁る。大津に整ひ。然も母となく召還されぬるぞ。二時

某國侯の病によりて其國に至り。滯留數日に及ぶ間。請ていはく。あより召仕ふもの女ならで柔順ならせ。湯がはくの借し給を。即日侯の侍兒容色あるもれ而人をあつらふ。に。よしといひて喫茶喫飯唯これを使令し。夜も左右に臥しむ。然もも情を通するに不及。やどなく侯の病愈て京に歸る日。其婢を請て伴ふ。やがて今度の謝におくふる所の金をもて。他に嫁せしむ。

「一日嵯峨角倉氏に治療お趣くの路次。大樹の櫻を見て購ふに價甚貴かりけれり。彼家にこひて其金を借り。數多の人に荷はせて我家に歸る。さて庭によこはせられども。植べた地なければ人々いのにせよ」といふふ。よし。さきがらかけ。鎌倉がらみる。とく。せんといひけ